

九州大学 健康科学センター年報

自己点検・評価報告書資料

第 32 卷 (平成21年度)

教 育 活 動	3
業 務 活 動	15
研 究 活 動	51
社 会 的 活 動	85
委 員 会 活 動	93
資 料	99
人 事 等 の 一 覧	113



九州大学健康科学センター

平成 23 年 3 月



スタディオン・クレスト

人間が姿勢よく立って歩くさまを「健」という。歩くふたりの間に横たわる二重のらせんには、
“Read Nature, Not Books” と刻まれている。DNAの生命の糸は、普遍の記号でつづられたヒト
と生物たちの物語、温古の手がかり、知新の源泉である。

砂漠の朝、太陽が昇る。巨大な日輪が出始めてから地平を離れるまでの時間に、人が歩いた平均
距離を、古代バビロニアンはスタディオンと定めた。この単位で古代人たちは、地理を測り旅程を考えた。地球の全周は25万
スタディアと記されている。人間そのものが社会活動の基準にすえられた時代があった。世紀で刻むにはあまりにも巨大な進
化の流れ、そのなかをヒトは歩きつづけてきた。

「歩けないヒト」のためには医学が生まれた。現代文明における「歩かなくなったヒト」を反省し未来を拓くため、「歩く
ヒト」の健康科学は、物質ではなく生命に、神よりは人間に、具体具象の基盤、新しいスタディオンを探るものである。

夜の闇をたちきる黎明、スタディオンの刻まれるときであった。

効果的、積極的な情報の発信に向けて

健康科学センター長 大柿哲朗

平成 21 年度は、前年度に開始された「5 年目評価、10 年以内組織見直し」制度への対応に追われた一年でした。健康科学センターは、最後までヒアリングを受けることになった 3 部局・部署のひとつとなり、計 4 回のヒアリングに臨むことになりました。ヒアリングの最終結果は、「次の意見に十分留意しつつ貴部局の計画を実施してよい。活動の拠点を伊都地区に移すとともに、高等教育開発推進センター、留学生センター、人間環境学府、病院等関係部局と連携し、心と体の両面から学生の健康管理支援に当たる具体的な体制、方策を今年度内に示すこと」、「留学生を対象とした健康管理体制を強化するとともに、大橋地区の学生メンタルヘルス支援体制については、適切な対応をとる必要がある」というものでした。また改善意見として、「分野ごとの適切な教員数のバランス（体育と診療）を検討すること」、「学生、教職員の健康管理（とりわけ精神面のケア）業務を充実させること」が出されました。

ヒアリングの度に、この「年報」に記載されているデータを基に資料を作成し説明を行いました。しかし、大学の理事の中には、「健康科学センターの活動内容が見えない」という意見もありました。健康科学センターの教員の多くが“我々はこんなに頑張っているのに”という思いを抱いているわけですが、必ずしも我々の活動は執行部の隅々までは行き渡っていないことが悔しい思い出です。前年度の年報の巻頭言にも記載しましたが、健康科学センターの教員は、どちらかといえば、自分を売り込むことが苦手な人が多いように思います。これからは自分の特性を生かし、ひとり一人が教育、業務、研究、社会連携のいずれかで“一人一アピール運動”を展開すべきではないかと思えます。また個人的な積極的な情報発信とともに、健康科学センターの活動の効果的な情報の発信も必要と思われます。

健康科学センターの組織としての情報発信の手段のひとつは、この「年報」です。この年報は、約 300 部を作成し、全国の大学や研究機関、公的機関あるいは学内の各部局・関係部署、個人にお送りしています。この年報は、本センター設立以来一度も休むことなく、毎年発刊してきました。年報の資料的価値は高いものの、百ページを超える冊子の全てに目を通して頂ける方は少ないものと察せられます。他の情報発信の手段として、本センターは「ウェブブラウザ」、「Campus Health」、「かわら版」を作成しています。「Campus Health」と「かわら版」は学内向けですが、健康科学センターのウェブブラウザ(<http://www.ihs.kyushu-u.ac.jp/>)にも一部掲載しています。この年報とともに、健康科学センターのウェブブラウザを充実させたいと思えます。今後は、ウェブブラウザを含めて、これらの情報発信の手段を一層充実させ、効果的で積極的な健康科学センターの情報を心がけたいと思えます。健康科学センターのさらなる充実と発展を目指す所存ですので、ウェブブラウザやこの年報への皆様方の忌憚のないご意見等をお寄せ頂ければ幸いです。

教 育 活 動

概況	3
内容	4

教育活動

概況

健康科学センターの教育活動としては、全学教育、業務を通じた教育、大学院教育、課外活動の支援、研究生指導、そしてFD活動がある。

全学教育としては、第一部門担当の健康・スポーツ科学関連科目（演習、講義、実習、保健コース）、コア科目（共通コア、理系コア）と、第二部門担当の周辺教養科目（健康科学）と高年次教養科目（応用健康学、心理健康学）が開講された。開講された科目および受講者数の一覧を次頁に示した。健康・スポーツ科学演習では、平成20年度にテキスト（実習で学ぶ健康・運動・スポーツの科学、大修館書店）が発刊されたが、本年度は同別冊が発刊され、これに基づき指導が行なわれた。また、学生による授業評価を受けているが、概ね高い評価であった。しかし、実技・演習系の授業においては評価項目の内容が実態に合わないため、独自の評価尺度を作成することになっているが、まだ完成はしていない。早急に作成する必要があるだろう。

業務を通じた教育には、定期健康診断の待ち時間を利用した健康教育、サイコロトリート（箱崎分室）へ来室する学生へのリラクゼーション指導、肥満改善および生活習慣病予防支援を意図したウェカムホームページ型健康支援プログラムなど多様な健康指導・支援があり、第一部門と第二部門とで協力して行われている。

大学院教育としては、人間環境学府と芸術工学府の教育・指導のほか、大学院共通教育科目があり、第一部門と第二部門の教員が担当している。人間環境学府では、第一部門9名の常勤担当者によって、修士課程科目10科目と

博士課程の教育・研究指導が行われた。平成21年度の入学人数は、修士課程12名、博士課程1名であり、博士課程の定員が確保されていない。博士課程では3名が博士号（人間環境学）を取得している。また、修士論文の中間発表会、修士論文発表会、および博士論文公聴会が開催された。芸術工学府では、大橋キャンパスで「生体機能学特論」が開講され、大学院共通教育科目は、「大学院生に対する人間教育」を平成19年度から筑紫地区で前後期に開講し、健康教育が行われた。なお、研究生は合計12名を受け入れている。このように、大学院教育においては、極めて充実した教育・研究指導が展開されている。

課外活動の支援では、健康・スポーツ相談室を開設しているが、相談はほとんどなく低調であった。広く本相談室の存在を知らしめていくために積極的な活動が望まれる。体育総務委員会主催の強化講習会が2回ほどあり、健康科学センターの教員と大学院の学生が担当し好評を得ていた。しかし、もう少し体育総務委員会と健康科学センターの第一部門との連携を強化していったほうが良いと思われる。

FD活動としては、各種FD研修会（全国大学体育連合、九州地区大学体育連合、全学FD）への参加のほか、健康・スポーツ科学科目FD研修会（非常勤含む）の開催し、活発に行っている。

以上、健康科学センターにおける平成22年度の教育活動は、総合的にみて極めて活発に実施されたと判断される。

（文責：橋本 公雄）

全学教育の開講状況

科目区分	科目名	単位	対象学年	開講期	開講数	受講者数	備考	
健康・スポーツ科学科目	健康・スポーツ科学講義Ⅰ	2	1年	後期	2	28名		
	健康・スポーツ科学講義Ⅱ	2	2年	前期	1	22名		
	健康・スポーツ科学演習	2	1年	前期	50	2,700名	必修	
	保健コース	1	1年	前期	1	4名		
	身体運動科学実習Ⅰ	1	1年	後期	35	924名		
	身体運動科学実習Ⅱ	1	2年	前期	13	299名		
	保健コース	1	2年	前期	1	2名		
	身体運動科学実習Ⅲ		1	3・4年	前期	3	57名	
					後期	2	22名	
身体運動科学実習Ⅳ		1	3・4年	前期	3	4名		
				後期	2	23名		
理系コア科目	健康科学Ⅰ 「健康と運動の科学」	2	1年	前期	1	276名		
	健康科学Ⅰ「精神医学入門」	2	1年	前期	1	203名		
	健康科学Ⅱ 「運動とスポーツの心理学」	2	2年	後期	1	72名		
	健康科学Ⅱ「健康科学Ⅱ」	2	1・2年	後期	1	184名		
	健康科学Ⅲ「アスリートの食事を科学する」	2	2年	前期	1	24名		
高年次教養科目	理系主題科目Ⅷ 心理健康学	2	3・4年	前期	1	24名		
				後期	1	34名		
	理系主題科目Ⅷ 応用健康学	2	3・4年	前期	1	20名		
				後期	1	11名		

1. 全学教育

健康・スポーツ科学科目として開講されたのは、必修科目である「健康・スポーツ科学演習（保健コースを含む）」（2単位）51コマと、選択科目である「健康・スポーツ科学講義Ⅰ」（2単位）2コマ、「健康・スポーツ科学講義Ⅱ」（2単位）1コマ、「身体運動科学実習Ⅰ」（1単位）35コマ、「身体運動科学実習Ⅱ（保健コースを含む）」（1単位）14コマであった。また、高年次生対象としては、「身体運動科学実習Ⅰ・Ⅱ」（各1単位）10コマが開講された。各々の具体的な内容等については下記を参照されたい。総開講科目数は112コマであり、このうち常勤が65コマを、非常勤が47コマを担当した。

（文責：斉藤 篤司）

(1) 健康・スポーツ科学関連科目

1) 健康・スポーツ科学演習

全学生必修科目である「健康・スポーツ科学演習」は、すべて、前期に開講された。具体的な実施内容は、下表に示すようなものであった。なお、この授業では、共通教材として、2008年3月に発刊された「実習で学ぶ健康・運動・スポーツの科学」および2009年3月に発行された「同別冊」（いずれも、九州大学健康科学センター編、大修館書

店）を用いた。

<授業内容>
A: オリエンテーション, 健康とは何かについての講義, 脈拍測定
B1: 健康づくりのための運動に関する講義
B2: 最大酸素摂取量の測定
B3: 有酸素性運動実習
C1: 身体と心身に関する講義
C2: 身体・体力測定
C3: 栄養評価, ストレッチング実習
D1: 動き・運動・スポーツ科学に関する講義
D2: 筋力・敏捷性の測定
D3: SAQ・筋持久力トレーニング実習
E1~3: コミュニケーションゲーム

（文責：杉山 佳生）

2) 健康・スポーツ科学講義Ⅰ・Ⅱ

①健康・スポーツ科学講義Ⅰ

健康・スポーツ科学講義Ⅰは、後期に2コマ開講した。
・月曜日第5時限開講
スポーツおよび健康に関する現代的諸問題について、多

様な分野の観点から解説した。健康ブームが生み出す諸問題、睡眠、ホルモン分泌リズムを応用したダイエット法、ナンバ歩きの特徴、体内リズム、記憶、笑いと健康、修行と心身関係、スポーツマンシップ、武道と感情表出抑制など、多岐な内容にわたった。

受講者は21名、4年次の学生が4名含まれていた。

(文責: 西村 秀樹)

・金曜日第5時限開講

スポーツや日常生活において、実力とは何か、実力を発揮するとはどういうことか、どのようなプロセスで実力発揮がなされるのかについての理解を深めることを授業の目標とし、主にスポーツ行動や心理社会的スキルについて、心理学的あるいは認知科学的な観点から解説した。また、実力発揮に結びつくと考えられている心理社会的スキルトレーニング法の実習を行った。受講者は、伊都キャンパス開講初年度の後期の金曜5時限目ということもあってか、5名と少なかったため、授業は、ほぼ全体を通して、演習授業のような双方向的形式で行った。

(文責: 杉山 佳生)

②健康・スポーツ科学講義Ⅱ

・火曜日第5時限開講

前期火曜日5限に開講した。受講者は22名であり、そのうち19名が2年次の、3名が4年次の学生であった。

現代生活と健康問題（生活習慣病）、特定病因説とその破綻、社会変化と健康・福祉、現代社会とストレス、生活習慣病の各論、健康と身体活動との関わり、健康の維持増進の手段としての運動の科学的基礎等について講義を行い、定期試験の成績に基づいて評価した。

選択科目であり、しかも伊都地区での5時限目の授業を受講する学生は熱心な受講態度であり、定期試験の成績も例年になく良好であった。

(文責: 大柿 哲朗)

3) 身体運動科学実習Ⅰ

身体運動科学実習Ⅰは、伊都地区において1年生を対象に選択科目として、後期: 12コマ・35コース（集中1コースを含む）が開講された。今年度の受講者は、924人（登録者数）で、種目内容（コマ数）は、テニス（5）、サッカー（2）、バドミントン（8）、バスケットボール（1）、ソフトボール（2）、卓球（7）、バレーボール（1）、ソフトバレー（1）、ウォーク&ジョグ（1）、筋力トレーニング（1）、ゴルフ

（1）、ヨガ（2）、ボディワーク（2）、スキー（集中コース: 1）であった。

(文責: 高柳 茂美)

4) 身体運動科学実習Ⅱ

身体運動実習Ⅱは、伊都地区において2年生を対象に選択科目として、前期: 4コマ・13コースが開講され、受講者は299人（登録者数）で、種目内容（コマ数）は、テニス（2）、ソフトボール（3）、バドミントン（2）、バレーボール（1）、卓球（2）、ヨガ・ピラティス（1）、中国拳法（1）、ボディワーク（1）であった。

(文責: 高柳 茂美)

5) 身体運動科学実習Ⅲ・Ⅳ

身体運動科学実習Ⅲ・Ⅳは、箱崎地区および伊都地区において、高年次生対象の選択科目として、前期に箱崎で1コマ・1コース、伊都で1コマ・2コース、後期に箱崎で1コマ・1コース、伊都で1コマ・1コースが開講された。受講者は、前期62人（実習Ⅲ・58人、実習Ⅳ・4人）、後期42人（実習Ⅲ・23人、実習Ⅳ・19人）であり、種目は、箱崎が前期: バドミントン、後期: サッカー、伊都が前期: ソフトボール、バドミントン、卓球、後期: バスケットボールであった。

(文責: 橋本 公雄, 大柿 哲朗, 西村 秀樹, 杉山 佳生)

身体運動科学実習Ⅲ・Ⅳは、箱崎地区で火曜の1限目に開講された。種目としてサッカーを開講し、受講者数は23名であり、全て男性であった。ほぼ全員が、理系の学生であった。参加した全員の士気は高く、極めて高度なテクニックを有する学生がいた。数名が欠席するとフルメンバーでのゲームができない場合が多かったのは、その点は課題として残された。

(文責: 熊谷 秋三)

6) 保健コース

受講者数は健康スポーツ科学演習の登録者4名、身体運動科学実習Ⅰの登録者1名、一時的な怪我等により一部の授業のみ参加した2名（健康スポーツ科学演習登録者）であった。一般コースの内容も交えながら、受講者の心身の状況を考慮したスポーツ種目（ダーツ、ビリヤード、卓球、ゴルフ、筋力トレーニング等）を取り入れた。運動・スポーツの実施に当たっては、個々に心身の状況に応じて内容（強度や時間）を調整した。これらの運動・

スポーツ活動を通して、各々の状況に応じて身体を動かすこと（どこまで身体を動かせるか）を学ばせた。同時に健康スポーツ科学演習の目標でもある身体運動の必要性や方法の理解や人間関係の改善・向上を図った。授業は、芸術工学院の村木准教授と熊谷が担当し、また侯 佳寧さん（人間環境学府博士課程）がTAを担当した。

（文責：熊谷 秋三）

(2) コア科目

1) 共通コア科目

「共通コア科目」は、「人間性」と「社会性」の二科目からなっており、それぞれ2単位の修得が必要となっている。それぞれの主題については3つのサブテーマ群（『人間性』-「意識と言葉」「歴史と文化」「生命と身体」、『社会性』-「社会と制度」「平和と共生」「自然と環境」）が設定されており、健康科学センターでは、「人間性」の中の「生命と身体」部の講義を担当した。具体的には、前期2名、後期2名の健康科学センター教員が、生命や身体に関する科学的な見方とそれにまつわる実践的問題について解説し、人間存在や人間性に対する理解が深まるような講義を実施した。

（文責：高柳 茂美）

2) 理系コア科目

①健康科学Ⅰ：健康と運動の科学

スポーツを含む運動行動を健康支援（支援理論、対人支援、政策支援）の立場から考察する。

支援理論では、スポーツを含む運動行動の恩恵や弊害など、その意味や意義を明らかにする。対人支援では、個人あるいは集団を対象とした運動行動の継続に関して行動科学理論と、様々な健康事象をアウトカムとした運動疫学研究の成果を紹介する。最後に、政策支援では運動行動の政策的側面からの課題を討議し、現代社会が抱える多くの健康問題に解決に向けた展望を行った。また、毎時間トピックスとして、身近な健康問題や健康・スポーツ科学に関する新たな研究知見などの話題提供を行った。

成績評価は、出席とレポートに加え、筆記試験の成績を加味して行った。受講学生数は170名であり、学生による評価は概ね好評であった。概ね以下の内容で講義を進めた。

1) 疾病対策モデルから健康支援モデルへ

Key words: 健康モデル、健康生成論、疾病対策モデル、健康支援モデル

2) 運動（スポーツ）行動の恩恵と弊害

Key words: 生理学的観点、社会心理学的観点

3) 運動の疫学

Key words: 活習慣病との関連、転倒との関連、メンタルヘルスとの関連、認知機能との関連

4) 健康支援からみた運動行動

Key words: 支援理論、対人（集団）支援、政策支援

5) ヘルスプロモーションからみた運動行動の展開

Key words: 健康日本21

参考図書:

- ・日本健康支援学会編集：健康支援学入門－健康づくりの新たな方法と展開－，北大路書房
- ・特集：これからの健康支援，教育と医学9月号，2004年
- ・特集：健康支援学－ヘルスプロモーション最前線－，現代のエスプリ，440号，2004年
- ・熊谷秋三（責任編集）：健康と運動の疫学入門；エビデンスに基づくヘルスプロモーションの展開．医学出版，東京，2008年

（文責：熊谷 秋三）

②健康科学Ⅱ：運動とスポーツの心理学

1年次後期の理系コア（運動とスポーツの心理学）を担当し、下記に示す内容で講義した。受講生は72名であった。本年度は、スポーツ競技の心理を中心にしながらも、健康スポーツの心理を含む内容とし、「運動・スポーツの心理学（資料編）」を製本・配布した。授業内容の理解を深めるために、1コマの授業を講義、演習、ディスカッションという3本柱で組み立て、様々な心理的検査用紙を用いて自己を診断し、把握させた。スポーツ競技の心理は如何に試合場面で実力を発揮させるかに焦点を当てた内容とした。

1. ガイダンス
2. 脳の覚醒水準とパフォーマンス（逆U字曲線仮説）
3. 競技不安と競技パフォーマンス
4. パフォーマンス発揮と心理的スキル
5. パフォーマンス発揮とメンタルトレーニング
6. 効果的な目標設定
7. スポーツ集団とリーダーシップ
8. スポーツ競技の心理・社会的効果—ドラマチック体験の影響—
9. 一過性運動・長期的運動のメンタルヘルス効果
10. 長期的運動のメンタルヘルス効果—その心理学的メカニズム—

（文責：橋本 公雄）

③健康科学Ⅲ: アスリートの食事を科学する

理系コア科目(前期・2年次対象)アスリートの食事を科学するを下記の通り担当した。受講者数は約24名。昨年の150名から激減した。今年度は伊都地区開講初年度で、1年次を六本松で受講してきた学生であることが、要因か(地理的)。昨年度の受講者のうち自称アスリートは60%にすぎなかったことから、興味のある学生だけが受講したのか。内容はマイナーチェンジをしながらも栄養や食事にとどまらず、多様なサプリメントからドーピングまで口から入って、パフォーマンスが高まると信じられているものを多岐にわたって、紹介しながら、それがエルゴジェニック(ergogenics)かどうか、科学的エビデンスをもとに紹介した。アスリートの勝ちたいという欲求には、数兆円に上るサプリメント市場(社会・経済)、ドーピングという果てしないイタチごっこ(科学・倫理)等々、社会のすべてが凝集する、ということを考えて、いろいろな目的をもって受講してくれるとうれしいのだが。

(文責: 齊藤 篤司)

(3) 周辺教養科目

1) 学生による講義評価(健康学講座)

第2部門の教員は、教養科目として年間を通して健康学の授業を行っている。

平成21年度は、理系コア「健康科学」の枠の中で低学年を対象として、一宮が精神疾患や精神保健に関する「健康科学I」を前期に、大部分の教員によるオムニバス形式の「健康科学II」を後期に、それぞれ伊都地区センターゾーンで開講した。高学年向きには、全学共通教育科目(高年次教養科目)として、「応用健康学」を後期に丸山、眞崎、上園が、「心理健康学」を前期に入江と福盛が、それぞれ箱崎で開講した。また、総合科目として山本が後期に「病気と社会と文化」を担当した。その他、第1部門との共同で、「大学院生に対する人間教育」を通年で筑紫地区で開講した。これらの健康学についての講座は、全学生に共通する身近な問題を取り扱っており、日常生活にも直結するため、関心や需要が大きいものと思われる。

平成21年度の学生による講義評価結果を後の表に示す。評価はおおむね良好であった。

(文責: 永野 純)

2) 健康科学 I

平成10年度に健康科学センターに赴任してから、「精神面での健康に関わる問題について考え、自分なりの合理的な意見を持つこと」を目的として、1~2年生を対象とした全学教育として開講してきた。平成17年度からは単独で開講し、「一般学生のための精神医学入門」として九州大学では医学部以外の学生が精神医学に関して受講することができる唯一の講義である。

平成18年度から全学教育の枠組みが替わり、理系コアの健康科学というカテゴリーの中での開講となっているが、今年度は前期に健康科学 I として開講した。19年度から講義をすべてスライドで行っている。また、試験を行った。

講義の内容は、専門である精神医学からみたメンタルヘルスに関する講義で、医学としての精神医学についてから始め、ストレス論、適応障害とうつ病、若年者に多い対人ストレスとしての対人関係の病理、精神作用物質、さらには精神医療とその特殊性について論じた。精神医学的知識で、健康な一般の人々自身に役立つ知識は、ストレスとそれによる精神障害、特にうつ状態(うつ病)、そして、健康維持のためのストレス対策に関するものに重心を置いている。今年度はライフサイクル特に青年期とメンタルヘルス・精神的に健康であるということとその前提についても論じた。学生の興味は精神病の特殊な病像にあるようである。

受講登録をした者は211名で、今年度は受講制限をせずに済んだ。実際に出席していたのは195~200名で、出席率は高かった。毎回、その講義で取り上げた内容を確認する小テストをした。心理テストは今年も採点が容易な内向性・外向性と神経質さを評価し、九大生の平均に比べ自分が相対的にどのような性格特性をもつのか知ってもらった。また、うつ病スケールを付けてもらい、うつ病の症状と質問紙の精度の限界について認識してもらった。この講義により学生自身の精神面の健康さとはどう考えるべきものか、そしてそれを維持するためにどのようなことを知っておくべきかということについての理解を深めてもらえたと考えている。

単位認定のための試験は203名が受験し、14名は成績不良であったので再試験を実施した。

(文責: 一宮 厚)

学生による第2部門関連の健康学講義の評価

No.	質問内容	平成21年度前期		平成21年度後期	
		健康科学 I	心理健康学	健康科学 II	応用健康科学
		一宮	福盛・入江	眞崎・上園・永野・入江・福盛	丸山・眞崎・上園
質問E 質問票項目					
〈 Ea 学生自身について 〉					
Ea1	自分なりに考え捉え直すところに学びが良かった	4.0	4.6	4.2	4.8
Ea6	物事の見方を新たにすること自体に楽しみがあった	3.9	4.7	3.9	4.6
Ea2	調べて検証し考察する方法を経験する学びだった	3.1	4.2	3.2	2.8
Ea7	より難しい問題に取り組もうとする姿勢を培った	3.1	4.1	2.8	2.6
Ea3	自分の今後はどう役立つかを意識する学びだった	4.2	4.9	4.3	4.6
Ea8	社会的問題の解決と研究とのつながりを見つけた	3.8	4.2	4.0	3.6
Ea4	能力や可能性についての自信をえることができた	3.2	4.2	3.1	2.8
Ea9	大学生活を一緒に過ごす仲間との出会いがあった	3.4	4.6	3.2	1.6
Ea5	取り組んでいる過程への自己関与の大切さに気づいた	3.5	4.4	3.6	3.0
Ea10	成績のよい評価を目指して努力することができた	3.6	3.8	3.6	2.8
		3.6	4.4	3.6	3.3
〈 Eb 授業担当者について 〉					
Eb1	授業の構成内容と展開が適切だった	4.4	4.8	4.2	5.0
Eb2	授業の準備が周到になされていた	4.6	4.6	4.4	4.6
Eb3	教師と学生間に双方向性があった	3.7	4.9	3.2	4.2
Eb4	教師に教えようとする熱意があった	4.1	4.8	3.9	4.4
Eb5	教師に学び続けている者の姿勢を見た	4.0	4.6	3.7	4.0
		4.2	4.7	3.9	4.4
質問F：要望点検					
F1	授業テーマと目標を明確にしてほしい	2.9	0.0	0.0	0.0
F2	授業内容をもっと易しくしてほしい	5.8	0.0	0.0	0.0
F3	授業内容をもっと難しくしてほしい	0.0	0.0	0.0	0.0
F4	授業の進行をもっと遅くしてほしい	7.8	0.0	0.0	0.0
F5	授業の進行をもっと速くしてほしい	1.0	0.0	0.0	0.0
F6	理解できるように説明に工夫がほしい	1.0	0.0	0.0	0.0
F7	理解度を把握して授業を進めてほしい	1.0	0.0	0.0	0.0
F8	学生にもっと優しくしてほしい	1.9	5.3	0.0	0.0
F9	学生にもっと厳しくしてほしい	0.0	0.0	0.0	0.0
F10	学生を軽蔑しないでほしい	1.0	0.0	0.0	0.0
F11	予習・復習をするための手立てがほしい	6.8	0.0	0.0	0.0
F12	成績の評価基準をきちんと示してほしい	7.8	0.0	2.9	20.0
F13	教室の隅まで声が届くようにしてほしい	3.9	0.0	2.9	0.0
F14	板書を読み取りやすいものにしてほしい	0.0	0.0	5.9	0.0
F15	視聴覚機器を活用してほしい	0.0	0.0	0.0	0.0
F16	授業の開始時間を守ってほしい	0.0	0.0	0.0	0.0
F17	授業の終了時間を守ってほしい	2.9	36.8	0.0	0.0
F18	休講をきちんと予告してほしい	0.0	0.0	5.9	0.0

3) 健康科学 II

21年度まで月曜日に開講していたオムニバス形式の健康科学 I を、火曜日開講の健康科学 II と入れ替え、21年度より、健康科学センター教員がオムニバス形式で開講するものは火曜日開講の健康科学 II となった。従来の健康科学 II は月曜日に移動した。

健康科学 II は、理系コア科目の一つとして1年生を対象に健康科学センターの保健管理担当の教員が、誰にでも起きうる心身の疾患などの健康上の諸問題を取り上げ、学生自身の健康の維持増進と学生の身近な人たちへの啓発を目的としている。学習目標としては、自分自身の健康

問題や社会的な健康問題に興味を持っている医学的知識に触れる機会が少ない学生を主な対象として、医学や臨床心理学・健康科学などを教養として広く学び、健康に関する正しい見識と良好な生活習慣を身に付けることや、自分自身や身近な友人などの心身の不調の早期発見や良好とは言えない生活習慣を科学的に説明し改善を助言できるようになることをあげている。単位認定の方法は、各講義担当の教員が毎回の講義で小テストやレポートを課すことで評価することで行っており、学期末試験は行っていない。

受講者数は185名で、実際に出席していたのは160～170

名前後で、出席率は高かった。小テストやレポートの結果は、大半の者が良好で講義内容をよく理解している者と考えられた。185名中、178名が修了した。保健管理を担当しているため、オムニバス形式とはいうものの同じ教員が続けて講義できないことが課題として残っている。

(文責: 眞崎 義憲)

4) 高年次教養科目 心理健康学 (前期)

現在の大学生は、知識に比べて体験、特にコミュニケーションの発達が不十分であるため、豊かでクリエイティブなコミュニケーションスキルを体験学習する事を目的として、高年次の学生を対象に体験的実習とミニレクチャーを行っている。これから社会に旅立つ、または大学院生として研究生活に入る際に役立つような、実践的な心理的コミュニケーション(知的コミュニケーション、情緒的コミュニケーション)の基本的スキルの習得を目指す授業である。

ファシリテーターを必要とすることから、例年各期50名前後に受講者を制限し、授業を実施している。平成21年度の前期は、福盛、入江、TAの瓜生樹実子さん(人間環境学府)の3人で講義を担当した。

本講義は箱崎地区で開講し、受講する学生は、過去の受講生の口コミによって参加している場合も多く、講師にとっても嬉しいことである。

●講義内容

第1部 オリエンテーション、カウンセリングやコミュニケーション概論、実習にあたっての注意

第2部 コミュニケーション序論 自己紹介ゲーム、第一印象ゲーム、ブラインドウォーク、ネガティブリスニングとポジティブリスニング・アクティブリスニング、ライフラインなど

第3部 グループ課題を通してのコミュニケーションやリーダーシップ練習「ブレインストーミングとKJ法」「砂漠で生き延びるには?」「個人情報集約による地図作成」など

●成果と今後の課題

学生にとって毎回の体験はとても新鮮のようであり、毎回行うミニレポートでは、自分のコミュニケーションのスタイルに気がついた、今後役立つ、といった感想が多く認められた。大部分が講義形式ではなく体験形式であ

るため、終始なごやかな雰囲気の中で学習が行われ、回を重ねる毎に受講者同士のコミュニケーションが促進された。また、最終レポートでは、複数の学生が通年での講義を希望していた。

(文責: 福盛 英明)

5) 高年次教養科目 応用健康学 (後期)

平成21年度後期の理系主題科目(高年次教養科目)の応用健康学は、箱崎地区の高年次学生を対象に後期の火曜日一限目に開講した。講義内容は、学生の日常生活に関連する健康問題や身近な疾患の対処法、将来的に自分の意見を持っておいた方が良い医療問題に焦点を当てた。具体的には食に関する問題、アルコール問題、エイズ予防、代替医療、移植医療、旅行医学、心拍のゆらぎの観察などを丸山が、インフルエンザや結核などの感染症の動向と予防、喫煙の健康への影響、メタボリックシンドロームを眞崎が、血圧の測定法や生命現象のバイオリズムを上園が行い、全員参加型で簡単な実習や体験を通じた双方向的な授業を心がけた。

例年のように高年次教養科目の後期授業ということで卒業がかかった受講者も多く、受講態度は概ね良く真剣さが感じられた。最終的な受講者数は10名であった。講義は毎回定刻に始まり休講はなかった。受講者は文系と理系にまたがり、講義内容によっては共通の理解度に至ることが困難な場面もあったため、講義資料を毎回準備しビデオなどの視聴覚教材も使用した。学生による全学授業評価のアンケートでは、実生活へフィードバックできる実利的な授業内容であったとの評価を得たが、成績評価基準が明確でないとの指摘もあった。これについては6割以上の出席者を対象に毎回のアンケートやミニレポートを成績評価の対象とする旨をシラバスに明記し、最初の授業でも通達している。事実この基準に満たない受講者が今回初めて1名不合格となった。しかしやはり合否判定基準が不明確に映るのであれば6割以上の出席者を対象とした期末試験の導入も視野に入れている。

(文責: 丸山 徹)

6) 病気と社会と文化 (後期)

上記科目を開講した。

(文責: 山本 和彦)

2. 業務を通じた教育

1) 定期健康診断時の健康教育

定期健康診断は、本来の目的である健康状態のチェックと同時に、年に一回多くの学生が参加する貴重な健康教育の機会でもある。こうした考えに則り、第2部門では、毎年健診の流れに関する説明時間を利用して学生への健康教育を行っている。時流に応じて若干テーマを変えることはあるが、基本的な健康教育内容は、健康生活支援調査の結果報告と、結核を中心とした感染症の実態とその危険性に関するものである。平成21年度は、そうした基本事項に加えて、麻疹や薬物乱用など時宜を捉えたテーマについて教育を実施した。健康生活支援調査のような業務に関連した研究成果は、CAMPUS HEALTHなどに掲載して周知させる他に、今後こうした健診などの機会を利用して学生に還元していく必要がある。

(文責: 永野 純)

2) サイコトリート（箱崎分室）へ来室する学生へのリラクゼーション指導

箱崎分室において、サイコトリートに来室する学生を対象にボディワークの指導を実施している。また、健康相談・学生相談に来室する学生で、身体への気づき・リラクゼーションが必要であると、医師あるいはカウンセラーが判断した学生を対象にボディワークの個人指導を延べ28回にわたって実施した。

(文責: 高柳 茂美)

3) ウェルカムホームベース型健康支援プログラム

(学生に対する肥満改善および生活習慣病予防支援)

ウェルカムホームベース型健康支援プログラムは、肥満の改善および生活習慣病予防を目的に、学生が日常生活している場（home）で目標達成型の行動変容を目指すものとして各分室で実施した。平成20年度からは、メタボリックシンドロームを予防するための健康教育も取り入れて支援している。

4月の定期健康診断時に、BMIが25以上の肥満と判定された学生と腹囲が85cm以上あった男子学生にプログラムへの参加を勧奨した。内容は、週1回体重・血圧・腹囲を測定し、食事・運動・生活の3つの行動目標を実行してもらいながら、個人面接の中で目標を実行するにあたっての助言や食事・運動・生活についての指導を行った。期

間は5～7月の10週間とし、それ以降の継続は自由とした。

平成21年度の定期健康診断受診者は14,028名であり、BMIが25以上の学生は1,394名（受診者の9.9%）、腹囲が85cm以上の男子学生は1,161名であった。プログラムへの参加申し込み者は87名であったが、7月まで10週間参加した者は21名（男性21名・女性0名）であった。10週間終了後は平均して、体重が3.60kg、BMIが1.32kg/m²、収縮期血圧が8.60mmHg、拡張期血圧が8.43mmHg、腹囲が4.76cm減少した。

(文責: 松園 美貴)

3. 大学院教育

1) 人間環境学府 行動システム専攻健康行動学コース

平成21年度の入学者数は、修士課程12名（2名は留学生）、博士課程1名であった。修士課程の修了者は10名であり、そのうち1名は博士課程に進学した。博士課程では、3名が博士の学位（人間環境学）を取得した。年間行事としては、修士論文の中間発表会（9月）、修士論文発表会（2月）、および博士論文公聴会（随時）を開催した。

(文責: 熊谷 秋三)

2) 生体ストレス人類学特論

上記科目を開講した。

(文責: 山本 和彦)

3) 大学院共通教育科目（大学院生に対する人間教育'09）

平成21年度の「大学院生に対する人間教育第一・第二」は平成19・20年度と同様に、筑紫地区で水曜の4限目に開講した。「第一」は前期の6-7月に7回、「第二」は後期の10-11月に7回開講した。

《講義名》 平成21年度「大学院生に対する人間教育第一・第二」

《キーワード》 人間力、自己実現、コミュニケーション能力

《履修条件》 大学院生（前期・後期博士課程）30名、希望者（多数の時は選抜）

《授業の目的》 大学院生に対する、専門教育を推進する支援的教育。1) 体力アップ・2) 精神力アップ・3) コミュニケーション能力アップ・4) チーム力（人的ネットワーク）の形成・5) 知る楽しみ・気晴らし・6) 就職

試験対策等。

《達成目標》心身の状態を自ら判断し、良い状態を維持増進して、自己実現を達成できる力を身につける

《授業の進め方》講義と実習

《授業スケジュール》

毎週水曜日の4時限目(14:50-16:20), 1回90分, 7回シリーズ

「第一」(前期); 上園「オリエンテーション・感染症」, 丸山「心拍のゆらぎの不思議」, 大柿「健康科学の視点」, 福盛・入江「こころの健康とコミュニケーション」, 高柳「心身一如」, 杉山「身体運動を通じたコミュニケーションスキルトレーニング」, 熊谷「メタボリックシンドローム」

「第二」(後期); 橋本・山本(教)「オリエンテーション・教養としてのスポーツ科学—健康手段論を超えて」, 永野「感染症と免疫」, 林「ゆらぎと健康」, 一宮「気持ちが落ち込んだら」, 眞崎「たばこよ, さようなら」, 西村「文学に見る健康観」, 上園「心身のリズムと健康・まとめ」《評価法》出席点・実習点・テスト・レポートから総合的に評価した。

《教科書》テキストは定めず, 講義・実習に必要な資料は担当教員が作成し配布した。

《受講生数など》平成21年度は周知が徹底しなかったためか, 前期は登録数12名, 内修了者12名, 後期は登録者6名, 修了者6名であった。講義や実習に対する受講生の反応は良好で, 学生による授業評価も肯定的であった。

(文責: 上園 慶子)

4. 課外活動の支援

本年度の体育会支援は体育会からのメールでの問い合わせが2件あった。両者ともトレーニングの期分けに関するものであった。

体育会総務委員会主催の強化講習会を行った。林准教授が「筋力トレーニングについて」の講義を12月15日に, また12月8日に大学院生の河津君が「心を鍛えて勝つメンタルトレーニング」とした講義を行った。両日ともに100名を超える受講者で会場は一杯となり, 参加者は熱心に聴いていた。

(文責: 林 直亨)

5. 研究生の指導

平成21年度健康科学センター研究生

氏名	研究期間	指導教員	研究題目
楊 梅	H20.10.1~22.3.31	大柿 哲朗	高齢者の健康づくりに関する研究
許 京春	H21.4.1~22.3.31	熊谷 秋三	肥満と身体活動に関する国際比較
王 琪	H21.10.1~22.3.31	熊谷 秋三	健康社会疫学
マヒモト ³⁾ ガマル ⁴⁾ ヒ ⁵⁾ ハフイ ⁶⁾	H21.4.1~21.9.31	熊谷 秋三	高齢者のレジスタンストレーニングの影響に関する研究
西内 久人	H21.4.1~22.3.31	熊谷 秋三	玄米ニギニギ体操と介護予防・費用効果について
木村 公喜	H21.4.1~22.3.31	熊谷 秋三	健康と行動, 食物摂取の関係に関する研究
山下 幸子	H21.10.1~22.3.31	熊谷 秋三	職域における身体不活動とメタボリックシンドロームの関連に関する前向き疫学研究
王 微	H21.4.1~22.3.31	齊藤 篤司	Effect of hydration status on mental performance in athlete
劉 暢	H21.4.1~22.3.31	杉山 佳生	競技選手の心理的サポートに関する研究
李 旭	H21.10.1~22.3.31	杉山 佳生	エリートバスケットボール選手の心理的スキル
亀井 真澄	H21.4.1~22.3.31	林 直亨	運動時の唾液粘度の変化
陳 韻如	H21.10.1~22.3.31	山本 教人	社会変化と性差別意識に関する研究

6. FD活動

(1) 全国大学体育連合

日時 平成22年3月18日

場所 早稲田大学競技スポーツセンター201教室

会長の奥島孝康氏（早稲田大学元総長）の挨拶で開始された。大学での体育やスポーツ活動の必要性について、具体例を挙げながら強調され、今後の体育・スポーツの必要性を説くものであった。また、欧米の大学のスポーツ施設に比較し、日本の大学での施設の問題点（貧弱さ）にも触れられた。

続く文部科学省高等教育局企画官(併)高等教育企画課高等教育政策室長 榎本剛氏の講演では、大学体育の歴史について、詳細ながら、広範囲にわたってレビューされた。これまでの問題点やその解決法などについて述べられた。

続く、副会長 安西祐一郎氏（前慶應義塾塾長）の講演は奥島会長の挨拶の流れを汲む形で、慶應義塾大学でのスポーツ施設の充実の強調から開始された。廃止されてしまった「塾生皆泳」（50mを泳げないと卒業できない）の復活を強く望まれ、スポーツ活動を通した人間教育の重要性（あるいは福沢諭吉の教育観であろうか）について述べられた。また、グラウンドやプールの改築や体育会学生を中心とした商業地での社会貢献について具体的に述べられ、社会貢献や大学の知名度上昇に及ぼすスポーツ活動のあり方について説かれた。私学の雄と呼ばれる早慶でさえ、学生・体育会、さらに周辺地域でのスポーツに力を入れ、その知名度を向上させることに心血を注いでいることがこれまで以上に実感された。

その後、大学体育奨励賞の表彰が行われ、林准教授を含む3名が表彰された。3名とも九州地区の大学所属であり、九州地区での体育関連授業の充実を実感させられた。

（文責：林 直亨）

(2) 九州地区大学体育連合

平成21年度九州地区大学体育連合研修会

日時：平成21年3月13日（土）・14日（日）

場所：大観荘（筑紫野市）

「平成21年度体育・スポーツ・健康に関する教育研究会」が平成21年3月13日（土）・14日（日）の2日間、筑紫野市の大観荘で開催され、九州大学から橋本公雄教授（会長）、山本教人准教授（理事）、杉山佳生准教授の3名が参加した。研修会プログラムは、研究発表、招待講

演、シンポジウムの3部構成であった。研究発表は、大学体育授業関連研究（5演題）、大学スポーツ関連研究（2演題）、健康・体力関連研究（2演題）の合計8演題であり、教員5名、大学院生3名から研究報告があった。招待講演は、中国天津市から高健氏（天津中医薬大）が招聘され、「スポーツ意識と行動およびメンタルヘルスに関する中日大学生の比較」と題して、講演を行った。氏は、天津市の紹介（経済、民芸）、大学生のスポーツに対する意識と行動の中日比較、中国におけるスポーツ政策、また青少年の健康・体力の悪化の問題と健康・体力づくりに対する中国の政策（軍事訓練）について紹介した。中国では、近視と肥満の増加が大きな問題となっているようであった。シンポジウムは、「大学におけるスポーツ活動と体育授業の接点を探る」と題して、根上優氏（宮崎大）の司会のもと、山本教人氏（九州大）、大浦隆陽氏（福岡国際大）、飯干明氏（鹿児島大）が登壇し、報告・討議が行われた。学生のエージェンシー（力：人間力）の低下にどのように体育がかかわれるか、各大学の実情が紹介され、体育教育および体育教師の役割の重要性が論議された。今回は参加者数が例年より若干少なかったが、実りある研修会であった。

（文責：橋本 公雄）

(3) 健康・スポーツ科学科目FD研修会

平成21年度健康・スポーツ科学科目FD研修会を、4月4日（土）の午後2時10分～4時40分に、伊都キャンパスの体育館で実施した。まず、淵田高等教育開発推進センター長のご挨拶を賜った後、平成21年度の健康・スポーツ科学科目の授業にあたっての留意事項や成績評価の基準などについて、説明した。続いて、演習・実習授業で使用する施設や用具・機材等の説明が行われた。特に、伊都キャンパスでの初めての全学教育ということで、施設・設備の使用法の理解のために、多くの時間を割いた。その後、体育館・グラウンド以外の施設（講義室、健康・スポーツ科学相談室、健康相談室等）を確認した。参加者は、常勤講師10名、非常勤講師14名、TA学生5名であった。

（文責：杉山 佳生）

(4) 全学FD

平成21年度の全学FDは以下のとおり開催された。

第1回全学FDの実施について

1. 企画運営：全学FD委員会, 教育改革企画支援室, 高等教育開発推進センター
2. 実施日時：平成21年4月3日（金）
13:30～16:20
3. 場所：旧工学部本館大講義室（箱崎地区）
4. テーマ：新任教員の研修
5. 趣旨：
本学に新たに採用となった教員を対象として、本学が取り組んでいる諸問題等について共通認識を持つことを目的として、本学の歴史を踏まえた将来の展望等について理解を深め、教育者・研究者としての資質と九州大学教員としての自覚を高める契機とする。
6. 出席者：該当者なし

第2回全学FDの実施について

1. 企画運営：全学FD委員会, 高等教育開発推進センター, 教育改革企画支援室
2. 実施日時：平成21年9月8日（火）
13:15～16:00
3. 場所：50周年記念講堂大会議室（箱崎地区）
4. テーマ：体験活動を通じた学習成果の達成について
5. 趣旨：

近年の大学教育において、学生の課題探求や問題解決等の諸能力を身に付け学習効果を高める教育方法の一つとして、学外での体験活動を取り入れた実践教育（サービス・ラーニング）が注目を集めています。具体的にはインターンシップ、ボランティア、フィールドワーク、海外体験学習等が挙げられますが、それらは大学で学んだ知をもとに実際の体験活動を通じて深め、生きた知識を獲得するという観点から、個々の教育課程における学習成果の効果的な達成のために有効な方法と捉えられています。

本学の第2期中期目標・中期計画（素案）の「教育に関する目標」は、教員が“何を教えるか”よりも、学生は“何ができるようになるか”という観点から教育を捉え直すことを目指しており、このことは、教育内容もさることながら、その内容を的確かつ効果的に伝え、学生が自ら学び続けられるようになるための教育方法をより重要視す

る姿勢を示したものです。

本学においても、各学部・学府の教育目的のもと、学外機関との連携を含めた、様々な実践教育が行われています。そこで今回のFDでは、それら取組の紹介を通じて各部署の参考としてもらうとともに、実践教育の実施方法や課題等の意見交換を行うことで、教育方法の改善に役立ててもらうことを目的とします。

6. 出席者：上園慶子, 福盛英明

第3回全学FDの実施について

1. 企画運営：全学FD委員会, 教育改革企画支援室, 高等教育開発推進センター
2. 実施日時：平成22年1月26日（火）
16:00～18:10
3. 場所：旧工学部本館第一会議室（箱崎地区）
4. テーマ：学習成果達成のための教育プログラム開発
5. 趣旨：

平成15年に開始されたGP事業は、大学教育の組織的展開を目指す大学改革の取組が一層推進されるよう、国公立大学を通じた競争的環境の下で、特色ある優れた取組を選定・支援するものですが、開始から7年を経過しようとする現在、大学の教育改革のキーワードの一つとして定着し、大学独自に学内のグッド・プラクティスを支援するなど、多様な展開がみられています。

本学においては教育内容・方法の改善、教育組織体制の整備・充実、学習成果の達成と検証等について不断に推進しなければなりません。それらの教育改革を有効に機能させ、同時にアカウンタビリティを向上させるためには、特徴のある優れた教育プログラムの開発や既存の数々の取組を相互に関連づけ再構築させる取組等が有効です。

今回の全学FDでは、学内外から講師を招き、GP等を通じた教育プログラム開発や学習成果検証のための取組等を紹介し、その後、質疑応答を行います。一般の教員はもとより新たな教育改善の取組やカリキュラム改革を予定されている部局の関係者には是非ご参加くださいますようお願いいたします。

6. 出席者：上園慶子

（文責：熊谷 秋三）

業 務 活 動

概況	15
内容	15

業 務 活 動

概 況

九州大学健康科学センターでは、健康についての科学的的研究を行っているが、同時に自立した個人の健康の維持・増進を支援するという理念のもとに健康教育そして健康支援活動を実践している。

九州大学の学生ならびに教職員に対する健康支援業務は、健康科学センター第2部門（健康医学・心理学）の教員が中心となって担当している。平成16年度の大学の独立行政法人化以降は、安全衛生推進室のスタッフも兼務し産業保健活動の割合が非常に増大した。

平成21年度も、健康科学第2部門の教員（教授（定員）3名ならびに准教授6名（欠員1名））と、技術職員である保健師・看護師（定員3名、3年雇用2名、および短時間雇用3名）と総務部職場環境室に所属する3年雇用の産業保健師5名が学生ならびに教職員の健康支援業務にあたった。

日常の健康支援業務は、平成20年度末に六本松キャンパスが伊都地区センターゾーンに移転し、全部で5つになった九大のすべてのキャンパスに設置している分室（健康相談室）において、健康相談・診療としてサービスを提供している。学生の定期健康診断は、例年通り毎年4月に全学生を対象として実施した。新入留学生のための健診も春秋の2回実施した。また、新入生に対する面接を、健康調査（健康支援パッケージなど）をもとに5月に実施した。教職員の定期健康診断は、健セと環境安全衛生推進室が中心となって企画立案し、一次健診は従来通り外注により6月から各事業場で実施したのち、二次検診や健康相談は健セと環境安全衛生推進室が主体となって実施した。

健康教育は、健康支援の活動を充実させるために、学生に対し全学共通教育の一部として行っている。健康支援モデルに基づいた健康学の講義を、平成21年度も、健康科学Ⅰ、健康科学Ⅱ、応用健康学、心理健康学の講義として、2部門の教員のほぼ全員の教員が担当した。学生による講義評価も全学に先駆けて開始してきたが、平成19年度からは全学共通の評価のみで行うことにした。教職員に対しては、従来通り、10月の健康週間をはじめ人事課が企画する様々な研修会の講師を務めた。また、学内のFDまた学外からの講師依頼にも積極的に応じた。

日常の相談業務や定期健康診断などについては、年間計画のもと、教員・技術職員・事務職員で構成される学生と教職員のための健康支援会議を毎月開催し、各担当者や各分室からの課題を討議しつつ情報を共通化し対策決定を行っている。また、教員の共通理解と資質向上のためにFDとしての教員研究会を技術職員（保健師や看護師）に対する教育に拡大して毎月1回行っている。

医師である教員は、産業医として教職員に対する産業保健活動を行っているが、具体的には休職、復職判定や長時間労働者の面接などの個別の対応をこなし、各事業場の毎月の安全衛生委員会に出席し、また巡視などを行っている。

日常の健康支援業務

日常の健康支援業務では、学生および教職員のプライマリー・ケア活動を行うことを最も重視している。福岡地区の5つのキャンパスのそれぞれにある健康科学センターの分室において、内科医師による一般健康相談と診療、精神科医師・心療内科医師による精神保健相談と診療、ならびに臨床心理士による学生相談、さらには保健師・看護師による保健相談を行った。

平成21年度に健康科学センターを訪れた来室者は19,048名であった。常勤の医師7名、臨床心理士1名（人事が進まず1名の欠員が生じたままである）、それに保健師13名（うち5名は安全推進室所属で、このほかに非常勤の職員もいる）で全5キャンパスの毎日の健康支援業務に当たった。教員は週に2.5～3日を各分室での相談・診療業務に当てているが、それでも学生と教職員のニーズをこなせないため、非常勤の医師、臨床心理士の方々の協力を得ながら運営している。

学生の定期健康診断

全学生を対象とする定期健康診断は、第2部門の教員と保健師・看護師のスタッフ全員で、多くのアルバイトを雇用して、毎年4月に3週間にわたり病院地区で実施している。

平成21年度の実診者は14,027名であり、受診率は75.5%であった。受診率は前年の74.8%より0.7%増加した。受診率を向上させるために、例年同様、ポスターや

HPなどで開催日等の情報を周知し、授業担当教員への休講措置を依頼した。

健康支援パッケージによる新入生面接

5月の連休翌週から伊都地区センターゾーン分室において、心理系の教員と内科系の教員が協力して、新入生に対する面接を行ってきた。この新入生面接は、入学時の健康調査票（健康支援パッケージ）にもとづいて、学業に影響を与える可能性のある重大な疾病の罹患や既往がある学生、多くの自覚症状が認められる学生に対して、個人宛に案内状を郵送して面談を促しているものである。なお、平成18年度からは、対象の選出条件を変更し、心理的問題は対人コミュニケーションに支障があると考えられる学生を対象に含めることにした。また、従来、面談を実施しても問題が少なかった相談希望のみの学生には、今年度も来談を勧奨するだけに留めた。

その結果、平成21年度の面接の対象者は心理系が88名で内科系が19名、来談者は心理系が80名（90.9%）で内科系が4名（21.1%）であった。

健康教育

学生に対する健康教育は、全学共通教育の一部として第2部門の教員が行っている。講義は、低年次向けの「健康科学Ⅰ」「健康科学Ⅱ」および「病気と社会と文化」、高年次向けの「応用健康学」「心理健康学」で、健康問題について理解し自分自身で対応するだけでなく、問題を持った他の人に対しても健康支援ができるようになるための健康教育として開講した。学生の授業評価は平成19年度以降、本学共通の“学生による授業評価”のみを実施し、

授業内容や方法の改善に努めている。

産業保健活動

第2部門のスタッフは平成16年度の独立法人化以降、安全衛生推進室の室員を併任している。医師である教員は福岡地区の7つの事業場の産業医を担うことになった。

法人化後の人員削減計画のもと大学全体で教職員の労務が増大している。そのため長時間労働の面接や休職や復職の判定など職員への対応は年々増加しており、第2部門のスタッフの労務負担は増大している。

教職員研修

例年、人事課人材評価係が実施する本学の職員のための研修会や国大協が実施する国立大学の職員に対するさまざまな研修会などにおいて講師を務めているが、平成21年度も、心身の健康増進のための講義を教員が分担して行った。

技術職員研修

平成8年度から健セならびに環境安全衛生推進室の技術職員（保健師・看護師）を対象として研修を行ってきた。

平成21年度も、保健師・看護師が中心となって月に1度ずつ学生や教職員に対する栄養指導やそのための調査研究に関する研修を行い、必要に応じて教員が指導を行った。また教員による最近のトピックスを中心とした講義も実施した。

（文責：上園 慶子）

1. 一般健康相談

箱崎地区分室

箱崎地区分室の一般健康相談は、保健師・看護師 3 名（中山・谷川・田中、いずれも学生相談・精神相談を兼務）・健康科学センターの内科系教官 4 名（一宮・丸山・入江・上園）・医学部からの非常勤医師 2 名（精神科 古賀、神経内科 鳥居）・事務職員 2 名（山口・藤尾）で行った。

全体でのべ 5,651 名（前年度 6,010 名）が利用した。6 キャンパスの中では依然多数の来室者に対応しているが、次第に伊都地区への移動が進んでいる。

この章ではいわゆる“身体的相談”を主目的に来室した学生・教職員について利用状況を記載する。

内科系相談（表 2）の年間利用者数は 766 名であった。症状は例年同様、風邪症状が圧倒的で、利用者 425 名、55.5%を占めた。風邪症状は秋～春に多発していた。その他の症状としては消化器の症状や頭痛が多かった。

外科的相談（表 3）は 249 名であった。来室理由は例年同様、外傷や打撲・捻挫が多く両者で外科的相談全体の 68.7%を占めた。

内科・外科以外の疾患など（表 4）で利用した学生は 4,931 名であった。今年度も健診フォローが多かった。例年 4 月に行われる学生定期健康診断の事後処理のため 5～6 月に学生が来室し、6 月に実施される職員健診の事後処理のため 8～9 月に職員が来室するが、いずれも再検査

の期限を厳密に区切らなかった（各人の都合に合わせて検査する）ため、漸減するものの年度末まで受診者が続いた。また、体重・体脂肪や血圧の測定だけに来室する学生・教職員も 721 名おり、相変わらず関心の高さを維持している。さまざまな心身の症状を訴えての健康相談は 2,203 名であった。

処置別（表 5）を見ると診察・予薬が多いが、保健師・看護師による心理的対応も多い。

箱崎分室では、多目的室ウイズ（with）の部屋・ロビーで、ウエルカムホームベース型の心地よい健康教育を細やかな心くばりで行っており好評を得ている。

外国人留学生の来室者は 1 年間にのべ 678 名であった。留学生センターが隣接していること、健セの教員が留学生へのオリエンテーションを担当し場所や役割を講義しているため、留学生の利用率は、日本人学生に比べ相変わらず高かった。

教職員の利用は 1,233 名であった。近年、産業医活動や、健康診断・衛生委員会などでセンターの存在や機能が広く知られるようになり、自己測定も含め、日常的に利用する教職員も多くなっている。教職員の健康管理に関しては専任衛生管理者 1 名（井上美緒：産業保健師、人事課所属）が箱崎地区分室に常駐し、健康科学センター教職員と協力しあって活動している。

（文責：上園 慶子、中山 博子、谷川麻梨子、田中 朋子）

表 1 来室者状況

	4～6 月計	7～9 月計	10～12 月計	1～3 月計	総計	%
学部生	398	305	436	258	1,397	24.7%
修士	468	312	302	191	1,273	22.5%
博士	280	241	181	143	845	15.0%
教職員	257	469	279	228	1,233	21.8%
研究生他	142	112	158	104	516	9.1%
その他	80	108	85	114	387	6.8%
計	1,625	1,547	1,441	1,038	5,651	100.0%

表 2 疾病別利用者数（内科）

	4～6 月計	7～9 月計	10～12 月計	1～3 月計	総計	%
感冒	85	73	180	87	425	55.5%
上部消化管	9	8	8	9	34	4.4%
下部消化管	14	9	11	9	43	5.6%
頭痛	8	15	9	5	37	4.8%
その他	44	69	67	47	227	29.6%
計	160	174	275	157	766	100.0%

表 3 疾病別利用者数（外科）

	4～6月計	7～9月計	10～12月計	1～3月計	総計	%
創傷・擦過傷	33	28	27	23	111	44.6%
打撲・捻挫	21	18	13	8	60	24.1%
熱傷	6	7	6	1	20	8.0%
腰痛	3	3	5	4	15	6.0%
その他	8	11	17	7	43	17.3%
計	71	67	68	43	249	100.0%

表 4 疾病別利用者数（内科・外科以外）

	4～6月計	7～9月計	10～12月計	1～3月計	総計	%
健康相談	8	51	39	18	116	2.4%
眼科	5	6	10	5	26	0.5%
皮膚科	20	19	18	7	64	1.3%
耳鼻科	6	7	14	10	37	0.8%
歯科	4	5	5	3	17	0.3%
婦人科	5	10	5	8	28	0.6%
健診フォロー	425	309	101	49	884	17.9%
身体計測	201	240	170	110	721	14.6%
血圧測定	31	48	31	27	137	2.8%
保健コース	0	0	0	0	0	0.0%
新入生面接	0	0	0	0	0	0.0%
その他	29	63	74	43	209	4.2%
産業医面談	49	50	64	62	225	4.6%
心理・精神相談	512	523	621	547	2,203	44.7%
健康診断証明書	161	46	28	29	264	5.4%
計	1,456	1,377	1,180	918	4,931	100.0%

表 5 処置

	4～6月計	7～9月計	10～12月計	1～3月計	総計	%
診察	269	215	308	273	1,065	16.0%
与薬	132	99	185	134	550	8.3%
消毒	45	35	30	24	134	2.0%
休養室	22	32	23	25	102	1.5%
病院紹介	72	138	169	92	471	7.1%
心理的対応	467	457	545	479	1,948	29.4%
その他	848	774	472	272	2,366	35.7%
計	1,855	1,750	1,732	1,299	6,636	100.0%

表 6 心理・精神相談内訳（再掲）

	4～6月計	7～9月計	10～12月計	1～3月計	総計	%
心理相談	215	210	257	192	874	39.7%
精神保健相談(医師)	129	127	137	153	546	24.8%
精神保健相談(看護職)	22	30	23	20	95	4.3%
リトリート	128	134	178	159	599	27.2%
ボディーターク	6	5	7	9	27	1.2%
キャリアライフ等	1	0	0	0	1	0.0%
電話相談(医師)	3	6	7	1	17	
電話相談(カウンセラー)	5	5	6	6	22	
電話相談(看護職)	3	6	6	7	22	
電話相談計	12	17	19	14	62	2.8%
計	524	540	640	561	2,203	100.0%

病院地区分室

病院地区分室は、医歯薬系の学生や教職員以外に、九州大学病院の職員の健康管理も担当しており、平成17年度から病院地区の専属産業医（九州大学病院を除く）となった入江が分室長を務めている。病院の建て替えに伴い、平成19年12月に旧九州大学病院歯科医療センターに移転した。

平成21年度の病院地区分室の一般健康相談（診療を含む）は、健康科学センター教員の入江（医歯薬系の専属産業医を兼任）、丸山（九州大学病院専属産業医を兼任）、ならびに非常勤内科医師6名、保健婦1名（戸田）が行った。精神保健相談は、心療内科医の入江と精神科医の一宮、非常勤精神科医が担当し、心理相談は、基本的に学生に対しては中園照美先生、教職員に対しては磯貝希久子先生にそれぞれ週一日担当して頂いた。その他、平成20年度から安全衛生推進室所属の産業保健師の体制も強化されることになり、教職員の健診や健康管理業務の企画や運営などの中核的役割を担う病院地区は2名から3名に増員された。平成21年度は、野村、豊田、井町（途中退職後は荒尾に交代）が従事した。

平成21年度の病院地区分室の来室者数は、学部生522名、大学院生433名、教職員1,440名、研究生61名で、その他を含めると総計2,483名であった。平成20年度（総計2,963名）と比べて、480名減少した。対象者別にみても、平成20年度と比べて全体的に来室が減少した。その理由として、旧九州大学病院歯科医療センターを事務等に改修するための工事が行われることになり、9月から3月にかけて利便性や稼働性が悪い旧九州大学附属病院外

来に移転したことが考えられる。

教職員の来室者数も、平成16年度の546名から平成17年度941名、平成18年度1,287名、平成19年度1,405名、平成20年度1,605名へと増加の一途を辿っていたのが、平成21年度は1,440名に減少した。これは、一時的な移転場所が手狭であったため、面談件数を制限したことによる。いずれにしても、平成16年度からの大学法人化以降、教職員を対象とした健康診断事後措置や長時間労働者面接、心理・健康相談などの産業保健活動が充実してきていることや、後述するようなメンタルヘルス不全者などが大学法人化を境に増加していることには変わりはない。

利用者数を疾患別にみると、内科系が219名（平成20年度243名）、外科系が63名（同86名）、内科・外科系以外が2,554名（同2,578名）であり、全体的に減少がみられた。その一方で、病院地区分室の一時移転にも関わらず、心理・精神相談は前年の705名から784名へと増加している。心理相談（111名から142名へ）、精神保健相談（594名から640名へ）、いずれの場合も同様である。平成16年度の心理・精神相談件数が96名であったことを考慮すると極めて著しい増加であり、病院地区におけるメンタルヘルス不全者数の増加や対応件数の増加を示している。

ちなみに、平成21年度は精神神経科の横田謙治郎医師、第二内科の森山智彦医師、土井康文医師、医療経営管理学の馬場園明医師、桑原一彰医師、臨床薬理学の笹原俊之医師、三輪宜一医師に非常勤医師を依頼した。

（文責：入江 正洋，戸田美紀子）

表1 来室者状況

	4～6月計	7～9月計	10～12月計	1～3月計	総計	%
学部生	214	116	121	71	522	21.0%
修士	92	30	26	17	165	6.6%
博士	123	52	39	54	268	10.8%
教職員	604	321	289	226	1,440	58.0%
研究生他	13	19	14	15	61	2.5%
その他	9	10	0	8	27	1.1%
計	1,055	548	489	391	2,483	100.0%

表2 疾病別利用者数（内科）

	4～6月計	7～9月計	10～12月計	1～3月計	総計	%
感冒	38	18	34	16	106	48.4%
上部消化管	2	4	5	0	11	5.0%
下部消化管	6	2	1	4	13	5.9%
頭痛	4	4	1	2	11	5.0%
その他	34	17	15	12	78	35.6%
計	84	45	56	34	219	100.0%

表 3 疾病別利用者数（外科）

	4～6月計	7～9月計	10～12月計	1～3月計	総計	%
創傷・擦過傷	10	4	8	2	24	38.1%
打撲・捻挫	3	3	3	2	11	17.5%
熱傷	4	0	0	1	5	7.9%
腰痛	0	1	0	0	1	1.6%
その他	8	5	5	4	22	34.9%
計	25	13	16	9	63	100.0%

表 4 疾病別利用者数（内科・外科以外）

	4～6月計	7～9月計	10～12月計	1～3月計	総計	%
健康相談	4	10	20	1	35	1.4%
眼科	5	3	2	2	12	0.5%
皮膚科	9	4	8	3	24	0.9%
耳鼻科	1	2	4	2	9	0.4%
歯科	9	9	9	10	37	1.4%
婦人科	3	0	2	2	7	0.3%
健診フォロー	588	159	191	69	1,007	39.4%
身体計測	14	26	12	7	59	2.3%
血圧測定	9	6	1	2	18	0.7%
保健コース	0	0	0	0	0	0.0%
新入生面接	0	0	0	0	0	0.0%
その他	8	20	4	15	47	1.8%
産業医面談	102	104	77	99	382	15.0%
心理・精神相談	225	202	133	224	784	30.7%
健康診断証明書	74	38	13	8	133	5.2%
計	1,051	583	476	444	2,554	100.0%

表 5 処置

	4～6月計	7～9月計	10～12月計	1～3月計	総計	%
診察	210	183	153	176	722	23.6%
与薬	36	14	20	17	87	2.8%
消毒	11	5	7	2	25	0.8%
休養室	16	9	11	7	43	1.4%
病院紹介	54	35	38	30	157	5.1%
心理的対応	200	183	126	193	702	22.9%
その他	713	260	248	108	1,329	43.4%
計	1,240	689	603	533	3,065	100.0%

表 6 心理・精神相談内訳（再掲）

	4～6月計	7～9月計	10～12月計	1～3月計	総計	%
心理相談	40	40	23	39	142	18.1%
精神保健相談(医師)	165	144	105	154	568	72.4%
精神保健相談(看護職)	20	18	5	29	72	9.2%
リトリート	0	0	0	0	0	0.0%
ボディワーク	0	0	0	0	0	0.0%
キャリアライフ等	0	0	0	0	0	0.0%
電話相談(医師)	0	0	0	0	0	
電話相談(カウンセラー)	0	0	0	0	0	
電話相談(看護職)	0	0	0	2	2	
電話相談計	0	0	0	2	2	0.3%
計	225	202	133	226	784	100.0%

大橋地区分室

表1 来室者状況

	4～6月計	7～9月計	10～12月計	1～3月計	総計	%
学部生	89	41	67	45	242	49.0%
修士	62	25	17	20	124	25.1%
博士	8	4	3	5	20	4.0%
教職員	12	28	21	26	87	17.6%
研究生他	5	1	6	8	20	4.0%
その他	0	1	0	0	1	0.2%
計	176	100	114	104	494	100.0%

表2 疾病別利用者数（内科）

	4～6月計	7～9月計	10～12月計	1～3月計	総計	%
感冒	25	10	45	14	94	56.0%
上部消化管	6	3	1	2	12	7.1%
下部消化管	8	5	1	1	15	8.9%
頭痛	4	0	1	2	7	4.2%
その他	19	16	4	1	40	23.8%
計	62	34	52	20	168	100.0%

表3 疾病別利用者数（外科）

	4～6月計	7～9月計	10～12月計	1～3月計	総計	%
創傷・擦過傷	9	10	9	7	35	50.7%
打撲・捻挫	4	7	7	3	21	30.4%
熱傷	2	2	0	0	4	5.8%
腰痛	1	0	4	0	5	7.3%
その他	3	0	1	0	4	5.8%
計	19	19	21	10	69	100.0%

表4 疾病別利用者数（内科・外科以外）

	4～6月計	7～9月計	10～12月計	1～3月計	総計	%
健康相談	5	5	13	12	35	11.7%
眼科	3	1	0	1	5	1.7%
皮膚科	3	1	0	0	4	1.3%
耳鼻科	0	0	0	0	0	0.0%
歯科	0	0	0	0	0	0.0%
婦人科	0	0	0	0	0	0.0%
健診フォロー	32	9	2	0	43	14.4%
身体計測	0	6	0	1	7	2.3%
血圧測定	0	0	0	0	0	0.0%
保健コース	0	0	0	0	0	0.0%
新入生面接	0	0	0	0	0	0.0%
その他	37	9	6	8	60	20.1%
産業医面談	0	1	2	0	3	1.0%
心理・精神相談	16	26	17	47	106	35.6%
健康診断証明書	31	1	1	2	35	11.7%
計	127	59	41	71	298	100.0%

表 5 処置

	4～6月計	7～9月計	10～12月計	1～3月計	総計	%
診察	51	45	51	38	185	35.1%
与薬	39	24	53	21	137	26.0%
消毒	11	12	10	6	39	7.4%
休養室	13	3	3	1	20	3.8%
病院紹介	21	4	3	5	33	6.3%
心理的対応	0	9	1	0	10	1.9%
その他	19	20	37	27	103	19.5%
計	154	117	158	98	527	100.0%

表 6 心理・精神相談内訳（再掲）

	4～6月計	7～9月計	10～12月計	1～3月計	総計	%
心理相談	14	12	14	35	75	70.8%
精神保健相談(医師)	2	14	3	12	31	29.2%
精神保健相談(看護職)	0	0	0	0	0	0.0%
リポート	0	0	0	0	0	0.0%
ポディートク	0	0	0	0	0	0.0%
キャリアライフ等	0	0	0	0	0	0.0%
電話相談(医師)	0	0	0	0	0	
電話相談(カウンセラー)	0	0	0	0	0	
電話相談(看護職)	0	0	0	0	0	
電話相談計	0	0	0	0	0	0.0%
計	16	26	17	47	106	100.0%

筑紫地区分室

筑紫地区の一般健康相談は、健康科学センター教員、眞崎、上園、丸山、入江、永野、一宮（精神保健相談）と保健師1名（工藤）、事務職員2名（高原、福寫）で行った。

平成20年度の来室者数は、学部生18名、大学院生607名、職員273名、研究生・その他3名を合わせると921名であった。疾患別利用者数では、内科が101名、外科が49名、内科・外科以外が787名であった、内科・外科以外は健診フォローが181名であった。

来室者数は、今年の1,013名より大幅に減少した。利用者の減少は、博士課程の学生が100名ほど減少しており、その減少がそのまま、全体の減少となっている。内訳で検討すると、内科・外科ともに利用者数が減少しているが、特に外科が少なくなっているようである。疾患別で検討

すると、心理・精神相談が今年の151名から166名に15名増加している。また、産業医面談も15名と増加している。

心理・精神相談が今年より増加しているが、今年の減少は一過性のものであったのかもしれない。メンタル不調を訴える学生に関する教員からの相談は、毎年増加してきている。学生を抱える教員と連携していくことが重要であると思われる。

保健活動としては、生活習慣病の予防、メンタルヘル스에問題を持つ学生の支援を中心として行った。分室の役割は広く学生のプライマリ・ケアを行うことである。今までも増して、分室で幅広い機能も充実させるとともに、メンタルヘルス面での対応の強化が望まれる。

（文責：眞崎 義憲，工藤 淳子）

表 1 来室者状況

	4～6月計	7～9月計	10～12月計	1～3月計	総計	%
学部生	6	4	5	3	18	2.0%
修士	210	105	111	84	510	55.4%
博士	35	32	13	17	97	10.5%
教職員	61	123	42	47	273	29.6%
研究生他	1	0	13	6	20	2.2%
その他	2	0	1	0	3	0.3%
計	315	264	185	157	921	100.0%

表2 疾病別利用者数（内科）

	4～6月計	7～9月計	10～12月計	1～3月計	総計	%
感冒	12	11	13	24	60	59.4%
上部消化管	5	4	1	1	11	10.9%
下部消化管	4	1	0	2	7	6.9%
頭痛	4	6	1	2	13	12.9%
その他	3	4	1	2	10	9.9%
計	28	26	16	31	101	100.0%

表3 疾病別利用者数（外科）

	4～6月計	7～9月計	10～12月計	1～3月計	総計	%
創傷・擦過傷	6	5	11	0	22	44.9%
打撲・捻挫	5	6	7	2	20	40.8%
熱傷	0	0	0	0	0	0.0%
腰痛	0	2	0	0	2	4.1%
その他	2	2	1	0	5	10.2%
計	13	15	19	2	49	100.0%

表4 疾病別利用者数（内科・外科以外）

	4～6月計	7～9月計	10～12月計	1～3月計	総計	%
健康相談	4	11	20	11	46	5.8%
眼科	2	1	0	1	4	0.5%
皮膚科	0	1	3	1	5	0.6%
耳鼻科	0	0	1	1	2	0.3%
歯科	0	0	0	0	0	0.0%
婦人科	0	1	0	0	1	0.1%
健診フォロー	82	84	5	10	181	23.0%
身体計測	47	76	76	54	253	32.1%
血圧測定	3	3	1	4	11	1.4%
保健コース	0	0	0	0	0	0.0%
新入生面接	0	0	0	0	0	0.0%
その他	3	2	0	0	5	0.6%
心理・精神相談	3	5	4	3	15	1.9%
健康診断証明書	56	37	43	30	166	21.1%
計	84	5	0	9	98	12.5%

表5 処置

	4～6月計	7～9月計	10～12月計	1～3月計	総計	%
診察	51	35	39	35	160	14.8%
与薬	38	38	35	42	153	14.2%
消毒	6	5	11	0	22	2.0%
休養室	3	11	2	2	18	1.7%
病院紹介	7	8	5	10	30	2.8%
心理的対応	35	20	28	15	98	9.1%
その他	230	181	102	86	599	55.5%
計	370	298	222	190	1080	100.0%

表 6 心理・精神相談内訳（再掲）

	4～6月計	7～9月計	10～12月計	1～3月計	総計	%
心理相談	12	8	17	13	50	30.1%
精神保健相談(医師)	37	26	25	15	103	62.0%
精神保健相談(看護職)	7	3	1	2	13	7.8%
リポート	0	0	0	0	0	0.0%
ボディーターク	0	0	0	0	0	0.0%
キャリアライフ等	0	0	0	0	0	0.0%
電話相談(医師)	0	0	0	0	0	
電話相談(カウンセラー)	0	0	0	0	0	
電話相談(看護職)	0	0	0	0	0	
電話相談計	0	0	0	0	0	0.0%
計	56	37	43	30	166	100.0%

伊都地区ウエストゾーン分室

移転が進行中の伊都地区は、平成 21 年度にセンターゾーン地区へ全学教育、比較社会文化などが移転し、ウエストゾーン地区へ、数理学研究教育棟が移転し伊都図書館の増築が完了し、六本松地区からの移転がすべて完了した。

六本地区からの移転に伴い、センターゾーン分室が新たに設置され、昨年までの伊都分室がウエストゾーン分室と名称を変更された。学生と職員あわせて 5,200 人ほどが生活する規模となった。学生の多くは実験・研究に従事しているが、取り扱う化学薬品等の種類が多岐に渡ることで、大型クレーンや旧型の実験器具を設置した部屋が多いこと、酸素欠乏作業の危険のある部屋の存在、健康影響について未知の新素材開発に携わる研究室の存在、その一方で、これらの管理や対策が必ずしも徹底されていない研究室等が存在することなど、教職員と共有する課題が少なくない。自然環境に恵まれたキャンパスは、図書館、食堂、売店、テニスコート、陸上競技場や総合体育館などが充実してきた。一方、キャンパス周辺は飲食店や遊興施設等が無く、いわゆる息抜きができる環境は不十分である。また、徒歩圏に医療機関が無いため、幅広い一次医療への対応が分室に求められる状況も依然として続いている。

平成 21 年度のスタッフは、健康科学センターの教員 4 名（一宮、福盛、眞崎、永野）、非常勤医師 1 名（佐々木）、非常勤カウンセラー 1 名（峰松）と看護職員 2 名（福盛、高尾）、事務職員 1 名（高尾）であった。来室者総数は 5,544 人と前年度（4,732 人）より 772 人増加した。内訳では、内科系、外科系、それぞれ 1,067 人（1,122 人）、361 人（397 人）、と、前年度と比べてわずかに減少した（表 1～表 4、表 6）。心理・精神相談の利用者数は 479 人（373 人）非常勤カウンセラーが前年度より 1 名減少したにも関わらず、100 人以上増加している。

教職員の来室者数が、19 年度 519 人、20 年度の 888 人、21 年度 1,333 人と増加し、来室者に占める割合でも 11%、19%、24%と高まっている。法人化後、産業医活動や健康診断、リフレッシュプログラムの実施などで、分室の存在や役割が広く知られるようになり、血圧や身体測定など定期的に自己管理として利用する教職員が増加しているものと考えられる。

内科・外科系の受診数は頭打ちとなっているが、これは診察にあたる医師の慢性的な不足によると考えられる一方、潜在的なニーズは他のカテゴリ同様むしろ増加傾向にあるのが実感である。医師の確保も今後の課題としなければならない。

（文責：永野 純、福盛 文恵）

表 1 来室者状況

	4～6月計	7～9月計	10～12月計	1～3月計	総計	%
学部生	372	215	411	263	1261	22.7%
修士	811	465	468	347	2091	37.7%
博士	233	169	186	109	697	12.6%
教職員	266	423	371	271	1331	24.0%
研究生他	23	12	56	16	107	1.9%
その他	8	14	16	19	57	1.0%
計	1713	1298	1508	1025	5544	100.0%

表 2 疾病別利用者数（内科）

	4～6月計	7～9月計	10～12月計	1～3月計	総計	%
感冒	138	100	304	156	698	65.4%
上部消化管	13	18	15	18	64	6.0%
下部消化管	13	21	17	10	61	5.7%
頭痛	22	42	34	22	120	11.2%
その他	19	35	41	29	124	11.6%
計	205	216	411	235	1067	100.0%

表 3 疾病別利用者数（外科）

	4～6月計	7～9月計	10～12月計	1～3月計	総計	%
創傷・擦過傷	50	34	58	24	166	46.0%
打撲・捻挫	37	38	43	23	141	39.1%
熱傷	11	5	2	0	18	5.0%
腰痛	3	2	4	3	12	3.3%
その他	8	3	7	6	24	6.6%
計	109	82	114	56	361	100.0%

表 4 疾病別利用者数（内科・外科以外）

	4～6月計	7～9月計	10～12月計	1～3月計	総計	%
健康相談	42	59	128	61	290	5.3%
眼科	6	12	7	9	34	0.6%
皮膚科	25	40	24	18	107	2.0%
耳鼻科	10	7	4	3	24	0.4%
歯科	6	1	5	2	14	0.3%
婦人科	4	6	4	1	15	0.3%
健診フォロー	481	338	286	123	1228	22.6%
身体計測	226	341	269	251	1087	20.0%
血圧測定	216	336	251	217	1020	18.8%
保健コース	0	0	0	0	0	0.0%
新入生面接	0	0	0	0	0	0.0%
その他	100	71	192	127	490	9.0%
産業医面談	2	6	3	5	16	0.3%
心理・精神相談	103	121	182	212	618	11.4%
健康診断証明書	429	21	16	25	491	9.0%
計	1650	1359	1371	1054	5434	100.0%

表 5 処置

	4～6月計	7～9月計	10～12月計	1～3月計	総計	%
診察	162	152	309	167	790	12.1%
与薬	226	205	317	192	940	14.3%
消毒	22	12	29	20	83	1.3%
休養室	28	50	54	47	179	2.7%
病院紹介	63	59	87	55	264	4.0%
心理的対応	73	92	146	140	451	6.9%
その他	1343	918	951	634	3846	58.7%
計	1917	1488	1893	1255	6553	100.0%

表 6 心理・精神相談内訳（再掲）

	4～6月計	7～9月計	10～12月計	1～3月計	総計	%
心理相談	42	58	91	44	235	38.0%
精神保健相談(医師)	43	45	66	90	244	39.5%
精神保健相談(看護職)	16	13	18	58	105	17.0%
リポート	0	0	0	0	0	0.0%
ポデイトク	0	0	0	2	2	0.3%
キャリアライフ等	0	0	0	0	0	0.0%
電話相談(医師)	1	0	1	3	5	
電話相談(カウンセラー)	0	3	5	4	12	
電話相談(看護職)	1	2	1	11	15	
電話相談計	2	5	7	18	32	5.2%
計	105	126	189	230	618	100.0%

伊都センターゾーン地区分室

伊都センターゾーン分室は、平成21年4月の伊都キャンパスセンターゾーンのオープンに伴い、六本松地区分室より移転し開室した。

伊都センターゾーンの健康相談・健康教育は、健康科学センターの教員4名（一宮・丸山・永野・眞崎）、看護職1名（松園）、事務職員1名（田川）と非常勤2名（今津赤十字病院内科：尾前豪医師、九大精神神経科：川島範子医師）で行った。

平成21年度は、延べ3,955名の利用があった（表1）。利用者数は、移転の影響を受けて減少した前年度より457名増加し、ほぼ例年並みの利用状況となった。

利用状況は、例年通り4～6月に集中していた（表1）。この時期は学生定期健康診断の2次検査（健診フォロー）や新入生面接が実施されることから、利用者は学生が多く9割を占める（表4）。

教職員は574名の利用があった。健康相談のほかに血圧や体重などの定期的な測定による利用が多かった。ここ数年利用者は700名を超えていたが、伊都センターゾーン分室は全学教育課や学内便ポストなどと建物が別になり、六本松地区のように通りすがりに利用することができず、減少したものと考えられる。

内科系の相談は、感冒によるものが一番多い（表2）。この中には新型インフルエンザ（A/H1N1）の流行による相談も含んでいる。

外科系の相談は、創傷・擦過傷と捻挫・打撲が主である（表3）。伊都センターゾーンには、学部1～2年生が在籍することから、全学教育科目の健康・スポーツ科学履修中の外傷や課外活動中の受傷が含まれている。また、伊都地区への通学手段は、公共交通機関が限られているために自転車やバイクを利用する学生が多く、雨天や強風時でも構わず自転車、バイクで通学するため、転倒事故などが多く創傷・擦過傷が増えた。化学実験中の外傷では創傷が10名、熱傷が5名であった。そのうち医療機関受診勧奨は熱傷の1名であった。

医師による診察は750名、与薬は622名が受けている（表5）。医師の不在時は近隣の医療機関を紹介したが、六本松地区のようにキャンパスに隣接する医療機関がないため、重症者は全学教育課に送迎をお願いした。また健康相談では、初めて親元から離れて暮らす新入生もいるため、学生が生活する環境に配慮した食事や休養などに関する療養上の助言や対応を行った。

新型インフルエンザ（A/H1N1）は、流行当初毒性の強さが不明であったため、電話による罹患状況の聞き取り調査や感染拡大防止のための指示を行い、その分は健康相談として計上した。今回、学部1年生の罹患者は431名（報告分のみ、疑い含む）で、学内感染者の約33%を占めた。サークル・部活内での感染と九大祭期間中の感染が多かった。

（文責：一宮 厚，松園 美貴）

表1 来室者状況

	4～6月計	7～9月計	10～12月計	1～3月計	総計	%
学部生	1698	551	669	191	3109	78.6%
修士	74	20	45	27	166	4.2%
博士	25	17	21	9	72	1.8%
教職員	109	97	184	184	574	14.5%
研究生他	5	3	15	3	26	0.7%
その他	1	4	1	2	8	0.2%
計	1912	692	935	416	3955	100.0%

表2 疾病別利用者数（内科）

	4～6月計	7～9月計	10～12月計	1～3月計	総計	%
感冒	150	53	215	43	461	64.4%
上部消化管	20	13	12	7	52	7.3%
下部消化管	18	13	14	11	56	7.8%
頭痛	28	9	25	8	70	9.8%
その他	28	12	19	18	77	10.8%
計	244	100	285	87	716	100.0%

表3 疾病別利用者数（外科）

	4～6月計	7～9月計	10～12月計	1～3月計	総計	%
創傷・擦過傷	76	53	50	12	191	50.4%
打撲・捻挫	52	25	32	11	120	31.7%
熱傷	3	8	5	1	17	4.5%
腰痛	5	5	5	1	16	4.2%
その他	13	6	12	4	35	9.2%
計	149	97	104	29	379	100.0%

表4 疾病別利用者数（内科・外科以外）

	4～6月計	7～9月計	10～12月計	1～3月計	総計	%
健康相談	68	52	61	13	194	6.3%
眼科	13	7	11	2	33	1.1%
皮膚科	37	29	9	6	81	2.6%
耳鼻科	8	13	4	1	26	0.8%
歯科	11	7	6	3	27	0.9%
婦人科	17	13	12	9	51	1.6%
健診フォロー	887	136	111	41	1175	37.9%
身体計測	151	130	167	55	503	16.2%
血圧測定	98	87	105	57	347	11.2%
保健コース	6	1	0	0	7	0.2%
新入生面接	78	0	0	0	78	2.5%
その他	120	17	73	87	297	9.6%
産業医面談	1	7	3	7	18	0.6%
心理・精神相談	48	67	59	43	217	7.0%
健康診断証明書	44	3	2	1	50	1.6%
計	1587	569	623	325	3104	100.0%

表 5 処置

	4～6 月計	7～9 月計	10～12 月計	1～3 月計	総計	%
診察	309	146	206	89	750	16.4%
与薬	228	138	192	64	622	13.6%
消毒	59	30	27	6	122	2.7%
休養室	68	40	42	23	173	3.8%
病院紹介	94	40	95	29	258	5.6%
心理的対応	75	35	27	30	167	3.7%
その他	1294	409	520	260	2483	54.3%
計	2127	838	1109	501	4575	100.0%

表 6 心理・精神相談内訳（再掲）

	4～6 月計	7～9 月計	10～12 月計	1～3 月計	総計	%
心理相談	0	0	0	0	0	0.0%
精神保健相談(医師)	32	49	49	39	169	77.9%
精神保健相談(看護職)	11	12	8	4	35	16.1%
リポート	0	0	0	0	0	0.0%
ポスタートーク	0	0	0	0	0	0.0%
キャリアライフ等	0	0	0	0	0	0.0%
電話相談(医師)	2	4	1	0	7	
電話相談(カウンセラー)	0	0	0	0	0	
電話相談(看護職)	3	2	1	0	6	
電話相談計	5	6	2	0	13	6.0%
計	53	73	61	43	217	100.0%

2. 産業保健活動

2) 箱崎地区事業場

箱崎地区事業場の産業保健活動は、産業医 1 名(上園)と専任衛生管理者の産業保健師 1 名(井上美緒: 総務部人事課職場環境室 所属, 安全衛生推進室勤務)を中心としつつ、健康科学センターの内科系教員 3 名(一宮・丸山・入江)、保健師・看護師 3 名(中山・谷川・田中)、事務職員 2 名(藤尾・吉村)の全面的協力を得て進めた。

(1) 日常の健康相談

箱崎分室には平成 21 年度に全体で 5,651 名の利用者があったが、教職員の利用は 1,233 名(22%)であった。健診の事後処理や体重・体脂肪や血圧の自己測定のための来室者が多かった。風邪や頭痛など身体的症状のために来室した職員は少数であった。休職中や復職後の職員など、心理的問題を抱える職員に対する面談を 1～2 カ月毎(延べ 19 名)に実施した。

(2) 健康診断

6 月に実施した職員健診の事後処理のため 8～9 月から職員が来室したが、再検査は期限を区切らなかつたため、

年末まで受診者が続いた。また、過体重の職員を対象に、ステージ理論を応用したリフレッシュプログラムを展開し、その体重管理のフォローのためや個人的な関心のため、測定を継続する教職員も多かった。受診後の結果、有所見者には所見の種類により、紹介状を発行して再検査や治療を勧告する、或いは面談を行って事後指導を実施した。

(3) 裁量労働者の報告書

箱崎地区事業場にある部局の教員から、1 年間でのべ 1409 件(254 名)について報告があった。全てこれまでに報告をしたことがある人達であり、初回の報告は無かった。健康診断の結果を参照にして、健康状態を確認した。面談希望者にはメールや電話で問い合わせを行い、面談を実施した。

(4) 長時間労働者の面談

時間外勤務が 1 か月で 100 時間を超えるか、2～6 月の平均で 1 か月が 80 時間を超える場合は、健康障害を生じていないか確認するため、面談を行った。H21 年度は延べ 14 名であり、面談結果は意見書にて所属部署や部

局へ報告し事後対策を依頼した。

(5) 職場巡視

箱崎地区・貝塚地区の部局を順に、毎月 1 回巡視した。巡視は産業医、専任衛生管理者の他、巡視先部局の衛生管理者 1～2 名・工営係 1～2 名が加わり、1～1.5 時間程度見て回った。巡視結果は産業医と専任衛生管理者の連名

で報告し、部局からは改善報告書が提出された。年々、部局での対策が進んで指摘事項の改善が見られるものの、相変わらず、整理・整頓・清潔・清掃の 4S、高圧ボンベの固定、本棚やキャビネットの固定、消火器・防災設備・避難通路、喫煙に関することが指摘された。薬品管理システムへの薬品登録は徐々に進んでいた。

表 1:平成 21 年度職場巡視

	巡視箇所	詳細
4 月	理学研究院等	科学部門 (2 号館, 旧工学部 3 号館)
5 月	理学研究院等	先導研 (2 号館 2 階, COE 棟, 旧工学部共同実験棟)
6 月	農学研究院	1 号館 1～6 階
7 月	農学研究院	2 号館 1～6 階
8 月	農学研究院	3 号館 1～6 階
9 月	貝塚地区	文学部
10 月	情報基盤研究開発センター	情報基盤研究開発センター (1～6 階)
11 月	附属図書館	
12 月	事務局	情報企画課事務室 (第 1 庁舎 1 階)
1 月	理学研究院等	事務部 (本館 1～2 階)
2 月	理学研究院等	宙空環境研究センター (1～2 階)
3 月	理学研究院等	博物館

(6) 安全・衛生委員会

箱崎地区事業場の衛生委員会は貝塚地区部会(委員長: 経済学研究院長, 川波洋一先生)の担当で毎月 1 回, 原則として第 4 火曜日の午前 10:30 から開催された。産業医・専任衛生管理者と労働衛生コンサルタントから都合 2 件の職場巡視報告とその改善報告, 各部会からの活動報告がなされ, 折々に議題が提案された。喫煙場所・駐車場問題, 防犯対策などが議論された。最後に産業医と労働衛生コンサルタントがそれぞれミニレクチャーを行った。21 年度は新型インフルエンザの集団感染が懸念されたが, 幸い本学では事前の予防教育や連絡体制が周知され, 集団感染は発生しなかった。

(文責: 上園 慶子, 井上 美緒)

表 2:ミニレクチャーの話題

	産業医	労働衛生コンサルタント
4 月	禁煙大作戦	ヒヤリハット
5 月	新型インフルエンザに関する対応	ヒヤリハット
6 月	梅雨時の湿気対策	職場における熱中症の予防
7 月	正しい食生活を送るために	平成 20 年度の環境測定の結果
8 月	肩こり・五十肩, 及び喫煙対策	10 月 1 日からの衛生週間におけるパトロール
9 月	新型インフルエンザの対策	—
10 月	脂肪肝炎	薬品の取扱い注意事項の掲示
11 月	認知症	火災
12 月	メンタルヘルス対策の進め方	—
1 月	新型インフルエンザ	化学系企業の爆発事故に関する安全管理
2 月	—	電気器具の危険をチェック
3 月	OTC 医薬品	—

2) 病院福岡地区事業場

病院福岡地区の平成 20 年度の産業保健活動は、産業医丸山と産業保健師井町が担当した。年間を通じた産業医の面談件数は 382 名であり（病院教職員と医学部地区教職員を含む）、本学の全事業場の産業医面談数 659 名の過半数を占めている。また身体関連での面談（109 名）を心理精神面での面談（273 名）が大きく上回っているのは、病院職員の場合には対人サービスが多く、業務負荷が全体的に大きいことに起因しているものと考えられる。また身体関連での面談では職員健康診断の事後措置としての面談（50 名）と長時間勤務に対する面談（30 名）が多かった。

病院職員における産業衛生相談や長時間労働の面談に関しては、事務系職員を入江・野村が、医療系職員（医師、看護師、薬剤師、技師等）を主に丸山・井町が対応し、精神的な問題に関しては一宮が対応した。病院地区でも心理面での問題を抱えるケースが次第に多くなり、磯貝カウンセラーへの相談件数も徐々に増えつつある。なお年度途中に井町産業保健師の退職により、戸田保健師が後任に当たった。事務は福元（常勤）と奥村（非常勤）が担当した。職員健康診断で血圧高値、脂質異常、耐糖能障害、過体重を指摘された職員に対しては、他地区同様リフレッシュプログラムを呼びかけており、徐々に対象者も増えつつある。

職場巡視は病院地区事業場においても年度計画に基づいて予定通りに行われた。病院内も病棟、事務部、検査部や放射線部など業務の特殊性によって指摘事項はまちまちであったが、室内照度の問題（照度不足）や配線の問題（タコ足、ケーブルの過長と巻線）はかなり共通した指摘事項であった。

安全衛生委員会も年間を通して予定通り行われた。委員会では巡視報告以外にも職員健診や特殊検診の案内と結果報告、時間外労働の実態、衛生週間の取り組みなどについて議論された。

その他シックハウスの起因物質とされるホルムアルデヒドの発がん性が指摘され、法令に基づき現在病院内では WG を作り検査部での一元管理が進められつつある。

（文責：丸山 徹，戸田美紀子）

3) 馬出地区事業場

馬出地区事業場の産業保健活動は、産業医の入江と産業保健師の野村が担当した。馬出地区事業場と病院福岡地区事業場を合わせた病院地区分室への教職員の来室者

数は、平成 16 年度の 546 名から平成 17 年度は 941 名、平成 18 年度は 1,287 名、平成 19 年度は 1,405 名、平成 20 年度は 1,605 名、平成 21 年度は 1,440 名（一時移転のため減少）へと著しい増加を示しており、大学法人化以降約 3 倍に増加している。概して、教職員の過重労働やメンタルヘルス不全、あるいはそれらに起因する休職者数が増加し、そのための面談件数が増えている。特に、心理・精神相談は、平成 16 年度の 96 名から平成 21 年度は 784 名となり、約 8 倍に増加している。産業医の入江は、病院以外の医歯薬系の馬出地区の担当であるが、これまで職場メンタルヘルスや平成 13 年の脳・心臓疾患の労災認定基準改正の草案作成に係わった経緯から、過重労働やメンタルヘルス問題が著しい病院の職員の健康管理をまかなり担当している。

（文責：入江 正洋，野村 桃子）

4) 大橋地区事業場

大橋地区産業医として、職場巡視を行った。

（文責：山本 和彦）

5) 筑紫地区事業場

筑紫地区の平成 20 年度の産業保健活動は、産業医眞崎と保健師高尾が担当した。教職員の来室者数は 273 名で昨年より 36 名増加しているが、産業医面談を求める職員が増加して、15 名となった。筑紫地区での産業保健活動の認知が広がっていることおよび学生のメンタルヘルス問題に関して対処に苦慮している教員が多いことが推察される。

長時間労働を行っている裁量労働勤務者が著しく多いわけではないが、長時間労働を行っている者が偏っていることは否めない。改善を指示しているところであるが、長期的に改善が見られることは少ない。啓発とともに全学での対応が望まれる。

事業場の職場巡視・衛生委員会は年間を通して予定通り行われた。キャンパス内にクレーン等の工作機械が多く設置されていることもあり、各衛生委員の意識は高く活発な議論が行われた。

従来、懸案となっていた高圧ガスボンベの管理問題が、部局毎にガスボンベ貯蔵庫を設置して、集中管理するシステムへ移行することが決定された。

職場巡視ではここ数年の巡視成果が蓄積され、指摘事項の改善が多く見られようになった。その反面、改善が見られない部署が際だってきた面も否めず、今後は

さらなる指導が必要だと考えられる。

(文責: 眞崎 義憲)

6) 伊都地区ウエストゾーン事業場

伊都地区ウエスト・ゾーンでは、産業医永野と保健師高尾が毎月の職場巡視と安全・衛生委員会、ならびに健康診断および事後措置などの産業保健活動を担当した。

教職員の伊都地区ウエスト・ゾーン分室への来室者は19年度519人、20年度888人、21年度1333人へと年々増加し、受診者に占める割合でも24%と高まっている。

職員健診の結果に基づいて行った、肥満者を対象とした継続的な生活指導「リフレッシュプログラム」は本年度も好評であり、プログラム終了後も測定を継続する職員が多かった。

職場巡視は毎月1回、産業医、労働衛生コンサルタント、安全・衛生委員、保健師、巡視先の衛生管理者、および人事係のメンバーで実施された。主な指摘事項は、棚等の転倒防止、整理整頓、試薬の管理方法であった。

各部門でも週1回、衛生管理者が巡視を行っており、2週間以内の改善報告を求めている。安全衛生に関する労働者の意識も向上しているが、部門により報告状況に差があり、更なる周知・徹底が必要である。

安全・衛生委員会の主な議題は、喫煙所の指定、窓からの落下防止対策、共用部分の使用基準、駐車・駐輪マナーについてであった。

(文責: 永野 純, 高尾 祐果)

7) 伊都地区センターゾーン事業場

今年度、六本松キャンパスの移転によって新たに開設された伊都地区センターゾーン事業場の産業保健活動は、六本松を引き継ぐ形で一宮が嘱託産業医として担当した。

六本松キャンパスの機能移転であったが、後期には数理研究院が移転してきた。それでも引き続き教職員の相談件数はさほど多くなかった。

事業場の巡視・衛生委員会は年間を通して予定通り行われた。この地区は実験施設はあるものの数は少なくまた大きな施設でもないため、巡視においても安全面の問題は多くない。しかし、新しいキャンパスであるために主として屋外に安全面の問題を多く抱えている。衛生委員会では新たにキャンパス内の喫煙場所が検討され、設定された。

(文責: 一宮 厚)

3. 学生相談

(1) 箱崎地区分室

箱崎地区・学生相談では、常勤カウンセラー(福盛)、非常勤カウンセラー(磯貝(平成21年1月まで)、平井、吉永、斎藤、高橋、高野、太田:各週1回・4時間が主)で対応した。

常勤2名体制の後任人事の凍結で前年度まで業務が回らなくなっていたが(例えば箱崎での常勤カウンセラーの予約率が130%を超える月もあった)、凍結が長期に渡り始めたので、業務の質を落とさないためにも、これまで提供できていた全学的な対応ができないことが心苦しいが、全体業務量を調整する方向で対応することにつつまある。

<個人カウンセリング>

後任人事の停滞により、飽和状態であった相談方法を改善するためにウエイティングリストを導入したり、他の部局に対応を依頼したことによる結果であると考えられる。相談相談の特徴は、従来通りうつ、対人関係、ひきこもりからの復学相談などの問題が多く、発達障害を疑われる事例などもみられた。また教員・保護者によるコンサルテーションの事例が増えてきている。本年度から相談分類をより詳しいものに改善した(巻末参照)。

<サイコロトリート活動>

サイコロトリートは、エネルギーを失っている学生や、人といふことに緊張をおぼえる学生が主役となれる安全な居場所を提供することを目的としている。平成20年度より新しく参加者が増えてきており、活性化しつつある。平成21年度の主な活動は、野外に出る活動や季節を感じるパーティーなどのsocial活動が多く「恒例:能古島ツアー」「紫陽花を見に行くツアー」「ポトラックパーティー」「リトリート忘年会」などを月に1~2回実施した。毎回8~10人が参加して、いろいろな活動を楽しんだ。安全で安心した場にするために、コミュニケーションがとれるツールとして、ボードゲームなどを導入し、日々の学生生活にささやかなポジティブな出来事体験をしてもらったり、野外活動やいろいろな集団活動の体験量の少ない学生さんに体験の幅を広げてもらったりしている。平成21年度から、スタッフとして人間環境学研究院の大野真利奈さん、隈本晶子さん、飯田想平さんに入ってもらい手伝いをお願いしている。また、九州産業大学の峰松教授にもご支援・指導いただいている。

＜親の会活動＞

親の会を平成20年12月6日（土）、平成21年3月29日（日）の2回行った。第1回は「コーチング：発問を巡って」というテーマで峰松修先生にご講演いただいた。第2回目は、「学生相談と援助的コミュニケーション」というテーマで本山智敬先生（西南学院大学カウンセラー）に講話していただいた。いずれも好評で、平成21年度も引き続き行ってほしいという要望があった。

(2) 伊都地区分室

伊都地区学生相談では、平成20年度は相談件数が184件（実人数は38人）（職員・保護者を含む）であった。昨年に比べて減少傾向にあったのは、予約時の学生の曜日希望から、修学相談室へのリファーが増えた事による。主な面接のテーマは、うつ、研究室適応、学業、神経症、依存など多岐にわたった。

メンタルヘルス企画として、「九州大学健康科学センター伊都地区健康相談室ウェルネスセミナー：映画で学ぶメンタルヘルス」を平成20年6月27日17:00～おこなった。

(3) 病院地区分室

病院地区学生相談では、平成20年度は相談件数が109件（実人数は16人）（職員・保護者を含む）であった。平成21年1月より、職員へのカウンセリングを強化するため、新規の非常勤産業カウンセラーとしてこれまで箱崎地区で学生相談を行っていたいただいていた磯貝希久子氏を移動配置した。

(4) 筑紫地区分室

筑紫地区学生相談では、週に4時間ほど、常勤カウンセラーが対応した。平成20年度は相談件数が57件（実人数は6人）（職員・保護者を含む）であった。

（文責：福盛 英明）

4. 精神保健相談

精神的な問題について各キャンパスの健康科学センター一分室において医師が診療したものを精神保健相談業務としてまとめて報告する。平成15年度以降、常勤の精神科医（一宮）と心療内科医（入江）が中心となって精神症状を有する学生・教職員の診療業務に携わっている。しかし、年々、精神面の問題での談者は増えており、内科医、保健師・看護師などによる対応も増えている。ここでは、医師が診療した相談についてのみまとめる。診断は15年度からICD-10に従って分類している。

常勤の精神科医（一宮）は、平成20年度も大橋地区を除くすべてのキャンパスをまわって各地区少なくとも週に半日の相談の機会を確保した。月曜は午前が病院地区で午後は箱崎地区、火曜は午前が伊都地区ウェストゾーンで午後は同センターゾーン、水曜は午後に筑紫地区で精神保健業務に従事した。これだけではカバーできないので木曜午前の伊都地区センターゾーン、金曜午後には病院地区でも業務に当たる場合があった。また金曜午前は従来から九大病院の精神科神経科外来で診察をしてきたが、そこでも九大の学生・教職員の診察を行っている。そもそも常勤の精神科医1人では6つのキャンパス全てをカバーするには十分ではない。従来通り医学部精神科神経科に非常勤業務をお願いした。20年度は箱崎地区が水曜に鬼塚俊明助教ついで大学院生の織部直弥医師、六本松地区に来ていただいていた分は伊都地区が遠いために病院地区に来ていただくことにして水曜に横田謙治郎助教に来ていただいた。

常勤の心療内科医（入江）は相談件数の多い箱崎地区で火曜1日、病院地区で月曜日1日などで中心的に対応に当たった。また各地区で、他の内科医師も精神面の問題を抱えた学生・教職員の診療している。

対象となった学生は、本人から診察をもとめて来所した者、健康科学センターあるいは学生生活修学相談室の臨床心理士の教員からの診察の依頼があった者が主であった。また、入江と一宮は産業医として、教職員のメンタルヘルスに関する業務がさらに増加している。

こうして平成21年度の精神面に関する診療は139名の学生と163名の教職員、卒業生などのその他16名に対して行った。学生の診療者数は前年度が139名であったので奇しくも変化がない。診療回数は延べ637回で前年の739回に比べ約14%減少し、診療回数は1人当たりの約4.6回／人（最多74回～最少1回）に減っている。長期になる学生は紹介するが、九大病院に受診することができる学生は引き続き大学病院外来で治療している。伊都地区の学生が九大に受診することが難しいので他の民間病院に紹介して場合が多いのが一因であろう。教職員は前年度の191名に比べて約15%減少した。減少はしたものの独法化前の平成14年の25名に比べると高水準であることに変わりはない。延べ診療回数は685回で前年の781回に比べ約12%減少したものの、1人当たりの診療回数は前年度の約4.1回から約4.2回／人（最多19回～最少1回）に若干増えた。産業保健は、復職後の職場環境調整など本人の診察だけでは終わらないので一人あたりにかかる時間は増加す

る傾向にある、産業医としての業務に多くの時間を取られている状況に変化はない。

診断内訳は、学生では、ストレス関連障害ならびに神経症（F4）102名、うつ病を中心とする感情障害（F3）17名、妄想性障害を含む統合失調症（F2）圏内1名、その他19名で、教職員はストレス関連障害ならびに神経症（F4）65名、うつ病を中心とする感情障害（F3）19名、妄想性障害を含む統合失調症（F2）圏内2名、アルコール障害を主とする精神作用物質による障害（F1）1名、その他104名であった。その他とはほとんどが教職員の上司などの関係者との面談である。産業保健においては、職員自身のみならず、職場での対応などのために関係者支援が重要になるためである。

（文責：一宮 厚）

5. 健康診断

学生定期健康診断

平成21年度の学生定期健康診断は、例年通り病院地区の同窓会館を会場として実施した。4月2, 3, 6, 7日が新入生（新入修士学生等を含む）、9日から21日までが在校生を対象とした健診であった。最終日の4月22日は、新入外国人留学生の健診日とした。その後、6月下旬まで再検査や精密健診を行った。

平成21年度の定期健診の全体的な受診率は74.8%で、前年度の73.6%から微増を示した。学部生の受診率は75.4%でここ数年上昇傾向にある。一方、大学院生の受診率は75.7%と学部生を上回っているものの、ここ数年の受診率は頭打ちとなっている。例年と同様に、学部新入生は99.4%と高い受診率を示し、就職活動年に相当する学年では受診率が高くなる一方、その間の学年、とりわけ学部2年生の低い受診率も例年と同様であった。また、学部によるばらつきが小さくないことも例年通りであり、受診率が低い学年や学部では、当該部局等への働きかけにも拘らず、効果が見られない集団も存在する。

健診の実施については特に大きなトラブルはなく、日程通りに無事終了した。ただし、指定日外受診者の中には健診項目の異なる者があり、その対応が煩雑であったことが反省材料として残る。また、学務部と業者との間での情報交換の不備により、健診証明書の自動発行にトラブルが発生し、数日間は分室での手動発行に追われる事態となった。来年度以降、このようなミスを防ぐ態勢を整備する必要がある。

（文責：永野 純）

精密健診

定期健康診断で精密検査が必要と判断された者について、精密健診を行った。心電図や心音にて心疾患が疑われた者は、健診会場にて健康科学センター医師が診察を行い、必要に応じて後日分室で面談を行った。血圧の高い者（150/90 mmHg以上）や脈拍の速い者（110 bpm以上）は、後日分室にて二次測定および自己測定を行い、異常が続く場合は医師が診察を行った。尿検査異常（蛋白または糖が1+以上）のあった者は、後日分室にて最大2回の再検査を行った。既往歴などから必要と判断された者についても、分室にて診察を行った。これらの健診にて、さらなる精査や治療が必要と判断された者については九大病院などの二次医療機関へ紹介した。

胸部X線（間接撮影）で異常所見のあった者のうち、骨格系異常者（高度の側弯など）は整形外科に紹介し、心疾患が疑われた者は、分室にて健康科学センター医師が診察を行った。これ以外の者（主に呼吸器疾患が疑われた者）については、福岡結核予防センターの県庁内診療所および伊都、病院、箱崎の3地区で検診車による直接撮影を行った。その結果治療または精査が必要な者は九大病院へ紹介し、精査は不要だが経過観察が必要な者は3ヶ月、6ヶ月、または12ヶ月後の再検査（直接撮影）を行った。胸部X線の読影（間接撮影、直接撮影とも）は、九大病院放射線科の全面的な協力のもとに行われた。

以上についての該当者数は、「資料」章の「定期健康診断精密検査実施状況」項に示す。

（文責：永野 純）

職員健康診断

大学法人化以降、国立大学時代に行っていた健康診断と、労働安全衛生法に則った健康診断の両方を実施することになり、事後措置を含めるとほとんど1年中何らかの健康診断業務に従事している感がある。国立大学時代は一般健康診断の受診率は低かったが、法人化以降は受診率を高めるための様々な活動を行い、平成21年度の職員総合健康診断（一般健康診断および前期特殊・特定業務従事者健康診断）の受診者数は5,454人、受診率は99.01%（平成20年度は98.91%）に達している。具体的な健康診断の種類と時期は以下の通りである。

- ・一般健康診断（6月）
- ・特定業務従事者健康診断（前期6月、後期11-12月）
- ・特殊健康診断（前期6月、後期11-12月）
- ・雇入時健康診断（各月随時）

- ・労災二次健康診断（8月）
- ・海外派遣労働者健康診断（随時）
- ・遺伝子組換え及び研究用微生物実験従事者健康診断（11月）
- ・VDT作業従事者健康診断（11月-12月）
- ・電離放射線健康診断（2月, 4月, 9月, 11月）
- ・大腸集団検査（11月）
- ・胃集団検査（11月）
- ・子宮頸がん検査（11月）

このうち、雇入時健診の受診数は1,113人、後期特殊・特定業務従事者健診は2,361人、海外派遣労働者健診は13人、遺伝子組換え等実験従事者健診は7人で、総合健診（上記）をあわせた延べ人数は8,948人であった。

（文責：永野 純）

職員健康診断・事後措置

総合健診等の結果、再検査や精密検査が必要とされた事後措置対象者は以下の通りであった。

- ・二次検査（尿）：786人
- ・二次検査（血圧）：415人
- ・要面談：74人
- ・要精査（再検査）：1,067人
- ・治療継続勧奨：860人

（文責：永野 純）

遺伝子組換えおよび研究用微生物実験従事者等の健康診断

本学では、九州大学遺伝子組み換え実験安全管理規則および九州大学研究用微生物安全管理細則の規定に基づいて、遺伝子組み換えおよび研究用微生物を用いた実験に従事する職員、ならびに学生を対象として、特別健康診断を実施している。遺伝子組み換え実験安全委員会の委員である健康科学センターの教員（医師）、および病院地区の保健師が実務を行い、総務部職場環境室が事務処理を担当している。

本年度の対象者は、1,288名（職員476名、学生812名）であった。全員を対象に、質問票を用いて既往歴、現在の治療歴、自覚症状、定期健康診断受診の有無と結果についての問診を行った。

昨年度から、下記基準に示すレベル3以上は全員特別健康診断対象者とし、下記基準2あるいは3に該当する者に関しては健康科学センターの教員（医師）が問診票による判定を行った上で対象者を決定し、特別健康診断を実施することとなった。健診結果の総合判定は同じ教員

が実施することになった。

以下に特別健康診断実施にかかる要否判断の基準を示す。

1. レベル3以上（「遺伝子組み換え実験従事者のうち封じ込めレベルがP3以上」あるいは「研究用微生物実験従事者のうちレベル3以上の研究用微生物を用いて実験を行う者」）の実験従事者
2. レベル2の実験従事者のうち、人に対する病原微生物を取り扱う者で、かつ「自覚症状」や「定期健康診断受診状況と結果」等の記載から受診が必要と判断された者。
3. その他、とくに受診が必要と判断された者。

上記の基準2, 3に該当した者7名について、問診票などによる判定を実施し、7名全員が特別健康診断の対象外となった。特別健康診断はレベル3の者7名（職員5名、学生2名）のみが対象となり、財団法人医療情報健康財団において特別健康診断を実施した。特別健康診断の結果をもとに総合判定を実施したが、全員に異常を認めなかった。なお、特別健康診断の実施期間は後期総合健診（12月18日～12月3日）であった。

質問票は、平成16年以降は職場環境室で保管している。また、血液検査の余剰血清は、筑紫地区の冷凍庫で保管しており、その保管期間は原則として5年間である。

（文責：眞崎 義憲）

外国人留学生の秋季特別健康診断

実施期日：平成21年10月28日

実施場所：九州大学国際ホールと健康科学センター箱崎分室

対 象 者：春季留学生は、留学生センターのみならず正規の学部生にも含まれるため、全体数の把握は困難であった。秋季入学者の留学生で、入学の際に胸部X線撮影を含む健康診断を受け、健康診断書を提出し、かつ結果に異常が無いと判断された場合は、健康診断受診を免除する措置を行った。その結果、秋季の留学生健診対象候補者525人のうち、受診が必要であった者は326人であった。この数は、平成20年度（179人）と比較して大幅に増加している。

受 診 者：288人（平成20年度160人）。

受 診 率：88.3%（平成20年度89.4%）。

検査項目：身体測定、尿検査、血圧測定、心電図、内科診察、胸部X線撮影

秋季は、胸部X線撮影の異常者は3名、尿検査の異常者は16名、血圧測定の異常者は6名、その他内科診察での有所見者が1名であった。尿検査・血圧・心電図に所見がある学生は健康科学センター分室において二次・精密検査を行った。胸部X線撮影で精査が必要とされた学生は、日本人学生と同様に、放射線科で直接撮影による再検査を行い、必要に応じて九大病院呼吸器科や放射線科等を紹介した。

(文責：永野 純)

6. 健康および安全・衛生に関する全学会議

1) 保健管理専門委員会

保健管理専門委員会は、健康科学センター長を委員長とする全学的な学生保健管理業務に関する会議であり、本会議を通じて学生保健管理に関する日常業務への全学の理解と協力を得ている。

以前は各部局の学生委員会の委員のうちから選ばれた教員と関連の事務官(計26名)で構成されていたが、平成17年度から各地区で選出された学生委員会委員と事務官によって構成することに変更され、更に平成18年度の第3回保健管理専門委員会では、伊都地区を含めて委員を「地区別学生専門委員会規定」で定めた順番で選出することが承認された。

現在は数多くの委員会の集約や委員会への参加の負担軽減などのために、書面会議も採用しており、教務課保健係が事務を担当している。平成21年度のも前年度と同じく、計12名の委員で以下のような内容について開催した。

第1回

日時：平成21年7月2日(木) 午後2時00分から

場所：箱崎理系地区21世紀交流プラザ I 2階 講義室A

報告：

1. キャンパス内の喫煙について

議題：

1. 副委員長の選出について
2. 平成20年度学生健康診断等経費の決算(案)について
3. 平成21年度学生健康診断等経費の予算(案)について
4. 新型インフルエンザへの対応について
5. その他

第2回

日時：平成21年8月24日(平成21年9月1日締切の書面会議)

議題：

1. 平成22年度 学生定期健康診断実施要項(案)について

第3回

日時：平成22年2月17日(平成22年2月26日締切の書面会議)

報告：

1. 平成21年度学生保健管理に係る年間行事について
2. 九州大学の喫煙対策について

議題：

1. 平成22年度学生保健管理計画(案)について
2. 保健管理専門委員会委員 地区別選出委員の選出方法について

(文責：上園 慶子)

2) 安全衛生推進室会議

環境安全衛生推進室会議(旧 安全衛生推進室会議)

第1回

日時：平成21年4月24日(金)13時30分～14時10分

場所：事務局第二庁舎3階 第三会議室(小)

議事に先立ち、本会議新構成員の紹介があった。

(新構成員)

- ・ 健康衛生管理部門長
一宮 健康科学センター教授
- ・ エネルギー資源管理部門長
光武 施設部環境整備課長
- ・ 総括管理部門長
野口 総務部職場環境室長
- ・ 総括管理部門
森 総務部職場環境室長補佐

報告：

- (1) 安全衛生推進室の体制について

「環境安全衛生推進室」への名称変更について、4月17日(金)開催の部局長会議において体制変更を報告したこと、また、規則改正については、5月15日(金)開催の教育研究評議会で審議予定である旨報告があった。

- (2) 各部門からの報告

①健康衛生管理部門

3月25日(水)に行われた同部門会議において、以下の議題等について審議した旨報告があった。

- ・平成 21 年度雇入時健康診断における精密検査未受診者に対する対応について
- ・安全衛生推進室健康衛生管理部門長の交代について
- ・過重労働 Web 調査システムの利用について

②環境安全管理部門

特になし。

③高圧ガス等安全管理部門

伊都地区における高圧ガスボンベに係る保管状況調査結果について報告があった。

④特定分野安全管理事務部門

4 月 17 日（金）開催の部局長会議において、いくつかの研究室で、届出等がなされないまま動物実験や遺伝子組換え実験を実施していた旨の報告があったため、総長からの指示を受け、各研究室に掲示するための注意喚起ポスター（案）作成を検討中であり、今後他大学の状況等も踏まえて作成予定である旨報告があった。

⑤エネルギー資源管理部門

特になし。

- (3) 平成 20 年度職員総合健康診断の受診結果について
受診率は全学で 98.91%であった（平成 19 年度 99.96%）。今年度は人間ドックの受診確認を昨年度より一層厳密に行ったこと、また、100%の受診率を目指して、今後一層の努力をする必要がある旨報告があった。

議題:

(1) 学内規則の改正について

環境安全衛生推進室の名称変更に伴う学則及び部局長会議規則の改正と、施行日は6月1日となることを審議し、承認した。

(2) 環境安全衛生推進室規程（案）について

環境安全衛生推進室の名称変更に伴う規程の改正について審議し、承認した。

(3) 学内規程の改正について

環境安全衛生推進室の名称変更に伴う放射線障害防止委員会規程、核燃料物質管理委員会規程、環境安全管理委員会規程、事務局等事務分掌規程、総括安全衛生管理者等規程及び安全・衛生委員会規程の改正について審議し、承認した。

(4) 環境安全衛生推進室の運営等に関する内規（案）に

ついて

環境安全衛生推進室の名称変更に伴う内規の改正について審議し、承認した。

(5) 環境安全衛生推進室の体制について

環境安全衛生推進室の衛生担当副室長について、一宮健康衛生管理部門長が承認された。

続いて、衛生担当副室長が総括管理部門、健康衛生管理部門、特定分野安全管理事務部門を、安全担当副室長が環境安全管理部門、高圧ガス等安全管理部門、エネルギー資源管理部門を主として担当することを承認した。

また、今後の組織図は、今後副室長の担当に沿って整理することとなった。

(6) 高圧ガス製造施設危害予防規程の改正（案）について

4 月 1 日付けで改正した高圧ガス製造施設危害予防規程について、箱崎地区事業場における保安統括者及び保安統括代理者に修正が生じたので、あらためて審議し承認した。

続いて、伊都地区事業場における保安技術管理者について、現在適任者がいないため、当分の間、横本高圧ガス等安全管理部門長が務めることを承認した。

(7) 九州大学喫煙対策検討WGの設置（案）について

前回（3月30日）の本会議で提案した九州大学喫煙対策宣言（案）及び基本方針（案）について、4月17日までに特段の意見はなかった旨報告があった。

また、本宣言（案）及び基本方針（案）については、4月27日（月）開催のエグゼクティブ・ミーティング及び拡大役員会を経て、5月15日（金）開催の部局長会議に報告予定である旨説明があった。

続いて、この基本方針を踏まえた行動計画を作成するため、推進室長一任により、総括管理部門及び健康衛生管理部門から構成員を選出し、喫煙対策WG（案）を設置しこれを承認した。

なお、意見箱への要望を受けて、箱崎キャンパスの各通用門 9 カ所に「構内禁煙」の立て看板を設置した旨報告があった。

● 次回の安全衛生推進室会議は、6月下旬開催予定とした。

第2回

日時: 平成21年7月29日(水) 16時00分～17時25分

場所: 事務局第二庁舎3F 第三会議室(小)

報告:

(1) 各部門の報告

①健康衛生管理部門

5月27日(水)及び6月17日(水)に行われた同部門会議において、以下の議題等について審議した旨報告があった。

- ・過重労働 Web 調査システムの利用について
- ・平成20年度職員総合健康診断事後措置状況について
- ・平成21年度健康診断結果配布時における個別通知について

②環境安全管理部門

平成20年度に実施した作業環境測定の結果について報告があった。

③高圧ガス等安全管理部門

7月29日に開催された筑紫地区安全衛生委員会において、同地区における高圧ガスボンベ貯蔵庫設置案を提案し議決されたこと、また、今後、全学的な予算措置が可能かどうか、財務部とともに検討する予定であることについて報告があった。

続いて、各地区における高圧ガスボンベ管理の現状と課題について報告があった。

④特定分野安全管理事務部門

麻薬、動物実験、国際規制物質等の取扱い上、今後確認を要する案件について報告があった。

また、動物実験や遺伝子組み換え実験を行う際の注意喚起ポスターを作成したこと、今後、麻薬や国際規制物質等についても、同様の注意喚起ポスターを作成予定であることについて報告があった。

続いて、今後、研究上の不適切な管理がないよう、特定分野安全管理事務部門が使用者に対して指導していくよう依頼した。

⑤エネルギー資源管理部門

6月23日(火)に開催された同部門会議において、以下の議題等について審議した旨報告があった。

- ・省エネルギー法改正に伴うエネルギー管理体制について
- ・九州大学の地球温暖化対策について
- ・エネルギーの「見える化」について

(2) 喫煙対策行動計画(案)について

喫煙対策検討ワーキング・グループにおいて審議の上決定した喫煙対策行動計画(案)について報告があった。

(3) 安全衛生セミナーIの実施について

全国安全週間の実施事項の一環として、7月7日(火)、作業主任者を対象に実施した安全衛生セミナーIの概要について報告があった。

議題:

(1) 九州大学の地球温暖化対策(案)について

九州大学の地球温暖化対策(案)及びエネルギー管理体制図(案)について議決した。

また、9月18日(金)開催予定の部局長会議に報告する予定である旨説明があった。

(2) 学内における喫煙場所の設置基準(案)について

喫煙対策検討ワーキング・グループにおいて検討した学内における建物外・建物内喫煙場所の設置基準(案)について議決した。

また、8月5日(火)開催予定のエグゼクティブ・ミーティングに議題提出したうえで、各地区協議会あてに、建物外・建物内喫煙場所の選定を依頼する予定である旨説明があった。

(3) 学内における煙草販売自粛要請(案)について

生協・ローソン等、学内で煙草及びその関連物品を販売している業者あてに販売自粛要請文(案)を送付することを議決した。

また、8月5日(火)開催予定のエグゼクティブ・ミーティングに議題提出したうえで、各業者に販売自粛の申し入れを行う予定である旨説明があった。

●次回開催予定

10月下旬頃に開催する予定である。

以上

第3回

日時: 平成21年10月8日(木) 10時30分～11時30分

場所: 事務局第一庁舎2F 第一会議室

報告:

(1) 各部門の報告

①健康衛生管理部門

7月15日(水)及び9月9日(水)に行われた同部門会議において、以下の議題等について審議した旨報告があった。

- ・平成21年度健康診断結果配布時における個別通知の内容について
- ・産業医による意見書(汎用様式)について
- ・雇入時健康診断事後措置におけるリフレッシュプログラム参加勧奨について

続いて、外国人留学生から提出される健康診断証明書は内容に不備が多く、彼らに対する部局の指導内容にも差があること、また、今後外国人留学生受け入れが増加するので、現状調査をした上で報告したい旨の発言があった。

②環境安全管理部門

10月6日(火)に行われた同部門会議において、以下の議題等について報告した旨報告があった。

- ・薬品管理システムについて
- ・平成21年度前期の作業環境測定及びリスク調査について
- ・学生に対する安全教育について
- ・未登録化学物質について

③高圧ガス等安全管理部門

伊都地区及び筑紫地区におけるボンベ貯蔵庫の整備状況及び筑紫地区で実施した高圧ガス講習会について報告があった。

④特定分野安全管理事務部門

麻薬及び核燃料物質等の管理状況について調査した結果不適切な管理があったこと、麻薬関係については福岡県に、核燃料物質関係については文部科学省にそれぞれ報告済みである旨報告があった。

⑤エネルギー資源管理部門

本学の地球温暖化対策に基づき、筑紫、大橋地区にエネルギーモニター、伊都地区に太陽光発電装置を設置することについて報告があった。

(2)七大学安全衛生管理担当者連絡協議会について

9月4日(金)北海道大学で開催された七大学安全衛生管理担当者連絡協議会における協議事項について

報告があった。

(3)衛生管理者試験準備講習会等について

8月6日(木)・7日(金)に実施した衛生管理者試験準備講習会の概要と、9月2日(水)・28日(月)に行われた衛生管理者資格取得試験に対し、計49名の申込があった旨報告があった。

(4)学内における煙草及び関連物品の販売自粛依頼について

九州大学生協同組合及びローソンあて煙草及び関連物品の販売自粛の申し入れを行ったところ、11月末日を目途に販売中止すること、また、ローソンから現在検討中である旨回答があった。

議題:

(1)七大学安全衛生管理担当者連絡協議会中間答申について

七大学答申内容の項目及びトピックスについて説明があった。

続いて、「災害対策」の項目に関するたたき台(案)について説明があった。

その後意見交換が行われ、「防犯」と「学生の薬物使用」について、いずれかの項目で記載されるべきという意見が出た。

本件については、持ち帰りの上各部門で検討し、意見を随時提出することとなった。

(2)七大学安全衛生管理担当者連絡協議会 大学に合わない現行法の問題点リストアップについて

「大学の現状に合わない現行法」について説明があった。

続いて、「高圧ガス」については、「高圧ガスサブワーキング・グループ」で別途検討中であること、また、「化学兵器」「火薬・爆発物」については恐らく該当がないこと、「機器規格等」については、国内産機械は日本工業規格(JIS)をクリアしているので問題ないと思われること、反面、稀ではあるが外国製機械を導入している場合、日本の法律に現状があっていない可能性がある旨の発言があった。

本件については、持ち帰りの上各部門で検討し、随時意見を提出することとなった。

(3) 教育・研究上の安全・衛生に関する指導状況について(案)

各部局における安全・衛生に関する指導状況について現状を調査し、指導が十分でない研究室に対する啓発に役立てたいので、マニュアル等の提出を依頼することと、その際、指導状況に関するアンケートを実施したいので、設問内容等について諮りたい旨説明があった。

その後意見交換が行われ、設問1と2の順を逆にすること、講習等の指導については、取り扱う内容を具体的な項目にしてチェックを入れること、指導教材の概要、受講修了の確認を取っているかどうかを設問に加えること、等の意見が出た。

修正を加えた上で、各部局等に照会することを議決した。

その他:

(1) 環境安全衛生推進室の英文名称について

環境安全衛生推進室の英文名称(案)について説明があった。

持ち帰りの上各部門で検討し、随時意見を提出することとなった。

以上

第4回

日時: 21年12月25日(金) 14時30分~15時58分

場所: 事務局第三庁舎2F 第五会議室

議事に先立ち、オブザーバーとして本会議に加わる加納施設部長の紹介が行われた。

報告:

(1) 各部門の報告

①健康衛生管理部門

10月21日(水)及び11月18日(水)に行われた同部門会議において、以下の議題等について審議した旨報告があった。

- ・七大学安全衛生管理担当者連絡協議会中間答申に係る検討事項について
- ・健康科学センターの年報資料について
- ・労働者災害補償保険法における2次健康診断対象者対応について

・喫煙対策について

②環境安全管理部門

薬品管理システムにおける使用状況調査予定及び平成21年度後期作業環境測定について報告があった。

③高圧ガス等安全管理部門

12月9日(水)農学部5号館において高圧ガス取扱い講習を実施し、約50名の参加があった旨報告があった。

④特定分野安全管理事務部門

核燃料物質等の適正な使用・管理について文部科学省から再度全国的な調査依頼があったため、学内調査を行う予定である旨報告があった。

⑤エネルギー資源管理部門

11月6日(金)に行われた同部門会議において、以下の議題等について審議した旨報告があった。

- ・今後の省エネルギー活動について
- ・省エネルギーポスターについて

(2) 福岡東労働基準監督署の安全指導に対する改善報告書について

10月16日(金)馬出地区及び病院福岡地区において福岡東労働基準監督署による査察と安全指導が行われ、改善報告書を提出したことが報告された。

(3) 教育・研究上の安全・衛生に関する指導状況について

教育・研究上の安全・衛生に関する指導状況についての調査結果が報告された。

なお、同結果は、各部局あて報告し、今後の参考にしていただくこととした。

(4) 安全衛生セミナーⅡ~Ⅳの実施について

10月7日(水)~8日(木)に実施した安全衛生セミナーⅡ及び12月22日(火)に実施した同セミナーⅢ・Ⅳの報告があった。

議題:

(1) 平成22年度計画(案)について

「平成22年度計画(案)」及び「平成22年度計画の達成内容(案)」を決定した。

(2) 全学的な安全衛生ガイドラインの作成について

現行の安全衛生ガイドラインを改訂して平成22年4月版として作成する予定である旨説明があり、資料中

の掲載項目及び原稿内容に対する意見を1月22日(金)までに職場環境安全衛生係あて提出することにした。

なお、ガイドラインの内容を周知させる対象者を明確にした上で、必要な情報を整理してはどうかとの意見が出た。

(3) 大学等における農薬の適正な使用及び保管管理等の徹底について

文部科学省による調査に対し本学の管理状況を回答したところ、化学物質の購入時におけるチェック方法について全学の管理体制を再検討した上で、あらためて再発防止策について回答するよう求められたことが報告された。

続いて、本件については、環境安全管理部門において施設部関係各課・資産管理課・学術研究推進課等関係部署と協力して再発防止策を検討の上、本会議に提出することになった。

その他:

(1) 特殊廃液処理施設教員に係る全学管理人員配置要望について

今泉理事から、特殊廃液処理施設において、教授職を全学管理人員配置により要望する予定であり、同職は環境安全衛生推進室環境安全管理部門長を兼務することになる旨報告があった。

以上

第5回

日時: 平成22年2月26日(金)10時30分～11時30分

場所: 事務局第三庁舎2F 第五会議室

※新メンバー紹介

議事に先立ち、1月1日付け人事異動により職場環境室長補佐に就任した徳吉 透氏の紹介があった。

報告:

(1) 各部門の報告

①健康衛生管理部門

12月16日(水)及び1月20日(水)に行われた同部門会議において、以下の議題等について審議した旨報告があった。

- ・平成22年度健康診断仕様書について

- ・平成22年度年間計画について

- ・労働者災害補償保険法における2次健康診断対象者の対応について

- ・精密検査通知文の内容について

- ・平成22年度職員健康診断印刷物について

②環境安全管理部門

1月22日(金)に行われた同部門会議の概要について説明があった。農薬及び特定毒物等の管理については、本会議報告事項(5)において後述する。

③高圧ガス等安全管理部門

3月11日(木)に福岡中央労働基準監督署による伊都地区の現地査察があり、主にウエスト2,3,4号館及び稲森財団記念館の局所排気装置及びX線照射装置の設置状況について調査を受ける予定である旨報告があった。

④特定分野安全管理事務部門

退職または他機関に異動する教員に対し、麻薬や核燃料物質等の使用者交替等の法的届出が必要なものについて、退職または異動日までに遺漏のないよう確認し、後任に適切な管理を引き継ぐよう、確認事項を通知し注意喚起する予定である旨報告があった。

また、環境安全管理部門で化学薬品全般についての確認事項を作成し、当該文書に併せて掲載した上で、環境安全衛生推進室長名で注意喚起することとなった。

⑤エネルギー資源管理部門

2月5日(金)に行われた同部門会議において、「ライフスタイルの改善(節減活動の実践)実施計画」についての報告と、省エネパトロールの実施について議決されたこと等について報告があった。

(2) 七大学安全衛生管理担当者連絡協議会における協議事項について

2月12日(金)大阪大学で開催された標記協議会の概要について報告があった。続いて、同協議会に設置されたワーキング・グループにおいて、大学の安全衛生管理に関する課題に関する中間報告書について検討中であり、最終案の送付があり次第、本会議で紹介する予定である旨報告があった。

(3) 平成21年度計画実施状況の点検・評価について

平成21年度計画実施状況の点検・評価及び中期目標の評定について、資料のとおり提出した旨報告があった。

(4) 平成 22 年度計画原案の修正について

平成 22 年度計画原案の修正について報告があった。

(5) 大学等における農薬の適正な使用及び保管管理等の徹底について

前回の本会議において、環境安全管理部門と施設部関係各課・資産管理課・学術研究推進課等関係部署が協力して再発防止策を検討の上、本会議に提出することとしていた標記の件について報告があり、文部科学省が定める形式に沿って、同部門で報告を作成することとなった。

(6) 卒煙 Q プロジェクトについて

2 月 23 日（火）開催の喫煙対策検討ワーキング・グループで報告された禁煙支援プログラムについて報告があった。

(7) 局所排気装置定期自主検査に係る講習会について

3 月 2 日（火）から 5 日（金）の間実施予定の標記講習会について報告があった。

議題:

- (1) 平成 22 年度安全衛生管理年間計画（案）について
平成 22 年度安全衛生管理年間計画について説明があった。また、本計画については、福岡東労働基準監督署に報告するよう依頼されていることと、その後各部署局長及び各総括安全衛生管理者あて送付予定であることについて説明があった。

続いて本計画については、修正等意見がある場合は 3 月 3 日（金）までに職場環境室安全衛生係あて提出することになった。

その他

(1) 環境安全衛生推進室の英文名称について

10 月 8 日開催の本会議で提案した環境安全衛生推進室の英文名称について、「第三案に Health を加えてはどうか」という意見があったことについて報告があり、続いて、当該名称を「Office for Promotion of Environmental Management, Health and Safety」とすると議決した。

(2) 九州大学安全衛生ガイドライン（案）について

前回本会議において全学の安全衛生ガイドライン（案）の項目に対しては、1 月 22 日（金）まで特段の意

見はなかった旨報告があった。

続いて、近日中に原稿案を整備の上、担当割りを添えて各部門に内容の修正を依頼することになった。

●次回開催日 4 月下旬予定

第 5 回七大学安全衛生管理担当者連絡協議会

健セからは上園が出席した。

日時：平成 21 年 9 月 4 日（金）13 時 30 分～17 時 00 分

会場：北海道大学事務局大会議室

議題：

- (1) 安全衛生教育について
- (2) 安全衛生管理体制について
- (3) 七大学副学長懇談会に対する中間答申について
- (4) その他

第 6 回七大学安全衛生管理担当者連絡協議会

健セからは上園が出席した。

日時：平成 22 年 2 月 12 日（金）13 時 00 分～15 時 00 分

場所：大阪大学医学部銀杏会館 3 階大会議室

議題：

- (1) 中間答申報告（案）について
- (2) その他

（文責：上園 慶子）

7. 新入生健康支援面接

新入生面接

健康科学センターでは、学生の健康に関するニーズに基づいたサービスを提供するという「健康支援モデル」に基づいた業務活動を目指しているが、その一環として潜在的なニーズに対応する目的で、新入生に対して健康相談を実施してきた。

対象は、1. 自覚的な心身の不調が多く認められる学生、2. 日常生活に支障を来すような障害を有する学生で、封書を送って健康相談室への来談をうながし、内科と精神科の医師、臨床心理カウンセラーによる面談を行っている。六本松キャンパスの伊都地区センターゾーンへの移転に伴い、今年度は伊都センターゾーン分室で5月の連休翌週の11日から29日まで3週間にわたって実施した。

平成18年度以降、新入生向けの「健康支援パッケージ」では高校時代の生活習慣と既往歴について調査し、平成14年度から行っている定期健康診断時の自覚症状と生活習慣についての調査「健康生活支援調査」と併せて入学時

の健康調査とし、これらをもとに面接の対象を選出した。

1) 心理精神健康相談

心理健康相談は、カウンセラー（常勤の福盛と非常勤の井上臨床心理士）と精神科医（常勤の一宮）とで行った。対象は、1. 精神疾患ならびにストレス関連疾患の既往がある者、2. 対人コミュニケーションに問題がある可能性がある者とした。

1. 精神疾患ならびにストレス関連疾患の既往がある者とは、「健康支援パッケージ」の「Ⅲ 次の病気にかかったり、次の健康問題で悩んだことがありますか」という既往歴に関する質問項目の中の13. 自律神経失調症、17. 神経衰弱・ノイローゼ、19. 統合失調症・うつ病・心因反応、20. 自殺未遂のいずれかに○をつけている者であった。

2. 対人コミュニケーションに問題がある可能性がある者とは、「健康支援パッケージ」の「Ⅱ. 高校時代の生活習慣などについて」の質問項目「友達作りがうまくできず、いつも孤独である」にハイ、そして「悩みを相談できる友人がいた」にイイエと回答した者であった。

来談勧奨者は88人で、実際の来談者は80人であり、来談率は90.9%であった。

内訳は、神経症水準の問題が15名（18.8%）、精神病水準の問題を有する者も2名（2.5%）いた。また、性格上の問題が3名（3.8%）、むしろ身体の問題であった者も2名（2.5%）であった。55名（68.8%）は異常なしであった。これらの学生に対しては、心理相談の紹介を30名（37.5%）に、治療の指示も10名（12.5%）に対して行い、そのほか性格・行動面についての認識の促進や生活指導を行った。31名（38.8%）に対しては特に指導の必要性がないと考えられた。

2) 一般健康相談

一般健康相談は、主として身体に関する相談で、内科医3名（常勤の永野・丸山・眞崎）と精神科医1名（常勤の一宮）が行った。対象は、1-C. 「障害者手帳を持っていますか」、1-D. 「心身の病気や障害のために日常に支障をきたしていますか」に○をつけている者であった。ただし、該当する問題について定期健康診断時に検討され指導を受けたり、あるいは診断結果によって問題なしとされた者は対象から除いている。

来談勧奨者は19人で、来談者は4人で、来談率は21.1%であった。内訳は、2名（50.0%）が異常なしであったが、身体疾患が1名（25.0%）で、精神疾患が1名（25.0%）で、身体障害等は0名であった。これらの学生に対して、2名

（50.0%）に対しては生活指導と健康相談の継続の指導を行った。

（文責：一宮 厚）

8. 感染症対策

平成21年度は新型インフルエンザの発生に伴い、情報発信および対策に関して1年を通して活動した。20年度末に、対策行動計画に着手していたこともあり、新型インフルエンザ発生時には、速やかに全学に行動計画を周知することができた。2月に設置された総長を本部長とした“新型インフルエンザ対策本部”は、危機管理本部へ移行し、昨年度と同様に本部委員として上園慶子教授、ワーキンググループ委員として眞崎が参加した。危機管理本部WGでは、上園教授、眞崎で各課との連携をとり、インフルエンザ流行の早期探知と感染拡大予防のフレームワークを構築し、インフルエンザと診断された場合には公欠とすることが決定した。この構築の過程で、流行状況を詳細に調べる必要があったため、5月から9月までの間は新型インフルエンザ患者に対する健康科学センター看護職による聞き取り調査を行った。この聞き取り内容から、流行状況確認に必須な情報を絞り込み、9月以降は全学の学生担当窓口での聞き取りを行い、公欠とする体制に移行した。

この聞き取り調査で、平成21年9月から22年3月までに報告があったインフルエンザ患者数は、学生1,257名、教職員223名であった。九大祭および準備期間に患者発生のピークを認めたが、大規模な集団感染は抑制することができたと考えている。

また、新入学生に対する麻疹等感染症の感受性調査票送付と麻疹ワクチンの接種勧奨は今年も実施した。ワクチン接種は、健康科学センターからの呼びかけが摂取同期になっている者が多かった。今後も感受性調査とワクチン接種勧奨を行っていく予定である。

（文責：眞崎 義憲）

9. 情報発信活動

健康科学センターの活動を学内・外に広く知ってもらうために、平成20年度末にホームページデザインの変更を行ったが、新型インフルエンザ情報サイトや学生定期健康診断のページなどを中心にアクセスは増加した。

年度末の近い1月になり、ホームページの英文化とデザイン更新の予算が措置された。今回はデザインの抜本的な変更を行う目的で、ホームページ作成業者を選定し、

1ヶ月にわたるデザイン検討を経て、健康科学センターホームページを一新することができた。新しいホームページの運用は、次年度の4月1日からであるが、ホームページ自体は3月中に更新を終えた。デザイン変更は、ユーザサイドの視点から情報にアクセスしやすいように心がけ、学生や教職員、一般の方がそれぞれ必要とする情報に容易にたどり着けるような配慮を行った。全体としてすっきりとしたデザインになり、また情報へのアクセスもよくなったことで、定期健康診断やインフルエンザの情報などについて学生・教職員がより早く、容易に情報を手に入れられるのではないかと考えている。

(文責: 眞崎 義憲)

10. FD活動

第47回全国大学保健管理研究集会

第47回全国大学保健管理研究集会は、共通テーマ「大学の安全配慮」のもとに、平成21年9月16日と17日の2日間、北海道大学が当番校となって札幌市で開催された。313機関から703名が参加した。

特別講演は、佐伯 浩氏(北海道大学総長)による「氷板の利用と安全性」、教育講演は田中康雄(北海道大学大学院教育学研究院教授)による『発達障害のある学生の理解と支援』であった。教育講演としては、田中康雄氏(北海道大学大学院教育学研究院教授)による「発達障害のある学生の理解と支援」であった。また、「新型インフルエンザをめぐって」と題した連続講演として、高田礼人氏(北海道大学人獣共通感染症リサーチセンター教授)が「人獣共通感染症としてのインフルエンザ」、田代真人氏(国立感染症研究所インフルエンザウイルス研究センター長)が「新型インフルエンザ一事前準備と緊急対応」について、それぞれ講演した。

シンポジウム「大学の安全配慮義務」や一般演題を通じて、各大学が共有する、現在直面する課題について活発な討論が行われた。

本学からは、一宮が「留年(卒業遅延)への健康状態、生活習慣の影響—健診時アンケートによる検討—」、眞崎が「九州大学における新型インフルエンザ啓発活動と対策の問題点について」、工藤が「生活習慣改善プログラムにおける行動目標とその減量効果」と題した一般研究発表を行い、また、山本が連続講演の司会を、上園が一般研究発表の座長をそれぞれ担当した。

(文責: 永野 純)

第39回九州地区大学保健管理研究協議会

第39回九州地区大学保健管理研究協議会は、平成21年8月19・20・21日の3日間(初日は保健・看護分科会)、熊本大学が当番校となって開催された。参加者は国立大学(11校)70名、公立大学(9校)10名、私立大学(34校)49名、その他(国立高等専門学校7校)7名の合計136名であった。

初日の保健・看護分科会では、『『こうのとりのゆりかご』から見えてくる社会』と「薬物依存症からの回復」に関する教育講演が行われた。二日目は、谷口功氏(熊本大学学長)の「次世代医療に向けて—生物電気化学研究と医療との出会いと取組の経験から—」、長尾啓一氏(千葉大学総合安全衛生管理機構)の「感染症対策における大学保健管理施設の役割」、および大橋敏子氏(京都大学国際交流サービスオフィス)の「外国人留学生の面がるヘルスと危機介入」、と3つの特別講演、さらに森岡洋史氏(鹿児島大学保健管理センター)の「卒論でつまづく学生たち—発達の偏りの視点から—」と宮田正和氏(福岡教育大学保健管理センター)の「ネット汚染とサイバーハラスメント」の2つの教育講演が行われた。三日目は、合計9題の一般研究発表(すべて口述発表)があり、それぞれの立場から活発な討論が行われた。

(文責: 永野 純)

平成21年度国立大学法人等保健管理施設協議会

平成21年度の国立大学法人等保健管理施設協議会は、旭川医科大学が当番校となり平成21年9月18日に札幌市産業振興センターで開催された。国立大学法人84校のうち78校から81名の施設長が参加した。

午前中には、文部科学省学生支援課長の講演が予定されていたが、国会会期中を理由に欠席された。各種委員会、研究班からの報告があった。

午後は協議がなされ、新型インフルエンザ対応について情報交換がなされ、センタースタッフに対しワクチン配布を医療従事者として早めに配布することを要望することになった。その他いくつかの事案について話し合われた。

平成22年度は、東京医科歯科大学が当番校で東京での開催が承認された。

(文責: 一宮 厚)

第12回フィジカルヘルス・フォーラム

第12回フォーラムは、新型インフルエンザに伴う入学

試験の追試験のために開催日が当初の予定日から変更になったことや新型インフルエンザの大流行のために参加者数が減少することが危惧されたが、大変タイムリーなテーマや身近で問題の多いテーマを取り上げたことやインフルエンザの流行がかなり下火となったため、参加者数 116 人と多数の会員やオブザーバーのご参加をいただくことができた。第 1 日目午前中から 2 日間の日程で開催し、多彩で充実した内容のフォーラムとなった。多くの演題で講演資料が配布されたため、講演内容の理解がより深まったと思われる。また、1 日目午前のプログラム終了後、新キャンパスの伊都地区までバスで移動し、車中福岡市の観光で、楽しい息抜きの一時を過ごして頂くことができた。

第 1 日 3 月 17 日 (水)

開会式: フォーラムの開会に当たって、長尾啓一国立大学法人等保健管理施設協議会会長 (千葉大学総合安全衛生管理機構長) および戸部和夫フィジカルヘルス委員会委員長 (岡山大学保健管理センター長) からご挨拶があり、次いで主催校側から、九州大学の今泉勝巳理事・副学長 (安全衛生担当) の歓迎の辞、第 12 回 PHF コーディネーターの上園慶子健康科学センター教授がご挨拶を行った。

既に参加予定者のほとんどが出席されており、厳粛にかつ和気藹々とした雰囲気の中で会議が始まった。

1. 企画 1 「健康管理における情報システムの活用」

1) 講演「健康管理における情報システムの活用」九州大学情報統括本部副本部長 藤村直美先生: 新型インフルエンザ等に対する大学の危機管理体制の 1 つとして ICT を用いた大学構成員との双方向の情報伝達システム構築についての九州大学の取組みの内容及び問題点について解説があった。新型インフルエンザ感染情報についての調査結果から、多数の構成員に対する情報伝達確認の難しさ及び構成員へのシステム周知の重要性が強調された。

2) 例 1 「インフルエンザ感染情報確認システムの活用」九州大学健康科学センター 眞崎義憲先生: 新型インフルエンザの発生に伴いインフルエンザ感染情報について電話聞き取り調査結果とその問題点及び九州大学で構築した上記情報システムの活用についての解説があった。新型インフルエンザに対する対応を検証することにより今後の対策に生かすことが重要と考えられた。

3) 例 2 「Web を利用した過重労働等に関する調査システムの運用」京都大学保健管理センター 安藤昌彦先生: 過重労働に関する医師面接指導のために Web を用いた調査

システムを構築し、個人情報を取得しないセルフチェックシステムによる調査結果及び対象者を特定して実施するシステムの運用結果と問題点についての報告がされた。個人情報取得や取扱いの難しさを感じられた。

2. 企画 2 シンポジウム「大学における環境・安全対策」

1) 「高圧ガス等の管理」九州大学環境・安全衛生推進室 横本克己先生: 九州大学における高圧ガス管理の取り組み及び大学で良く使用されるガスの特徴や事故事例について実験も交え具体的でわかりやすい解説があった。事故の多くはヒューマンエラーで発生するため対象者に対する安全講習が重要と考えられた。

2) 「薬品・水質等の管理」九州大学環境安全センター 池水喜義先生: 九州大学における薬品・水質等の管理の取り組みや新キャンパスの伊都地区の水循環利用システムについての解説があった。薬品管理の安全教育、使用マニュアルの作成、事故に対する改善報告等のシステム構築の重要性が強調された。また、企画終了後に行われた最新の給水センター見学も大変興味深かった。

3) 「環境・エネルギーの管理」九州大学施設部長 加納博義先生: 九州大学における環境・エネルギー対策への取り組みについて、新キャンパスの伊都地区の開発も含め解説があった。大学の構成員全員が自覚を持って取り組む必要があると感じられた。

3. 業務連絡 (1) 次期開催校: 次回・第 13 回開催校の大阪大学守山先生より、開催日は平成 23 年 3 月 17 日、18 日の予定とのご挨拶があった。また、第 14 回開催校は東北地区の大学にお願いし、立身先生に取りまとめていただく予定となった。(2) フィジカルヘルス委員会委員及びフォーラム役員: 平成 22 年 4 月以降の体制として、関東甲信越地区及び東海北陸地区からフィジカルヘルス委員会委員を選出すること及び新委員にはフォーラム役員の就任も依頼することとなった。また、ご退職の戸部和夫先生がフォーラムの名誉会長に就任されること、近藤孝晴先生がフォーラム役員を継続されることとなった。(3) フォーラム会則の変更: 会則の一部を変更し、フィジカルヘルス委員会との関係についての記載を加えることが了承された。(4) 自己紹介・ご挨拶: 新しく会員になられた先生の自己紹介と、ご退職の近藤孝晴先生、平田牧三先生、野原隆彦先生、戸部和夫先生よりご挨拶があった。参加者数 116 人

第 2 日 3 月 18 日 (木)

4. 企画 3 シンポジウム「大学生の薬物乱用」

1) 「最近の薬物情勢について」福岡県警察本部薬物銃器

対策課 浮田保文先生: 覚せい剤等の違法薬物の取り締まり状況や具体的事例を交えての警察の取り組みについての解説があった。

2) 「大分大学における薬物乱用防止対策—アンケート調査も含めて—」大分大学保健管理センター 寺尾英夫先生: 大学生の大麻等の薬物乱用事件に対する大分大学の取り組み及び学生へのアンケート調査内容についての報告があり、違法薬物の危険が学生の身近に存在しており大学全体として注意喚起や教育啓発に取り組む必要があることが強調された。

3) 「大学生の薬物乱用に関する国立大学法人全国調査と学生の問題意識—大学における薬物乱用防止対策に向けて—」西南女学院大学保健福祉学部福祉学科 平田健太郎先生: 国立大学法人保健管理施設協議会加入校へのアンケート調査結果及び西南女学院大学学生の薬物乱用に関する問題意識のアンケート調査結果についての報告があり、大学における薬物乱用防止対策として、教育、環境整備、キャンペーンの3つの柱による予防対策を全学的・継続的に推進することの重要性が示された。

4) 「キャンパスにおける薬物乱用防止対策—関西大学の事例—」関西大学保健管理センター 飯田紀彦先生: 大学における違法薬物問題の発生要因についての解説があり、違法薬物問題の生じる背景には、国際化、人間関係の希薄化、キャンパスの管理体制の問題等が関与しており、問題発生を防ぐには孤立した学生に対する相談体制の構築の重要性が述べられた。

5) 「なぜ大学生の薬物乱用が増えているのか?—九州大学学生の薬物乱用に関する意識調査を含めて—」九州大学健康科学センター 入江正洋先生: 九州大学学生の薬物乱用に関する問題意識のアンケート調査結果報告や大学における違法薬物問題の発生要因についての解説があった。孤立した学生に対する支援やポスター・講義・講演を通じた啓発活動の重要性が強調された。

5. 企画5「休職者に対する復職支援」

1) 「休職者の現状」九州大学健康科学センター 一宮 厚先生: 精神疾患に罹患した職員の休職と復職のプロセスやその間に生じる問題に焦点をあてて、復職支援について具体的事例を交えながら段階を追ってのわかりやすい解説があった。産業医として休職者への復職支援を行うには、本人、家族、職場、主治医などとの緊密な連携や信頼関係の構築が必要であると考えられた。

2) 「宮崎大学における復職支援システム」宮崎大学安全

衛生保健センター 江藤敏治先生: 宮崎大学における復職支援システムについての詳細な報告があった。復職支援に関する指針を作成し対応している大学は未だ多くはないようなので、大変参考になる取り組みであると考えられた。また、希望大学には資料を提供していただけたことであった。

閉会式: 充実した2日間の全プログラムが終了した後、フィジカルヘルス委員会の大塚盛男次期委員長(筑波大学保健管理センター長)や、戸部和夫から謝辞が述べられ、九州大学の上園、及び次期コーディネーターの守山敏樹先生(大阪大学保健センター長)からご案内があった。参加者はとても熱心で議論も活発に展開し、好評裏に閉会した。

(文責: 国立大学法人保健管理施設協議会フィジカルヘルス委員会 大塚盛男 他. 平成22年3月23日付 事務局からの報告を一部加筆ならびに改編)

第31回全国大学メンタルヘルス研究会

全国大学メンタルヘルス研究会は、平成18年度から、全国学生相談研究会との合同で学生支援合同フォーラムとして開催されている。今年度は、フォーラム2・3が全国大学メンタルヘルス研究会で、福島大学が主催して平成21年1月21-22日に東京国際交流間プラザ平成で開催された。これには九大からは一宮が参加し運営委員会に出席した。特別セッションほか、研究班報告、一般演題、症例研究などの発表があった。

(文責: 一宮 厚)

第43回全国学生相談研究会

平成21年度第43回全国学生相談研究会は、平成22年1月19日(火曜日)~1月22日(金曜日)に全国メンタルヘルス研究会と合同フォーラムとして東京台場にある東京国際交流館 プラザ平成(東京都江東区)で行われた。シンポジウムは「学生相談活動の拡がり: 予防教育と評価を中心に」というテーマで、行われた。分科会では、第1分科会「緊急事態でのコンサルテーション」、第2分科会「就職の問題」、第3分科会「発達障害」第4分科会「問題行動」があった。夜は専任カウンセラーの会があり、全国の学生相談カウンセラーと情報交換を行った。九州大学からは合同フォーラムには一宮・福盛が参加した。

(文責: 福盛 英明)

九州地区メンタルヘルス研究協議会

メンタルヘルス研究協議会は、学生のメンタルヘルス支援の充実を目指して全国の大学と高専の一般教職員を対象として開催される研修会で、平成21年度は九州地区での協議会が開催された。本協議会は文部科学省が主催者のひとつとして平成8年から始まったもので、平成17年度からは独立行政法人日本学生支援機構と国立大学法人保健管理施設協議会が主催し文部科学省が協力する形で運営されることとなり、平成13年度からは全国7つのブロックごとに開催されることになっている。

平成21年度は、長崎大学が当番校で同大保健・医療推進センターの林田雅希准教授が実行委員長であった。本センターの一宮は本協議会の本部運営委員であり、また当センターの福盛准教授とともに本協議会の実行委員会であるので今年度も企画から携わった。

協議会は10月20日と21日の2日間にわたって長崎市の長崎ブリックホールで行われた。1日目の基調講演は「長崎県における自殺の現状とその対策」と題されたもので、崎大学大学院医歯薬学総合研究科の中根秀之教授が講演された。その後2日目午前にかけて分科会が5会場で行われたが、当センターの一宮が「人間関係力の醸成－希薄化する大学生の人間関係－」をテーマとした第1分科会で司会を、福盛が「卒業・就職への危機に対する連携支援」をテーマとした第4分科会で助言者として、それぞれ運営に参加した。

参加者は九州圏内の29大学から53名、2短期大学から2名、9高専から15名、計70名の教職員であった。

(文責: 一宮 厚)

三大学協議会

本学健康科学センターと同様、健康に関連する学際部局である名古屋大学総合保健体育科学センター、旧大阪大学健康体育部（現:大阪大学大学院医学研究科・同保健センター等）との合同会議は、各大学を巡る状況に大きな変化が無く、話し合うべき共通の議題が発生しなかったため、平成21年度も会議は開催されなかった。

(文責: 上園 慶子)

学生健康支援会議

第2部門では、産業保健師を含む各分室の看護職員と保健係の事務職員をまじえて、毎月第3水曜日の午後に学生健康支援会議を開催している。平成21年度も、本会議において、予算案の作成、春の学生定期健康診断なら

びに秋の留学生健康診断の準備・実施・事後措置、各分室の日常診療対応(対応困難なケースの検討、各分室で共通した統一すべき基準の検討など)、保健管理専門委員会や学生委員会などの学内への対応、保健管理関連の学会での発表演習など、学生の安全・衛生・健康に関連する様々な業務の企画、立案、実施、問題点などについて協議した。

(文責: 永野 純)

職員健康支援会議

第2部門では、安全衛生推進室所属の産業保健師を含む各分室の看護職員と職場環境室の事務職員をまじえて、毎月第3水曜日の午後に本会議を開催している。学生健康支援会議に引き続いて行われるものである。平成21年度も、各事業場の毎月の産業保健活動報告や安全衛生推進室会議報告から始まり、定期健康診断、特殊健康診断などの各種健康診断の準備・実施・事後措置、平成20年度から開始された特定健診・保健指導、過重労働者面談、対応困難な事例など、産業保健活動に関する様々な業務の企画、立案、実施、問題点などについて協議した。

(文責: 永野 純)

技術職員研修

第2部門では、各分室で日ごろ別々に業務を行っている看護職員(看護師、保健師、産業保健師)に共通して必要な知識やスキルを習得してもらうために、毎月第3水曜日に看護職研修を実施している。平成21年度は、下記のような年間計画で定期的なテーマ別相互学習を看護職員同志で行った。

- ・ 6月 アスペルガーについて (筑紫 工藤)
- ・ 7月 ウォーキング指導について (箱崎 升谷)
- ・ 9月 インフルエンザについて (伊都センター 高尾)
- ・ 10月 睡眠について (病院 豊田)
- ・ 11月 尿酸について (伊都ウエスト 福盛)
- ・ 12月 体の冷えに関して (箱崎 谷川)
- ・ 1月 心肺蘇生、外傷の応急処置 (大橋 山口)
- ・ 2月 菓の飲み方について (病院 野村)

また、新採用の看護職員や事務員の教育として、健康科学センターの組織や役割、業務などに関するオリエンテーションを年度末に実施している。平成21年度のオリエンテーションの概要は以下の通りである。

- ・ 健康科学センターの役割とその法的根拠 (一宮)
- ・ 健康科学センタースタッフ構成とそれぞれの基本的役割 (上園)

- ・ 定期健康診断（永野）
- ・ 日常業務と緊急時の対応（丸山）
- ・ 感染症の対応（眞崎）
- ・ 学生相談・新入生面接（福盛）
- ・ 産業保健（入江）
- ・ 精神保健相談（一宮）
- ・ 分室紹介（各分室長・看護職）
- ・ 保健系の役割とは（教務課 中屋）
- ・ 職場環境室の役割とは（職場環境室 徳吉）
- ・ 業務研究（松園・全員）

その他、毎月第3水曜日午前の第2部門会議の終了後に教員による研究発表会を開催しており、看護職員も全員参加している。学生や教職員を対象とした研究も含まれており、このような発表会に参加することも、看護職員の知識や技能の向上に役立っているものと思われる。開催月日と担当教員は以下の通り。

- ・ 7月15日 丸山「イベントレコーダの普及と保健室での使用」
- ・ 8月26日 眞崎「九州大学の新型インフルエンザ対策について」
- ・ 11月18日 永野「心血管病のみならず、悪性腫瘍や認知症の危険因子としての代謝異常の重要性について—久山町研究から—」
- ・ 1月20日 一宮「定健時アンケートデータを用いた留年にかかわる要因について」
「分室受診者数の経年推移について」
「喫煙学生割合の経年推移について」
- ・ 2月17日 入江「薬物乱用に関する九大生の意識調査について」

（文責：永野 純）

産業保健管理体制

国立大学設置法施行規則第20条の5の5によって、「九州大学に、健康科学に関する研究並びに保健及び体育に関する教育を行なうとともに、職員及び学生の保健管理及び体育指導に関する専門的業務を行なうための施設として、健康科学センターを置く」と定められていることから、これまで健康科学センターでは、学生の健康管理のみならず、教職員の健康管理（健康診断後の相談や健康教育など）をも行ってきた。このような経緯を踏まえて、健康科学センターでは、平成16年度からの大学法人化に際して、産業医としての役割を含めて産業保健活動に従事することを大学側に提案し、協議を重ねた。その結果、安衛法に

おける産業医の選任基準に基づいて、箱崎地区、馬出地区、九州大学病院(福岡)に専属産業医が、六本松地区、筑紫地区、大橋地区、別府地区には嘱託産業医がそれぞれ配置されることが決まり、平成17年10月から加わった伊都地区も含めて、別府地区を除く7事業所の産業医を健康科学センターの医師が担当することになった。また、教職員の安全衛生管理を担当する組織として、新たに「安全衛生推進室」が設置され、健康科学センター第2部門の全教職員も併任安全衛生推進室員の立場で参画した。安全衛生推進室には、3名の産業保健師（非常勤）が専任衛生管理者として採用になり、専属産業医の担当事業場に配属された。

平成21年度は、平成16年から手がけた安全衛生体制をさらに構築、定着させることを目標に、産業保健活動を実施した。具体的には、各事業場において毎月職場巡視を実施し、巡視結果や健康診断結果、その他の健康管理事項について衛生委員会で報告や協議を行い、各種健康診断の円滑かつ効率的な実施を支援するとともに、事後措置を担当した。さらに、人事係の労働時間調査結果に基づいて、長時間労働者に対する面接や助言、指導を行った。このような業務を適切に実施するために、健康科学センターのスタッフ、人事系職員、産業保健師からなる教職員健康支援会議を毎月開催し、産業保健活動について協議する場を設けている。また、後述するような、新人から管理職まで及ぶ様々な職員教育を実施した。

（文責：永野 純）

産業保健管理体制

国立大学設置法施行規則第20条の5の5によって、「九州大学に、健康科学に関する研究並びに保健及び体育に関する教育を行なうとともに、職員及び学生の保健管理及び体育指導に関する専門的業務を行なうための施設として、健康科学センターを置く」と定められていることから、これまで健康科学センターでは、学生の健康管理のみならず、教職員の健康管理（健康診断後の相談や健康教育など）をも行ってきた。このような経緯を踏まえて、健康科学センターでは、平成16年度からの大学法人化に際して、産業医としての役割を含めて産業保健活動に従事することを大学側に提案し、協議を重ねた。その結果、安衛法における産業医の選任基準に基づいて、箱崎地区、馬出地区、九州大学病院(福岡)に専属産業医が、六本松地区、筑紫地区、大橋地区、別府地区には嘱託産業医がそれぞれ配置されることが決まり、平成17年10月から加わった伊

都地区も含めて、別府地区を除く7事業所の産業医を健康科学センターの医師が担当することになった。また、教職員の安全衛生管理を担当する組織として、新たに「安全衛生推進室」が設置され、健康科学センター第2部門の全教職員も併任安全衛生推進室員の立場で参画した。安全衛生推進室には、3名の産業保健師が専任衛生管理者として採用になり、専属産業医の担当事業場に配属された。平成20年度からは、特定健康診断・特定保健指導などに準じた健康管理業務の充実を図るため、2名の産業保健師が新たに採用されることになった。

平成21年度は、平成16年から手がけた安全衛生体制をさらに構築、定着させることを目標に、産業保健活動を実施した。具体的には、各事業場において毎月職場巡視を実施し、巡視結果や健康診断結果、その他の健康管理事項について衛生委員会で報告や協議を行い、各種健康診断の円滑かつ効率的な実施を支援するとともに、事後措置を担当した。さらに、人事系の労働時間調査結果に基づいて、長時間労働者に対する面接や助言、指導を行った。このような業務を適切に実施するために、健康科学センターのスタッフ、人事系職員、産業保健師からなる教職員健康支援会議を毎月開催し、産業保健活動について協議する場を設けている。また、後述するような、新人から管理職まで及ぶ様々な職員教育を実施した。

問題点としては、常勤の産業保健師が不在で全員が有期雇用であるため、入れ替わりが激しく、新人教育を毎年のように行っていることや、健康科学センターの常勤保健師に負荷が転嫁されていることが挙げられる。

(文責: 入江 正洋)

厚生補導特別企画

平成22年3月22日(火) 15:30~17:00、伊都地区センターゾーン センター1号館(3階) 1303講義室にて、内野悌司先生(広島大学保健管理センター准教授・臨床心理士・日本学生相談学会常任理事)をお招きして「大学生のメンタルヘルス危機対応と自殺予防」を行った。質疑も活発におこなわれ、全体的に大変有意義な講演会となった。非常に分かりやす話しで参加者には大変好評であったが、今後参加人数が増加するように働きかけを行いたい。

(文責: 福盛 英明)

第1回 QU ウォーク

11月3日、西公園を出発して伊都キャンパス体育館まで歩く第1回QUウォーク(主催:健康科学センター、後

援:百周年事業推進課)が開催された。8時30分に出発した232名の参加者(うち115名が大学関係者)ほとんどが4時間程度で完歩した。完歩者には記念のFinisherタオルや協賛企業(エグチスポーツ、エムジーファーマ株式会社、大塚製薬、日本光電株式会社、ダノンジャパン株式会社、トーヨーフィジカル、マルホ株式会社)からの記念品が配布された。天候にも恵まれ、参加者にはとても好評であった。百周年記念のイベントとして開催された。来年度も同時期に開催する予定である。なお、本イベントは厚生補導特別経費の援助を頂いた。なお、本イベントはQUウォーク実行委員会(委員長:林准教授、副委員長:眞崎准教授)を主体として企画・実行された。

(文責: 林 直亨)

筑紫地区トレーニング室

運動を通して健康の維持・増進を図ることを目的として、筑紫地区唯一の屋内運動施設であるフィットネスルームを平日16時から20時に学生・教職員に開放している。大学院生が監督員を務めている。1日当たり15~20名程度の来室者がいた。本年度は厚生補導特別経費の援助を頂き、監督員の謝金以外にも、フリーウェイトを充実させることができた。

(文責: 林 直亨)

11. その他の活動

職員健康研修

平成21年度も例年通り、総務部人事課や職場環境室などの年間計画により、教職員を対象とした健康に関する研修会で、講師派遣の要請があった。これに対して第2部門教員および看護職員が適宜分担して講師を担当した。詳細は以下の通りである。

平成21年4月1日:九州大学病院新採用者合同オリエンテーション

産業保健についてーメンタルヘルスを中心に(一宮)

平成21年4月7日:九州大学新採用職員研修
心の健康管理(一宮)

平成21年7月10日:九州大学新任係長・専門職員研修
管理者が学ぶメンタルヘルス(入江)

平成21年7月31日:九州地区国立大学法人等技術専門
職員・中堅技術職員研修
職場のメンタルヘルス(入江)

平成21年10月15日:九州大学労働衛生週間講演会

乳がん自己検診（箱崎地区）（野村）

平成21年10月15日：九州大学労働衛生週間講演会

乳がん自己検診（伊都地区ウエストゾーン）（高尾）

平成21年10月7日：九州大学職員ステップアップ研修

管理者のためのメンタルヘルス（一宮）

（文責：永野 純）

入学試験や全学行事等における急患対応

平成21年度も、第2部門教員および看護職員は入学試験や全学行事等における急患対応に従事した。主な項目、派遣先地区、派遣医師・看護職員のべ人数は次の通り。

- ・九州大学オープンキャンパス（平成21年8月）
箱崎、伊都センター、伊都ウエスト、病院、大橋の各地区。医師のべ7名、看護職員のべ7名。
- ・九州大学大学院入試（平成21年8月）
大橋、筑紫、伊都ウエストの各地区。医師のべ14名、看護職員のべ10名。
- ・九州大学AO入試（平成21年10月、11月、12月、平成22年1月）
箱崎、病院、大橋の各地区。医師のべ8名、看護職員のべ8名。
- ・大学入試センター試験、九州大学入学試験（平成22年1月、2月、3月）
箱崎、病院、伊都センター、伊都ウエスト、大橋の各地区。医師のべ24名、看護職員のべ39名。

（文責：永野 純）

健康白書 2010

「学生の健康白書 2010」に関する委員会は平成21年5月13日 名古屋大学総合保健体育科学センター 会議室に於いて第一回の会合を持ち 委員会の開催計画、倫理委員会への調査内容の提出、調査内容、データ処理・管理、調査の通知、ポスターの作成について話し合った。倫理的な配慮としてはまず京都大学の倫理委員会で承認を受け、その後他の大学も可能なら倫理委員会の承認を得ること

になった。今回の調査は大学院生も対象とすること、調査内容は前回までの方法を踏襲するが、新規に生活習慣に関するアンケート調査を加えること、全てのデータは京都大学に送付し処理・管理は京都大学で行うこと、調査の通知・依頼文は学長や施設長宛に2月頃発送すること、ポスターの作成は名古屋大学が担当することになった。

なお、2010 白書の作成委員会は委員長の近藤孝晴名古屋大学教授が今年度で定年退職のため、次年度からは京都大学の川村 孝保健管理センター長を委員長とし、委員は身体面・精神心理面の総勢11名（九州大学からは上園が参加）で構成されている。

（文責：上園 慶子）

CAMPUS HEALTH の発行

キャンパスヘルスを年2回発刊した。記事は健康に関する啓発などで、第一、第二部門教員、保健師、学生が寄稿した。

第28号（2009年10月）

- ・スポーツメンタルスキルを身につけよう
- ・簡単で効果的なリラクゼーション法の紹介（理論編）
- ・伊都地区センターゾーン健康相談室紹介
- ・講義紹介（全学教育科目）
- ・From My Bookshelf コーナー
- ・けんこう豆知識「感染症予防」
- ・編集後記

第29号（2010年3月）

- ・九州大学リサーチコア「身体運動の科学を通しての社会貢献」の認定を受けて
- ・朝ごはんと生体リズム
- ・第1回QUウォークを開催
- ・「発達障害」と学生生活（1）
- ・けんこう豆知識「タバコは吸わないようにしましょう」

（文責：福盛 英明）

研 究 活 動

概況	51
個人研究活動	52
研究業績	58
研究助成金	70
国際学術交流活動	80
学会・研究会での役職	81
その他	82

研究活動

概況

平成 21 年度における健康科学センターの研究活動を、「個人研究活動」「研究業績」「研究助成金」「国際学術交流活動」「学会・研究会での役職」および「その他」の順で示す。

「個人研究活動」に関して当センターでは第一部門が運動生理・生化学、運動疫学、スポーツ心理・社会学、第二部門が内科学、心身医学、精神医学、心理学分野を中心に研究活動を行っている。しかし当センター教員の「個人研究活動」は、その枠に収まらない部分が多く見受けられる。このことは当センターの多様性や多能性を示すと同時に、「健康科学」そのものの学際性を示すものでもある。

「研究業績」は、著書・翻訳、原著論文、総説、資料・報告、学会・研究発表、講演・ワークショップ・シンポジスト・コメンティーター等、論文査読、その他に区分した。

昨年度との比較では著書・翻訳の編数は 13 編から 11 編、原著論文は学会・機関誌等論文で 32 編から 17 編、紀要等論文では 11 編から 14 編へと増減がみられた。総説（11 編で同じ）、資料・報告書（19 編から 20 編）の編数は昨年度とほぼ同じであった（筆頭著者とそれ以外を含む）。学会・研究会での発表件数は、昨年度の 101 編から 73 編となり、一昨年度（74 編）とほぼ同数であった。今後の論文業績の増大を期待したい。

論文査読の件数は今年第一部門 49 件（昨年 44 件）、第二部門 22 件（昨年 24 件）で昨年度と大きくは変わらなかった。英文雑誌の査読件数は、国内英文誌の増加傾向はあるにせよ、当センター教員の国際的評価の一つの指標でもあり、積極的な増加が望まれる。

「研究助成金」に関しては、政府官公庁や学会・財団による研究費以外に地方自治体・企業による受託研究や本学教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクト研究などさまざまな研究費がある。平成 21 年度は総計 24 件であり、昨年度の 16 件より増加した。一昨年度（12 件）から近年採択件数の増加が続いている。採択件数の増加の背景には地道な申請件数の増加もある点は考慮すべき

であろう。独立行政法人化以降、大学からの研究費が削減されている現状を考えると、今後の研究発展のためには大型の研究費獲得へのさらなる努力が必要と思われる。

「国際学術交流活動」は 11 件で昨年度の 13 件に比べてやや減少した。

「学会・研究会での役職」は総計 58 と、昨年度の 53 より増加した。これらの役職数は学会・研究会への貢献度の指標のひとつとみなすことができる。学会や研究会も最近は法人化しつつあり、当センターと同様に社会貢献が問われている。この点を考慮すれば学会や研究会で役職を担うことは、学会・研究会を当センターで開催したり、学会・研究会を通じたパブリックコメントを発信したり、科学研究費の申請書を査読したりすることで対外的にも意義は大きい。「その他」にマスコミ（新聞・雑誌・テレビなど）での活動などを示した。これらも社会活動や地域活動に相当するものがあり、全学的にも要望されている分野である。

研究 FD は、例年通り各部門における教員研究発表と、年間 3 回のセンター全体での研究交流会議を行った。研究交流会議は 2 回を教員の個人研究発表に当て、1 回は科学研究費の採択率向上に向けての取り組みを行った。教員の個人研究発表は教員相互の共同研究を促進させるだけでなく大学院生にもオープンにすることで、大学院生がセンター内研究の全体像を理解する上でも不可欠と考えられる。

当センターでは従来の研究分野を発展的に継続する一方で、全学構成員や地域・社会から求められるオリジナルな研究を創出していく努力も必要である。生活習慣病の蔓延と社会的な健康意識の高まり、学校教育における体育・食育・メンタルヘルスの重要性の再認識、さまざまなスポーツの倫理性が問われる昨今の風潮を追い風に、当センターが取り組むべき研究課題は多いと言えよう。これらの追い風を好機に、創立 30 年を経た当センターの今後 10 年後 20 年後を見据えた研究面における新機軸を打ち出す必要がある。

（文責：丸山 徹）

1. 個人研究活動

●健康科学第一部門

橋本 公雄

平成 21 年度は、個人研究といくつかプロジェクト研究を進めた。個人研究では、運動・スポーツの人間関係促進効果に関する研究、心理社会的要因を媒介変数とする運動・スポーツに伴うメンタルヘルス向上効果のモデル構築、運動継続化の螺旋モデル構築に関する研究を行い、プロジェクト研究では、1 つは科研費基盤研究 (B) (研究代表: 橋本公雄) の「行動科学に基づく大学生の心身の健康問題に対処しうる独創的体育プログラム開発」と、同じく科研費基盤研究 (B) (研究代表: 柳敏晴) の「野外教育によるコミュニケーションスキル獲得に関する研究」を行った。また、社会連携関係の研究では、筑紫野市の「なかなかよか健康チャレンジウォーキング事業—」に関し、委託研究費を受け入れ、5 か年間計画の 4 年目の事業を推進するとともに、ウォーキング運動継続化に関する介入効果の研究を行った。国際的な学術研究としては中国、台湾、アメリカとの共同研究に着手し、次年度本格的な大規模の国際調査に乗り出すこととなった。

大柿 哲朗

平成 21 年度は、共同研究者としての科学研究費 (C) による調査研究、うきは市からの受託研究費による「食育プロジェクト事業」を行った。

科学研究費 (C) による調査研究は、山岳地と都市近郊農村の子どもの発育発達に関する調査研究であった、その成果の一部は、健康科学に投稿した。

うきは市の食育プロジェクトの一環である受託研究として、5 年計画の 4 年度にあたる平成 21 年度は、2 回 (10 月と 3 月) の健康度調査 (健診、形態・体力測定、栄養素等摂取量調査) のデータを解析し、報告書の作成・提言を行った。

日本・韓国・中国の運動・スポーツ科学関連の研究者と組織している「東アジア運動・スポーツ科学会」は、今年が日本が当番であった。大阪商業大学の宇部一教授の協力を得て、無事この大会を終了できた。事務局長および理事長として同会の企画運営、日本側の代表者挨拶等を行った。

西村 秀樹

スポーツ社会学における「文化」の領域に焦点をあて、遊び・スポーツの歴史の変遷や社会的多様性を探るなかで、人間の深層の認識活動を活性化し、より高い自己組織化を達成していく文化的基盤について研究している。たとえば、相撲の「立ち合い」における「阿吽」の呼吸は、「同調」と「競争」という相反する「関係」を併存させており、それを可能にしているのは潜在的認識作用としての前意識的な「読み」である。こうした認識作用を要する「関係」を我が国の文化的脈絡 —たとえば芸道における「不即不離」のリズム—のなかに探っている。20 年度は、「変わりゆく日本のスポーツ」(共著) に掲載した「日本のスポーツにおける抑制の美学」を深化させ、単著「日本のスポーツにおける抑制の美学 - 静かなる強さと深さ」(世界思想社、平成 21 年 9 月) を出版した。

また、最近注目を浴びている角界のモラル問題の分析に興味を抱き、明治・大正・昭和にわたって、8 つの新聞から関係資料を蒐集し、執筆・出版に向けての準備を始めた。

熊谷 秋三

研究助成金の取得としては、文部科学省科学研究費補助金の萌芽研究に研究代表者として採択された研究の最終年度であった。研究分担者としても基盤研究 C に 2 件採択された研究の 2 年目が終了した。厚生労働省科学研究補助金 (循環器疾患等生活習慣病対策総合研究事業) に研究代表として新規に採択された (研究期間は 3 年間)。研究課題は、「大規模コホートをを用いた生活習慣病の一次予防のための運動量策定に関する運動疫学研究」であった。また、医学研究院の清原教授が申請された厚生労働省健康科学研究補助金 (認知症対策総合研究事業) の研究が 2 年目を終了した (研究期間 5 年)。研究課題は、「アルツハイマー病の危険因子の解明と予防に関する大規模ゲノム疫学研究」であった。さらに、佐賀大学の山津講師が申請された厚生労働省健康科学研究補助金 (糖尿病戦略研究事業) も新規に採択された (研究期間 3 年)。研究課題は、「印刷教材と携帯電話フィードバックシステムをも用いた食生活の改善及び運動指導プログラムの開発に関する研究」であった。また、受託研究 2 件、共同研究

1件、民間の研究助成金にも3件採択された。研究業績としては1編の論文が掲載された。臨床の専門雑誌である日本臨床に「身体活動・運動と生活習慣病：運動生理学と最新の予防・治療」と題する増刊号が発刊され、監修を担当した。論文の査読件数は、9件で内5件が英文誌であった。筑波大学およびニュージーランドのMarsden Fundからの依頼で研究費申請の査読を担当した。研究室の出来事としては、畑山知子さん、岸本裕代さんが博士（人間環境学）の学位を取得された。畑山さんは、南山大学に講師として奉職、岸本さんは本学の医学研究院環境医学研究室内の学術研究員になられた。小堀麻衣さんと西崎佳子さんは、修士（人間環境学）を取得された。平成21年度は、次年度より開始される地域在宅高齢者の介護予防に関する太宰府研究と職域における勤労者のメタボリックシンドロームに関する運動・社会疫学（CRC・両備研究）の研究計画に多くのエネルギーを割いた。前者は、太宰府市からの受託研究として平成21年度から3年間継続予定である。

齊藤 篤司

ネパール研究の首が繋がった。子は鎚と言うけれど、まさに子供を対象とした研究に研究費がつき、ネパール研究も新たな展開を迎えた。生活習慣の急激な変化の影響をこれから受ける都市部の子供たちをリアルタイムで見たいのは興味深い。従来からの定点観測地である山村の生活はきわめてゆっくりとした変化で、私が通い始めたこの十何年かに何か変わったものは？と聞かれてもちょっと考えてしまうと言った状況である。しかし、都市部はどこも同じで、地方から人が集まり、どんどん広がっている。今回から新たに調査に協力してくれることになった学校の校長先生は研究の趣旨を理解してくれ、えらく積極的。ダメ元で「月1回全員の身長と体重を測ってください」と体重計と身長計をおいてきて、まだ残っているかな？と半信半疑で今回行ってみたら、なんと！きちんと測定され、データがプリントアウトされていた。うちの学校では日本の大学と協力してこんなこともしているのですよ、という学校の宣伝にもなるのかも知れないが、感激。調査隊長は研究結果を必ず共通言語である英語でパブリッシュすることを約束してきたのでした。

また、本業？にも金がついた。なんだか研究は金しい？しかし、金がないと被験者も冷たい。ということで、あるときは払うけど、ないときは払えないという条件で

いつも被験者になってくれるボランティアの学生には感謝。テーマは自己選択ペースと心拍ヒストグラム（こちらは故緒方道彦先生の遺品）。しばらく間が開いてしまった感があるが、今回は金があるので新装置を導入。世の中にはおもしろいこと考える人がいるものだ。自己ペースでのランニングなんてフィールドで行えばなんてことないのだが、実験室で行おうとすると、難しい。自己ペースをどうやってコントロールさせるのか？これまではコントローラーを持って走らせていたが、人は適当なスピードでコントロールするのを止めてしまう。これを走行面にセンサーを入れ、多少アバウトではあるがランナーが前後することでスピードを変化させる。なんでこんなこと考えつかなかったのだろう。一儲けできたのに。こうなるとアイディアは泉のごとく。

山本 教人

平成21年度に成し遂げた最も大きな仕事は、日本スポーツ社会学会の機関誌、「スポーツ社会学研究」が組んだ特集、『金メダル』の社会学への寄稿を求められたことであった。与えられた課題は、戦後のオリンピック大会で、我が国が獲得したメダルや我が国メダリストが、メディアによってどのように描かれてきたのかを明らかにすることであった。このために、1952年ヘルシンキ大会から2008年北京大会を報じた「朝日新聞」の記事を対象に内容分析を行った結果、次のようなことが明らかとなった。

オリンピックでメダルを獲得することは、我が国の国力を世界に向けて示すことであり、メダリストの養成は国策として報じられていた。1970年代前半までのメダリストのメディアイメージは、類い希なる「根性」の持ち主であり、メダリストには超人的な存在の名が冠せられた。精神主義を介してつながる、国家と個人の関係イメージを指摘できた。

東西両陣営によるオリンピックを通じた国力の誇示、オリンピックの商業主義が進行する状況で、商業資本を利用したメダルの獲得は、ますます国策として位置づけられるようになった。この時期のメディアは、プレッシャーに負けず実力を存分に発揮する選手を理想のアスリート像として提示した。

1990年代前半のスポーツをめぐる状況の変化のなかで、新しいタイプのメダリストがメディアに登場した。この時期の報道は、メダリストの個人情報に焦点化したもの

が多く、彼らをひとつのロールモデルとして位置づけているように思われた。このような報道においては、国策としてのメダル獲得と、メダリスト個人の体験はつながりを失ったものとしてイメージできた。しかし時に、選手の振る舞いや言動を通して、国家や組織から自由ではないアスリートの姿がメディアに描かれることもあった。

最後に、スポーツの商業主義化やメディアの多様化は、今後、国策としてのメダル獲得とメダリスト個人の間接関係をますます複雑・多様化すると考えられた。

杉山 佳生

平成 21 年度は、日本学術振興会科学研究費補助金による共同プロジェクト研究「体育学習を通じた生きる力の育成」の最終年度ということで、このまとめ作業を行った。具体的には、このプロジェクトにかかる研究発表を、国際スポーツ心理学会第 12 回大会において、「体育における心理社会的スキルの向上とそのライフスキルへの般化を規定する要因を探る」という演題で行い、また、開発した測定尺度に関する論文を、「健康科学」に発表した。くわえて、日本体育学会第 60 回記念大会の体育心理学専門分科会企画シンポジウムでは、「体育心理学の体育授業への貢献: 社会心理学的観点から体育授業を論じる」という演題で、このプロジェクト研究の成果をもとにした報告を行った。

個人的に行っている、体育・スポーツにおける心理社会的スキルに関する研究も継続しており、成果の一部は、「社会的志向性とスポーツ教育授業を通じたコミュニケーションスキルの発達との関係」という演題で、国際スポーツ心理学会第 12 回大会において報告した。

さらに、平成 21 年度日本学術振興会科学研究費補助金を受けて、「体育授業におけるノンバーバルスキル獲得・向上・発達プロセスの解明」(基盤研究(C): 研究代表者)および「行動科学に基づく大学生の心身の健康問題に対処しうる独創的体育プログラム開発」(基盤研究(B): 研究分担者)を開始した。

林 直亨

本年度発行された査読付き論文は、責任著者として 3 編、うち 1 編は日本語であり、数量としては低調であった。しかし、年度末には 2 編が受理され、3 編の第一著者論文と 2 編の責任著者論文を投稿できたため、成果は来年度に期待、というところである。

本年度は、昨年度に引き続き、1. 眼底の血流調節、2. 運動や食事が精神作業時の消化管血流の応答に与える影響、3. 各種刺激に対する顔面および咽頭部の血流応答について研究を進めた。

昨年度から開始した、眼底血流についての研究を進めた。これは公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団から援助を受けることで、本格的に実施することができた。内容の詳細は研究助成金の欄に記した。2 編の論文としてまとめ、投稿した。

また、昨年度に得た、運動時の瞳孔径に関するデータを論文としてまとめ、受理された。運動強度の増加に伴って、瞳孔径が散大することは先行研究から推察されることであるが、これを実証したものである。さらに、運動時の瞳孔径散大の一部が、活動筋の代謝受容器由来の情報に関連することを示した論文をまとめ、投稿した。

精神作業時の消化管への血流の応答、それに対する運動の影響に関しては日本学術振興会特別研究員(PD)の染矢菜美が中心となって進めた。こちらも 1 編を投稿することができた。

各種刺激に対する顔面および咽頭部の血流応答についての研究を、科研費を受けて行った。運動時の咽頭部の血流を非接触型の皮膚血流計によって計測した。上気道部の血流は 100 拍/分強度の運動時に増加することはあったが、運動終了 10 分後までも含めて減少することはなかった。この記録方法では、高強度運動時に起こる体幹部および頭部の揺れが原因でデータの記録が困難である。来年度は記録方法を改善してさらに高強度の運動時のデータを記録する予定である。

この実験時には同時に顔面の皮膚血流を計測した。顔面の血流は 140 拍/分以下の運動強度までは強度に依存して血流が増加することが明らかとなった。顔面の皮膚血流が、刺激に伴って変化することから、味覚に伴う顔面の皮膚血流の変化を記録する研究を企画し、やずや食と健康研究所研究助成金を得ることとなった。

最後に特記すべきことは、(社)全国大学体育連合より大学体育奨励賞を受賞したことである。これまでの研究内容は大学の身体運動を扱う授業への直接の貢献は薄いものであった。しかし、大学での週 1 回の筋力トレーニングの授業でも筋力増加に効果があることを示すことができ、その論文が受賞対象となったことは、大変名誉なことである。今後も、このような授業を対象にした研究も続けていこうという動機付けとなった。

高柳 茂美

身体技法（ボディワーク）の一つである「ボディートーク」が心身に及ぼす影響および教育的効果について検討している。ボディートークの技法のひとつである「心身一如のからだほぐし」が感情や免疫に及ぼす影響について生理的・心理的指標を用いて量的に分析し、また、ボディートークの体験により内的な変化が起こるかどうかを質的な側面から検討している。さらに、ボディートークの表現分野が及ぼす教育効果についても質的な検討を行っている。

●健康科学第二部門

上園 慶子

平成21年度は従前の研究を継続した 1) 九大在学生のライフスタイルについての調査、2) 血圧変動に関する研究と、平成20年度に始めた 3) 職員を対象にした運動が身体に及ぼす効果についての研究を進めた。

1) 今年度は新たな調査は行わず、平成19年度までに入力したデータベースの確認と整備作業を行った。

2) 若年者(大学生)の血圧変動については、20名の男女大学生に対して立位負荷試験を行ない、性格特性や特性不安、ストレス度を調査し、データベースに追加入力した。

3) 教職員を対象にして「平成20～21年度九州大学P&Pに採択された「大学における効果的なヘルスプロモーションの展開とその評価」を実施し、生体諸変数・血液・尿変数の測定結果を入力し、分析して報告した。週1回、1時間の教室参加でも糖代謝や脂質代謝の改善に有効であることが示された。

山本 和彦

ホームページ参照のこと。

一宮 厚

平成21年度の研究的活動としては、昨年度から検討してきた健康状態が修学に与える影響についての研究を継続した。定期健康診断時のアンケート調査について解析を行ったが、その結果の一部を全国大学保健管理研究集会で報告ことである。

報告したのは、2004年度に九州大学に入学した4年制学部の男子学生1,899名について、4年次初めの2007年4月の健診時のアンケート調査の結果と、2008年度末に順調に4

年で卒業できたかどうかについて関連を検討した結果である。

4年生になった頃には卒業遅延につながるいくつかの健康・生活上の問題が既に顕在化していることが健診を受けた学生では確認できた。

ただそもそも、卒業しなかった学生では6割弱が、最終学年になった際の定期健康診断を受診しておらず、卒業した学生の比べ遙かに多かった。また、最終学年になって精神・心理的な問題のために健康科学センターに来談した学生の割合も、卒業した学生に比べて多かった。

アンケートの回答と卒業の可否についての関連は、生活習慣などに関するものでは、生活の不規則さ、経済的困窮を始め、就寝時間の不規則さ、睡眠時間の長さ（5時間未満）、通学時間の長さ（1時間半以上）、勉強時間の長さ（1時間未満）、喫煙（ときどき～いつも吸う）、それに飲酒（週1回以上飲む）など、さまざまな生活上の問題が卒業しなかった学生に多いという結果であった。自覚症状では、朝起きたときに疲れがある、一日中憂鬱、何事にもやる気が起こらない、睡眠不足である、そして太りすぎたと思っていることが、卒業の遅れに関係があった。また、これらの自覚症状として現れている心身の不調が日常生活に支障を来しているとする者が、卒業しなかった学生には多かった。

一方で、ストレスの自覚、ゲーム時間の長さ（1時間以上）などは卒業の遅れと関係がなかった。

以上の卒業の遅延と有意な関係があった質問項目について多重ロジスティック回帰分析を行うと、心身の不調で日常生活に支障を来している、太りすぎの自覚、経済的に困っている、通学時間が長い（1時間半以上）の4つが抽出された。

以上のように、卒業1年前の段階で、多くの好ましくない生活習慣、さまざまな自覚症状の出現頻度が、規定年限で卒業しなかった学生で有意に高いことが分かった。このことは、健康問題が留年に大きな影響をもたらしており、生活習慣や自覚症状としてさまざまな形で現れていると考えられる結果であった。

休学では、健康問題がその要因となっていることは、疾病による休学が増加していることから明らかであるが、留年という問題はそう単純ではないと考えられる。健康問題以外の要因が極めて多いと考えられるからであるが、今回のような健康や生活習慣以外の因子を考慮しない解析によっても、健康問題が留年に影響していることが明

らかになった。

同様の解析を、学部女子および修士の学生でも行った。

丸山 徹

平成21年度は前年度に引き続いて学生や教職員の定期健康診断で得られる心電図指標に関する研究を中心に行った。心電計については携帯型心電計（イベントレコーダー）の精度評価を従来行ってきたが、今年度からは医学研究院で医療経営・管理学講座教授の馬場園明教授と共同で、携帯型心電計の費用対効果分析をレセプトベースで行いつつあり、その結果は近々に日本心電学会誌に投稿予定である。

携帯型心電計は発売当初の家庭用健康機器という側面から、近年ではIT（情報技術）をベースとしたモバイルテレメディシンとして循環器救急医療や遠隔医療にも利用されつつある。いずれは保健管理面での応用も期待され、キャンパス間距離がある本学でも利用価値は高いと考えられる。そこでこれまで以上の大量の心電情報をモバイル環境下に量子化して圧縮する必要がある。（株）パラマテックはこれらの医療用アプリケーションソフトの開発を行っており、今年度から共同で心電情報の最適な量子化および圧縮アルゴリズムを構築し、モバイル心電計に組み込むソフトウェアの試作と検証実験を行いつつある。

また理論心電図に関しては、総合理工学府で量子プロセス理工学専攻の坂口英継准教授と共同で、交流刺激によるスパイラルカオスの除去に関するコンピュータシミュレーションを継続している。極めて重篤な不整脈である心室細動は、スパイラルカオスを基盤に発生することが現在明らかである。心室細動の電氣的除細動はカウンターショックやAEDをはじめとして高出力で痛みをともなう直流刺激が主流である。これが低エネルギーの交流刺激で除細動できれば臨床的にも意義は大きい。交流外力を利用した極めて低エネルギーの電氣的除細動は複数の数理モデルで可能であり、これらの結果は複数の総説に発表中である。今後は現実形状の心臓を意識してシミュレーションの精度を上げていく必要がある。

入江 正洋

健康科学や健康管理に関する研究を、身体、心理、社会、環境などの様々な領域を包括した学際的な観点（Bio-psycho-socio ecological model）から、疫学、生理学、

免疫学、分子生物学などの手法を用いて行っている。これまでの主な研究テーマは、（1）健康管理、メンタルヘルス、及び健康増進に関する研究、（2）ストレスマネジメントに関する研究、（3）心理的ストレス、ライフスタイルと酸化的DNA損傷に関する研究、（4）アレルギー反応に及ぼす心理社会的要因に関する研究、などである。

平成21年度は、（2）の研究テーマに関して、大学生と一般企業社員を対象とした調査研究を行った。

大学生に関する研究では、Stroop Color Word Testを用いた精神作業で唾液中アミラーゼ濃度が上昇することを林直亨准教授との共同で明らかにした。しかし、内田・クレペリン負荷による精神作業やリラクゼーションに関する福盛英明准教授との共同研究では、いずれも唾液中アミラーゼ濃度に有意な変化はみられなかった。

一方、一般企業社員に関する研究では、事務系企業社員を対象として唾液中アミラーゼ濃度と職業性ストレス関連要因に関する横断的調査を実施したが、唾液中アミラーゼ濃度とType A行動様式には正の相関が認められたものの、他のストレス関連項目との間には有意な関連はなかった。

永野 純

生活習慣と疾病についての疫学研究：（1）財）放射線影響研究所（広島、長崎）における研究プロジェクトに参加している。21年度は、被爆者コホートにおける郵便調査（本格調査）の遂行に関与した。（2）九大予防医学と老年医学を中心に推進されている生活習慣病予防に関するコホート研究では、追跡開始時点でのデータの一部を用いた解析を予定しているが、まだ実行できていない。（3）「福岡大腸がん研究」（九大予防医学ほか）では、今年度は成果発表には至らなかった。（4）プロバイオティクス学（東海大学・古賀教授が主導）：タイの幼稚園コホートにおいてプロバイオティクスがピロリ菌感染を防ぐ可能性を示した研究に関与し、成果を論文発表（共著）した。

ストレスと健康についての研究：（1）慢性関節リウマチ患者の障害やQOLとストレスとの関連についての多施設共同研究：パーソナリティ・ストレスと重症度との関連についてのデータや資料の整理を行った（研究助成金による研究を参照）。（2）母親のストレスと小児喘息患者の予後との関連についての前向き研究（九大心身医学ほか）についてデータ解析を行い興味深い知見を得た。論文を投稿中である。（3）ウイルス性慢性肝炎の進展とストレス

および生活習慣との関連についての研究（九大心身医学ほか）に関与した。(4)ハイデルベルク研究（ドイツ）を主催する Grossarth-Maticsek 博士を訪問し、国際共同研究の枠組みとして、健セ（大柿センター長）とハイデルベルク大学キリスト教社会奉仕学研究所（J. Eurich 所長）との間での部局間協定の締結に尽力した。(5) 森林浴による心身への影響に関する研究（名大予防医学ほか）に関与し、成果発表（共著）を行った。

福盛 英明

平成 21 年度は、科研費で 2009 年度～2011 年度、基盤研究(C)「大学の学生相談充実における「発展段階モデル」の臨床心理学的研究(課題番号 21530692) 研究チーム: 福盛英明(研究代表者)、吉武清實・池田忠義(東北大学)、高野 明(東京大学)、山中淑江(立教大学)、内野悌司(広島大学)、大島啓利(広島修道大学)、峰松 修(九州産業大学)」が採択された。平成 21 年度は、

(1) 学生相談機関に関する事例研究

過去の学生相談機関の発展についての事例を以下のような視点・方法で集める。過去の文献・学会発表などによる学生相談機関の整備・発展の事例を収集し、データベース化する

学生相談機関を新設した大学の事例についてインタビューを行い、事例を収集する。

これらのデータを元に、学生相談機関の発展に関する基準やクリティカル・インシデント(発展を左右した出来事)、大学の体制作りの経過やシステム変遷などを抽出するためにデータ検討会・事例検討会を行う。

(2) 平成 21 年度の研究成果を踏まえ、学生相談機関充実の発展段階モデルを開発する。このモデルをプロフィールとして記述し、発展段階を評価・判定する指標として用いるために「学生相談機関発展段階表」を作成する。

* 研究体制

研究代表者(福盛)が連携研究者・大学院生などを指揮し、過去の文献を収集し、データベース化を行う。また学生相談機関新設大学については、福盛がインタビュー調査を行い、事例データを蓄積する。研究協力者として日本学生相談学会の全国学生相談機関調査を担当している大島啓利(広島修道大学)、峰松 修(九州産業大学)を迎え、研究分担者・協力者は、事例データベースが完成した後に、事例検討会を実施し、専門的視点から集まった事例を検討して、学生相談機関発展に寄与する要因は何か、

などを明らかにする。

ここ数年、後任人事の凍結の影響から、業務比重が過重になりすぎていたことが反省である。研究に時間をほとんど使うことができなかつたので、来年度も最低限の研究環境を整えることが課題である。

眞崎 義憲

平成 21 年度は、防衛医大から依頼のあった研究の成果発表と委託研究を中心に研究を行った。

(1) 間欠型一酸化炭素中毒の研究は、異動前に防衛医科大学で基礎実験を始めていた研究で、私の後任に研究指導をしていた一酸化炭素中毒のモデルラットの作成と培養細胞への暴露実験について一連の実験を終え、研究成果を論文として日本高気圧酸素・潜水医学会雑誌に発表した。

(2) 禁煙への行動変容の契機に関する研究は、今年度も講義を契機に禁煙した学生が数名認められ、教育が動機づけに大きく影響することが推察された。また、2009 年 5 月に九州大学喫煙対策宣言と九州大学喫煙対策基本方針が発表され、喫煙対策 WG のメンバーとして喫煙対策に関わることとなった。この一連の対策の中で、禁煙を希望する学生・教職員への禁煙支援を実施する卒煙プロジェクトの企画立案を行い、これらのプロジェクトの成果を通じて、禁煙の行動変容を明らかにする研究を開始した。

(3) 大学生の健康支援に関わる研究として、九州大学における新型インフルエンザ啓発活動と対策の問題点に関する報告と生活習慣改善プログラムにおける行動目標とその減量効果の関係に関する報告を全国大学保健研究集会で行った。本学の新型インフルエンザ対策に関する知見は他大学の多くの関心を呼び、演題発表後多くの質問が寄せられた。また、生活習慣改善プログラムの行動目標で、効果が最も高かったものは“歩数を増やす”であり、セルフモニタリングしやすいものが良い傾向が見られた。

(4) うきは市の食育プロジェクトの受託研究に従事した。6 月には食育プロジェクトの内容検討および助言を行った。また、また 8 月に 2 回、12 月に 2 回、2 つのモデル地区に対する健康調査の結果説明会を実施した。5 年計画であるため、次年度以降も継続して調査を行う予定である。また、10 月には食育ヘルス講演会として講演を実施した。

2. 研究業績

●健康科学第一部門

1. 著書・翻訳

(1) First author

西村秀樹: スポーツにおける抑制の美学 – 静かなる強さと深さ –, 単著, 世界思想社, 2009.9. 総 310 頁.

熊谷秋三: 監修, 身体活動・運動と生活習慣病: 運動生理学と最新の予防・治療. 日本臨床増刊号 (通巻 954 号), 日本臨床社, 2009.

林 直亨, 木場智史: 自律神経: 身体トレーニング 運動生理学からみた身体機能の維持・向上. 宮村實晴 (編集), pp 315-318, 2009.

山本教人: 駅伝. 小島美子, 鈴木正崇, 三隅治雄他監修, 祭・芸能・行事大辞典 .朝倉書店, 2009. p.225.

山本教人: 青梅マラソン. 小島美子, 鈴木正崇, 三隅治雄他監修, 祭・芸能・行事大辞典. 朝倉書店, 2009. p.253.

山本教人: 市民マラソン. 小島美子, 鈴木正崇, 三隅治雄他監修, 祭・芸能・行事大辞典. 朝倉書店, 2009. p.821.

山本教人: マラソン. 小島美子, 鈴木正崇, 三隅治雄他監修, 祭・芸能・行事大辞典. 朝倉書店, 2009. p.1666.

斉藤篤司: 福岡県勤労者山岳連盟 (監修): 健康になる九州の山歩き. 全国新聞社出版協議会・九州ブロック共同出版, 2009. 7.

2. 原著

A. 学会機関誌等論文

(1) First author

Hayashi N, Someya N, Fukuba Y: Effect of intensity of dynamic exercise on pupil diameter in humans. J Physiol Anthropol. 29:119-122, 2010.

山本教人: スポーツのジェンダー・イメージとスポーツの経験. 九州体育・スポーツ学研究, 23(2): 11-19, 2009.

山本教人: オリンピックメダルとメダリストのメディア言説. スポーツ社会学研究, 18(1): 5-26, 2010.

(2) Co-author

Gao Jian, Wang Xin, Hashimoto K, Zhao Jinlong, Ji Meng, Wang Hongwu: The impact on the mental health and life quality of the elderly people through practicing Calligraphy and Painting. China Journal of Health Psychology, 18(3): 291-293, 2010.

木内敦詞, 中村友浩, 荒井弘和, 浦井良太郎, 橋本公雄: 大学初年次生の生活習慣と取得単位数の関係. 大学体育学, 7: 69-76, 2010.

天本優子, 足達淑子, 国柄后子, 熊谷秋三: 通信制生活習慣改善法が睡眠改善に及ぼす効果とその関連要因. 日本公衛誌, 57:195-21, 2010.

山崎将幸, 杉山佳生: バドミントン選手におけるモチベーションビデオの介入効果 –試合 1 時間前視聴タイミングからの検討-. スポーツパフォーマンス研究, 1: 275-288, 2009.

中澤 史, 杉山佳生, 山崎将幸: アスリーートの自我状態と心理社会的スキルに関する研究. 交流分析研究, 34(2): 69-75, 2009.

Someya N, Endo M-Y, Fukuba Y, Hirooka Y, and Hayashi, N: Effects of a mental task on splanchnic blood flow in fasting and postprandial conditions. European Journal of Applied Physiology 108: 1107-1113, 2010.

染矢菜美, 林 直亨, 丸山 徹: 脈波コトコフ音記録計による非観血的な心拍出量の測定. 臨床と研究.87: 153-158, 2010.

B. 紀要等論文

(1) First author

橋本公雄: 運動継続化の螺旋モデル構築の試み. 健康科学, 32: 51-62, 2010.

大柿哲朗, 中尾武平, 斉藤篤司, 鍋谷 照: ネパール丘陵地農村地帯の青少年の日常生活における歩数および心拍数. 健康科学, 32: 63-69, 2010.

杉山佳生, 渋谷崇行, 西田 保, 伊藤豊彦, 佐々木万丈, 磯貝浩久: 体育授業における心理社会的スキルとライフスキルを測定する尺度の作成. 健康科学, 32: 77-84, 2010.

斉藤篤司, 濱田綾子, 小清水孝子: 前日の積極的水分摂取が登山時の生体負担度に及ぼす影響. 福岡スポーツ医科学研究, 8: 10-14, 2010.

(2) Co-author

中山正剛, 石原一成, 大柿哲朗, 丸山 泉, 神野賢治, 田原亮二, 山本浩二: 高齢者の日常生活に必要な能力を評価する項目の選定. 別府大学紀要, 29: 59-65, 2010.

岸本裕代, 大島秀武, 野藤 悠, 上園慶子, 佐々木 悠, 清原 裕, 熊谷秋三: 日本人地域一般住民における身体活動量の実態: 久山町研究. 健康科学, 32:97-102, 2010.

木村公喜, 熊谷秋三: 障害と疾病の予防的戦略に関する一考察: スポーツマネジメントの観点から. 健康科学, 32:115122, 2010.

Sasaki H, Kaku Y, Fukudome M, Tomita K, Iino K, Uezono K, and Kumagai S: The Occurrence of Emotional/Mental Stress-Induced Atypical“Ketosis-prone Type 2 Diabetes” in Newly Diagnosed Japanese Subjects—Preliminary observations. Journal of Health Science, Kyushu University, 32: 103-107, 2010.

中澤 史, 杉山佳生: 自我状態の成長を意図した心理サポートの検討. 健康科学, 32: 85-95, 2010.

山崎将幸, 杉山佳生, 徳永幹雄: バドミントン選手におけるモチベーションビデオの視聴介入効果—試合前日視聴タイミングからの検討—. 福岡医療福祉大学紀要, 7: 85-89, 2010.

佐々木万丈, 西田 保, 伊藤豊彦, 磯貝浩久, 杉山佳生, 渋谷崇行: 体育授業中の被中傷に対する認知行動的対処と体育授業への適応. 日本女子体育大学紀要, 40: 55-66, 2010.

Yaguchi K, Yasunaga A, Sugiyama Y: Psychological health and the functional fitness in Japanese older adults. 東海大学紀要体育学部, 39: 11-17, 2009.

小清水孝子, 斉藤篤司: 福岡県国体代表選手の食生活調査. 福岡スポーツ医科学研究, 8: 15-19, 2010.

3. 総説

(1) First author

熊谷秋三 (監修): 序文: 疫学, 機構, そして健康政策へ. 特集: 「身体活動・運動と生活習慣病: 運動生理学と最新の予防・治療」, 日本臨床 67 巻増刊号 2: 1-8, 2009.

熊谷秋三, 森山善彦: 総論: 体力評価の重要性とその意義. 特集: 「身体活動・運動と生活習慣病: 運動生理学と最新の予防・治療」, 日本臨床 67 巻増刊号 2: 171-178, 2009.

熊谷秋三 (監修): 巻頭言: (特集) 慢性疾患における身体活動・運動. 実験治療, 696:2-3, 2009.

(2) Co-author

長野真弓, 熊谷秋三: Metabolic fitness の評価. 特集: 「身体活動・運動と生活習慣病: 運動生理学と最新の予防・治療」, 日本臨床 67 巻増刊号 2: 192-196, 2009.

Németh H, and Kumagai S: Exercise epidemiology on mortality and morbidity with an emphasis on the effects of physical fitness. Journal of Health Science, Kyushu University, 32: 21-29, 2010.

- 崎田正博, 高杉紳一郎, 熊谷秋三: 加齢による下肢感覚機能の変化と立位姿勢制御に対する影響. 健康科学, 32: 39-50, 2010.
- 山津幸司, 熊谷秋三: Information Communication Technology を活用した身体活動介入プログラムに関する研究. 健康科学, 32:31-38, 2010.
- 永尾雄一, 杉山佳生, 山崎将幸, 河津慶太: チームスポーツにおける集団効力感の資源とその有用性. 健康科学, 32: 11-19, 2010.

4. 資料・報告書

(1) First author

- 橋本公雄: 平成 20・21 年度ウォーキングの実態調査報告書. 九州大学健康科学センター, Pp. 20, 2010. 2.
- 橋本公雄: 平成 21 年度筑紫野市民のウォーキングの実態調査報告書. 筑紫野市健康づくり推進協議会, Pp. 12, 2010. 2.
- 橋本公雄: 平成 21 年度筑紫野市「なかなかよか健康チャレンジ」報告書ーウォーキングによる「健康なまちづくり」ー. 筑紫野市健康づくり推進協議会, Pp.101, 2010.3.
- 橋本公雄: 平成 21 年度科研費 (B)「行動科学に基づく大学生の心身の健康問題に対処しうる独創的体育プログラム開発」平成 21 年度中間報告書. 研究代表者 (橋本公雄), Pp.96, 2010.3.
- 大柿哲朗, 上園慶子, 眞崎義憲, 丸山 徹: うきは市食育プロジェクト平成 20 年度報告書 (総頁 22), 2010. 3.
- 眞崎義憲, 大柿哲朗, 上園慶子, 丸山 徹: うきは市食育プロジェクト平成 21 年度報告書 (総頁 25), 2010. 3.
- 熊谷秋三: 運動の心身への恩恵とその機構ー生活習慣病・介護予防の観点から. 第 33 回岡山スポーツ医科学研究会抄録集, 12-19, 2009.
- 熊谷秋三: フロントランナー, 九州大学広報, 63:21-24, 2009.
- 熊谷秋三, 諏訪雅貴, 長野真弓, 野藤 悠: 持久性運動における脳由来神経栄養因子(BDNF)の応答. (財)中富健康科学振興財団第 20 回研究助成金業績集平成 21 年版.109-112, 2009.
- 熊谷秋三: 地域住民における運動習慣と認知症発症との関係: 久山町研究. 平成 21 年度厚生労働科学研究費補助金 (認知症対策総合研究事業) 研究報告書. アルツハイマー病の危険因子の解明と予防に関する大規模ゲノム疫学研究 (研究代表者: 清原 裕), 2010.
- 熊谷秋三: 大規模コホートをを用いた生活習慣病の一次予防のための運動量策定に関する運動疫学研究. 平成 21 年度 厚生労働科学研究費補助金 (循環器疾患等生活習慣病対策総合研究事業) 総括研究報告書
- 熊谷秋三: 日本人地域一般住民における身体活動量の実態: 久山町研究. 平成 21 年度 厚生労働科学研究費補助金 (循環器疾患等生活習慣病対策総合研究事業) 分担研究報告書. 熊谷秋三: 九州大学リサーチコア「身体運動の科学を通しての社会貢献」の認定を受けて. Campus Health, No.33:2-3, 2010.
- 熊谷秋三, 山津幸司: 携帯端末機器を活用した生活習慣改善プログラムに関する研究. 平成 21 年度厚生労働科学研究費補助金 (糖尿病戦略 研究事業) 分担研究報告書. 印刷教材と携帯電話フィードバックシステムを用いた食生活の改善及び運動指導プログラムの開発に関する研究. 2010.
- 林 直亨, 篠原 稔: 体育・スポーツ科学の発展的総合化を願う「身体運動の科学」合宿ワークショップ. スポーツ科学研究, 6, 111-115, 2009.
- 山本教人: 競技スポーツを取り巻く社会環境について. 体育・スポーツ教育研究. 9(1): 40-41, 2009.

(2) Co-author

- 山津幸司, 熊谷秋三, 佐藤 武, 小西史子: 糖尿病・メタボリックシンドロームの発症および重症化予防を目的とした印刷教材の開発. 平成 21 年度厚生労働科学研究費補助金 (糖尿病戦略 研究事業) 分担研究報告書. 印刷教材と携帯電話フィードバックシステムを用いた食生活の改善及び運動指導プログラムの開発に関する研究. 2010.

5. 学会・研究発表

(1) First author

- 橋本公雄, 堀田 亮, 山崎将幸: 運動に伴うメンタルヘルス改善・向上効果のモデル構築の試み—心理・社会的要因を媒介変数として—. 日本体育学会第60回大会, 東広島市, 2010.8.25-28.
- 橋本公雄, 山本教人: 大学体育実技授業の心理・社会的効果に関する研究—ソーシャルサポートの効果—. 九州体育・スポーツ学会第58回大会, 熊本市, 2009. 9. 5.
- 斉藤篤司, 濱田綾子, 堀田 亮, 藤原大樹, 池田まり子, 染矢菜美, 中尾武平, 久保山直己: 中高年登山者の水分摂取状態が注意力に及ぼす影響. 2009年度日本登山医学会学術集会・第29回日本登山医学シンポジウム, 東京都, 2009. 5.30.
- Saito A, Hamada A, Hotta R, Ikeda M, Fujiwara H, Someya N, Nakao T, Kuboyama N: Effects of prehydration on cognitive function in elderly trekker. The 14th East Asian Sport and Exercise Science Society Annual Conference, Osaka, Japan. 2008. 8. 8.
- 斉藤篤司, 池田まり子, 濱田綾子, 池田 修: 女子ハンドボール選手の試合期の水分摂取状態. 九州体育・スポーツ学会第58回大会, 熊本市, 2009. 9. 6.
- Sugiyama Y, Nagao Y, Yamazaki M, Kawazu K, Wang XL, Kumasaki E: The relationship between social orientations and the improvement of communication skills through sports education classes. The 12th ISSP World Congress of Sport Psychology, Marrakesh, Morocco, 2009.6.17-21.
- Sugiyama Y, Shibukura T, Nishida T, Ito T, Sasaki B, Isogai H: Exploring factors that determine the improvement of psychosocial skills in physical education and their transfer to life skills. The 12th ISSP World Congress of Sport Psychology, Marrakesh, Morocco, 2009.6.17-21.
- Hayashi, N. Kamei, M., Someya N. and Fukuba, Y.: Effect of exercise intensity on the flow rate, viscosity, and osmolarity of human saliva. American College of Sports Medicine. Seattle 2009.5.27-30.
- Hayashi, N. and Someya N.: Effect of muscle metaboreflex activation on pupil diameter in humans. 36th International Congress of Physiological Society. 京都 2009.7.27-8.1.
- Hayashi N, and Someya N.: Effect of muscle metaboreflex activation on pupil diameter in humans. International Sports Science Network Forum in Nagano 2009. 軽井沢 2009.8.1-3.
- 林 直亨, 染矢菜美, 池村 司, 清水美紅: 網膜・脈絡膜の血流速度は運動強度の増加に伴って増加する. 第64回日本体力医学会 新潟 2009.9.18-20.
- 林 直亨, 染矢菜美, 福場良之: 運動時における瞳孔径の調節, 第24回生体・生理工学シンポジウム, 仙台 2009.9.24-26.
- 高柳茂美: ボディートークが気分及ぼす一過性の影響—大学体育授業における試み—. 第11回日本健康支援学会・第12回運動疫学研究会合同学術集会, 東京都, 2010. 3. 7- 8.

(2) Co-author

- 藤原大樹, 橋本公雄: 昼休み時間の身体活動量増強のための介入. 上益城郡体育授業研究会, 熊本, 2010.1.23.
- 藤原大樹, 橋本公雄: 小学校環境と昼休みの身体活動について. 日本体育学会第60回大会, 東広島市, 2009. 8.26-28.
- 藤原大樹, 橋本公雄: 環境認知, 自己効力感とウォーキング行動の関連. 九州体育・スポーツ学会第58回大会, 熊本市, 2009.9.4-6.
- 阿南祐也, 橋本公雄: スポーツ選手の心理的側面に及ぼすドラマチック体験の影響. 九州地区大学体育連合平成21年度春期「体育・スポーツ・健康に関する教育研究会議」, 福岡県筑紫野市, 2010.3.13-14.
- 阿南祐也, 橋本公雄: スポーツドラマチック体験の再考. 九州体育・スポーツ学会第58回大会, 熊本市, 2009. 9. 4- 6.
- 井上百愛, 橋本公雄: 中学・高校時代における運動部の組織風土が創造的態度へ及ぼす影響. 九州スポーツ心理学会, 春日市, 2010.3.6- 3. 7.

- 井上百愛, 本多美美子, 橋本公雄: 部活動の組織風土と創造的態度の関係. 九州体育・スポーツ学会第 58 回大会, 熊本市, 2009.9.4-9.6.
- 野津亜季, 橋本公雄, 堀田 亮: 大学生の運動・スポーツ行動における Planned Behavior 理論の適用に関する研究—TPB 以外の変数の規定力—. 日本体育学会第 60 回大会, 東広島市, 2009.8.26-28.
- 野津亜季, 橋本公雄, 堀田 亮: 大学生の運動・スポーツ行動における Planned Behavior 理論の適用に関する研究—モデル適合の検討—. 九州体育・スポーツ学会第 58 回大会, 熊本市, 2009.9.4-6.
- 甲木秀典, 橋本公雄: 組織キャンプにおけるコミュニケーション・スキルの向上を意図したソーシャルサポート介入研究, 九州体育・スポーツ学会第 58 回大会, 熊本市, 2009.9.4-6.
- 木村 彩, 手塚洋介, 橋本公雄: 大学生運動選手におけるバーンアウトとストレスの関係, 九州体育・スポーツ学会第 58 回大会, 熊本市, 2009.9.4-6.
- 谷本英彰, 上地広昭, 橋本公雄: 子どもが知覚する親からの働きかけと動機づけに関する一考察, 九州体育・スポーツ学会第 58 回大会, 熊本市, 2009.9.4-6.
- 堀田 亮, 橋本公雄, 藤原大樹: 高齢者の身体活動・運動と認知機能の関係. 九州地区大学体育連合 平成21年度春期「体育・スポーツ・健康に関する教育研究会議」, 筑紫野市, 2010.3.13-14.
- 堀田 亮, 橋本公雄, 藤原大樹: 高齢者の認知機能と日常生活での活動の関係について. 九州スポーツ心理学会第 23 回大会, 春日市, 2010.3.6-7.
- Hotta R, Hashimoto K: The Relationship between Cognitive Function and Activities in the Community-dwelling Elderly. The 14th Annual Conference of East Asian Sport and Exercise Science Society (EASESS), Osaka, Japan, 2009.8.7-9.
- 堀田 亮, 橋本公雄: 高齢者の認知機能とその関連要因についての検討. 九州体育・スポーツ学会第 58 回大会, 熊本市, 2009.9.4-6.
- 小松智子, 橋本公雄: ボランティア活動がメンタルヘルスに及ぼす影響, 九州体育・スポーツ学会第 58 回大会, 熊本市, 2009.9.4-9.6
- 中尾武平, 斎藤篤司, 大柿哲朗: ネパール丘陵地小児の形態および皮下脂肪厚の性差. 日本発育発達学会第 7 回大会. 北九州市. 2009.3.8.
- 中山正剛, 中尾武平, 大柿哲朗: 自立高齢者の日常生活に必要な体力と QOL との関係. 九州体育・スポーツ学会第 58 回大会, 2009.9.6.
- 諏訪雅貴, 中野裕史, 熊谷秋三: BDNF 投与がラット骨格筋の代謝特性に及ぼす影響. 第14回日本運動生理学会大会, 東京, 2009.7.25-26
- Sakita M, Takasugi S, and Kumagai S: Effects of medium latency soleus and tibialis anterior stretch reflexes with vibration during feet perturbations. 第 36 回世界生理学会, 京都市, 2009.7.27-8.1.
- 諏訪雅貴, 中野裕史, 熊谷秋三: 一酸化窒素合成酵素阻害による骨格筋の代謝特性と組織化学的特性の変化. 第 64 回日本体力医学会大会, 新潟市, 2009.9.17-19.
- 岸本裕代, 秦 淳, 熊谷秋三, 清原 悠: 一般住民の定期的な運動が脳卒中と虚血性心疾患の発症に及ぼす影響: 久山町研究. 第 64 回日本体力医学会大会, 新潟市, 2009.9.17-19.
- 野藤 悠, 諏訪雅貴, 佐々木悠, 熊谷秋三: 一過性の最大・最大下運動に伴う血清脳由来神経栄養因子水準の変化. 第 64 回日本体力医学会大会, 新潟市, 2009.9.17-19.
- 井出幸二郎, 畑山知子, 長野真弓, 熊谷秋三: 地域在住高齢者の精神健康度と体力に関する疫学研究. 第 64 回日本体力医学会大会, 新潟市, 2009.9.17-19.
- 山津幸司, 岸本裕代, 長野真弓, 佐々木悠, 熊谷秋三: 糖尿病患者における不眠の有症率とその関連因子. 第 64 回日本体力医学会大会, 新潟市, 2009.9.17-19.
- Nemeth, H., 岸本裕代, 甲斐裕子, 佐々木悠, 熊谷秋三: Contribution of Endurance Fitness to Metabolic Syndrome in Newly Diagnosed Type 2 DM. 第 47 回日本糖尿病学会九州地方会, 北九州市 2009.10.23-24.

- Nofuji Y, Suwa M, Sasaki S, and Kumagai S: The effects of exercise on serum brain-derived neurotrophic factor. 2nd International Symposium on Adipobiology and Adipopharmacology (ISAA), Varna, Bulgaria, 23-25th October, 2009.
- Yamatsu K., Kishimoto H, Nagano M, Sasaki H, and Kumagai S: Prevalence and correlates of sleep disturbances in Japanese male patients with diabetes mellitus; Obesity, metabolic syndrome and sleep disturbances in Japanese male patients with diabetes mellitus. The 1st International Congress on Abdominal Obesity, Hong Kong, China, 28-30, January, 2010.
- Kishimoto H, Sasaki H, and Kumagai S: Effects of cardiorespiratory fitness and visceral fat area on metabolic syndrome in Japanese patients with early-stage diabetes mellitus. The 1st International Congress on Abdominal Obesity, Hong Kong, China, 28-30, January, 2010.
- Yamatsu Y, Kishimoto H, Nagano M, Sasaki H, and Kumagai S: Metabolic syndrome and sleep disturbances in Japanese male patients with diabetes mellitus. 3rd. International Conference on Advanced Technologies and Treatments for diabetes. Basel, Switzerland, 10-13, February, 2010.
- 野藤 悠, 松尾恵理, 大島秀武, 岸本裕代, 長野真弓, 熊谷秋三: 地域在住高齢者の身体活動量の実態: 太宰府研究. 第11回日本健康支援学会年次学術集会, 東京, 2010. 3.6.-7.
- 松尾恵理, 森山善彦, 長野真弓, 井出幸二郎, 一宮 厚, 熊谷秋三: 地域在住高齢者の身体活動量とうつ症状との関連性: 太宰府研究. 第11回日本健康支援学会年次学術集会, 東京, 2010. 3.6.-7.
- 森山善彦, 松尾恵理, 西崎佳子, 長野真弓, 井出幸二郎, 一宮 厚, 熊谷秋三: 地域在住高齢者の身体活動量と認知機能の関連性: 太宰府研究. 第11回日本健康支援学会年次学術集会, 東京, 2010. 3.6.-7.
- 村上清英, 長野真弓, 井出幸二郎, 一宮 厚, 熊谷秋三, 松尾恵理. 地域在住高齢者の身体活動量とQOLとの関連性: 太宰府研究. 第11回日本健康支援学会年次学術集会, 東京, 2010. 3.6.-7.
- 西崎佳子, 松尾恵理, 長野真弓, 井出幸二郎, 一宮 厚, 熊谷秋三: 閉じこもり高齢者の特性と QOL・首尾一貫感覚との関連性. 第11回日本健康支援学会年次学術集会, 東京, 2010. 3.6.-7.
- Sasaki H., Ohokubo K., Tomita K., Iino Y., Kashiwagi A., Uezono K., and Kumagai S.: Congenital partial lipodystrophy (Kobberling type): A long-term follow-up regarding the efficacy of pioglitazone. 14th International Congress of Endocrinology, Kyoto, 26-30 March, 2010.
- Isogai H, Ito T, Nishida T, Sasaki B, Sugiyama Y, Shibukura T: The effects of motivational climate in physical education on students' achievement motivation. The 12th ISSP World Congress of Sport Psychology, Marrakesh, Morocco, 2009.6.17-21.
- 王 雪蓮, 杉山佳生, 河津慶太: 中国の大学生における体育授業への期待の再検討. 九州体育・スポーツ学会第58回大会, 熊本市, 2009.9.4-6.
- 河津慶太, 杉山佳生: スポーツチームにおけるチームパフォーマンス予測モデルの研究. 九州体育・スポーツ学会第58回大会, 熊本市, 2009.9.4-6.
- 児玉光雄, 杉山佳生, 高橋仁大: テニス用タイミング予測トレーナーのトレーニング効果. 九州体育・スポーツ学会第58回大会, 熊本市, 2009.9.4-6.
- 河津慶太, 杉山佳生: スポーツチームにおけるチームパフォーマンス予測モデルの研究. 日本体育学会第60回記念大会, 東広島市, 2009.8.26-28.
- 中澤 史, 山崎将幸, 杉山佳生: 学生テニス選手の自我状態と心理的競技能力の関係. 日本体育学会第60回記念大会, 東広島市, 2009.8.26-28.
- 渋谷崇行, 杉山佳生, 西田 保, 伊藤豊彦, 佐々木万丈, 磯貝浩久: 体育授業を通じた心理社会的スキルの獲得と般化を促進する実践的研究. 日本スポーツ心理学会第36回大会, 東京都, 2009.11.21-22.
- 佐々木万丈, 西田 保, 伊藤豊彦, 磯貝浩久, 杉山佳生, 渋谷崇行: 体育授業におけるストレス適応能力の育成: 生きる力へのアプローチ. 日本スポーツ心理学会第36回大会, 東京都, 2009.11.21-22.
- 伊藤豊彦, 磯貝浩久, 西田 保, 佐々木万丈, 杉山佳生, 渋谷崇行: 体育における動機づけ雰囲気は児童の動機づけに及

ぼす影響. 日本スポーツ心理学会第 36 回大会, 東京都, 2009.11.21-22.

中澤 史, 杉山佳生, 山崎将幸: 競技成績別にみる学生テニス選手の自我状態と社会的スキルの関係. 日本スポーツ心理学会第 36 回大会, 東京都, 2009.11.21-22.

Shibukura T, Sugiyama Y, Nishida T, Ito T, Sasaki, Isogai H: The effect of an intervention program in physical education with the aim of improving psychosocial skills and their transfer to life skills. Association for Applied Sport Psychology 24th Annual Conference, Salt Lake City, 2009.9.15-18.

児玉光雄, 杉山佳生, 高橋仁大, 小山祐輔: テニス用タイミング予測トレーナーのトレーニング効果に関する研究. 九州スポーツ心理学会第 23 回大会, 春日市, 2010. 3. 6- 7.

熊崎絵理, 杉山佳生, 河津慶太: 初心者に対する Performance Routine の指導効果—フリースロー課題に着目して—. 九州スポーツ心理学会第 23 回大会, 春日市, 2010. 3. 6- 7.

Someya N, Kamei M, and Hayashi N: Effect of exercise on appetite and whole saliva in human. American College of Sports Medicine. Seattle 2009. 5. 27-30.

Someya N, Imada T, and Hayashi N: Effect of glutamate on systemic and splanchnic circulations. 36th International Congress of Physiological Society. 京都 2009. 7.27- 8. 1.

染矢菜美, 林 直亨, 福場良之: 食物の呈示に対する唾液分泌の変化に運動が与える影響. 第 64 回日本体力医学会, 新潟, 2009. 9.18-20.

染矢菜美, 亀井真澄, 福場良之, 林 直亨: 食事に関連する感覚刺激に対する唾液分泌の応答にエネルギーバランスが与える影響. 第 24 回生体・生理工学シンポジウム, 仙台, 2009. 9.24-26.

6. 講演・ワークショップ・シンポジウム・コメンテーター等

橋本公雄 (コーディネーター): 運動行動のアドヒアランスの高め方—理論・モデルと実践—.九州スポーツ心理学会第 23 回大会, 春日市, 2010. 3. 6-7.

橋本公雄 (第 5 専門分科会シンポジウム, 演者): 大学における新たな運動部の在り方を求めて. 九州体育・スポーツ学会第 58 回大会, 熊本市, 2009. 9. 4-6.

橋本公雄 (キーノートレクチャー): 運動に伴うポジティブ感情の変化と運動の継続化. 日本体育学会第 60 回大会, 東広島市, 2009. 8. 25-28.

橋本公雄 (コーディネーター): 身体活動・運動の実践を促す地域介入—インターベンショニストからの視点—. 日本体育学会第 60 回大会, 東広島市, 2009. 8. 25-28.

橋本公雄 (記念講演): 幼児期から児童期の健康に関するスポーツ心理学研究. 第 5 回アジア幼児体育・健康福祉シンポジウム in 福岡, 福岡市, 2009. 8. 7- 9.

大柿哲朗 (運営・司会・ウエルカムスピーチ): 東アジア運動・スポーツ学会第 14 回大会, 東大阪市, 2009. 8. 7- 9.

熊谷秋三 (招待講演): 楽しい生活を目指して—運動の効用—. 西日本新聞健康セミナー. 福岡市, 2009. 5.23.

Kumagai S (Organize & Chairman): Main Symposium: Healthy Aging. First Asia-Pacific Health Promotion and Health Education, Makuhari, Japan, 17-20th July, 2009.

熊谷秋三 (特別講演): SIRT1 と運動. 第 2 回アンチエイジングアカデミー. 東京, 2009.5.27.

熊谷秋三 (特別講演): 運動の心身への恩恵とその機構: 生活習慣病・介護予防の観点から. 岡山スポーツ医学研究会第 33 回大会. 岡山市, 2009.7.25.

熊谷秋三 (招待講演): リラクゼーションダイエットとは. ダイエット&ビューティフェア.東京, 2009. 9. 1.

熊谷秋三 (シンポジウム企画・司会): メンタルヘルス維持・改善への運動疫学的アプローチの必要性. 第 22 回日本健康心理学会大会, 東京, 2009.9. 7- 8.

熊谷秋三 (シンポジスト): メンタルヘルスの運動疫学研究成果のオーバービューと課題. 第 22 回日本健康心理学会大会, 東京, 2009. 9. 7- 8.

- 熊谷秋三 (教育講演) : 運動するとサーチュインが上がる. 第 8 回抗加齢医学の実際. 東京, 2009. 9.21.
- 熊谷秋三 (招待講演) : 運動の効果: 運動疫学から筋適応のメカニズムまで. 慶應義塾大学医学部眼科学教室公開講演会. 2009.10. 1.
- 熊谷秋三 (招待講演) : 生活習慣病・介護予防に関する運動疫学とその機構. 産業医科大学高齢者の就労に関するプロジェクト研究講演. 北九州市, 2009.12.11.
- 杉山佳生 (シンポジスト) : 体育心理学専門分科会企画シンポジウム 体育心理学の体育授業への貢献. 日本体育学会第 60 回記念大会, 東広島市, 2009. 8.26-28.
- 杉山佳生 (司会) : 基調講演 チームワーク育成への心理学的アプローチ (山口裕幸氏) . 九州スポーツ心理学会第 23 回大会, 春日市, 2010. 3. 6-7.
- Hayashi N (Chair): Central mechanisms for cardiovascular and respiratory regulations. International Sports Science Network Forum in Nagano 2009. Karuizawa, Japan, 2009. 8. 1- 3.
- Hayashi N (Invited lecturer) : Control of pupil diameter during exercise. 東亜大学スポーツ科学部 韓国, 2009. 8.22.
- 山本教人: 生涯スポーツ社会における大学体育とスポーツ. 体育・スポーツ・健康に関する教育研究会議シンポジウム, 筑紫野市, 2010. 3. 14.

7. 論文査読

氏名	雑誌名など	編数
橋本 公雄	体育学研究	4
	スポーツ心理学研究	1
	体育測定評価研究	2
	健康心理学研究	1
	生理人類学研究	1
大柿 哲朗	J. Physiol Anthropol & Appl Human Sci	2
	健康支援	2
	体育学研究	1
	体力科学	1
西村 秀樹	スポーツ社会学研究	1
熊谷 秋三	健康支援	1
	Neuroscience Letter	1
	Diabetes Care	3
	糖尿病	1
	Abstract in First Asia-Pacific Health Promotion and Health Education	1
	九州地区国立大学間の連携に関わる論文集	1
	運動疫学研究	1
山本 教人	スポーツ社会学研究	1
	体育・スポーツ学教育研究	1
杉山 佳生	International Journal of Sport and Health Science	1
	健康支援	2
	体育学研究	1
	九州地区国立大学間連携教育系・文系論文集	1

	スポーツパフォーマンス研究	1
林 直亨	American Journal of Physiology	1
	Journal of Physiological Science	4
	Medicine and Science in Sports and Exercise	5
	Autonomic Neuroscience: Basic and Clinical	1
	European Journal of Sport Science	1
	European Journal of Ultrasound	1
	体育学研究	1
	トレーニング科学	2

8. その他（民間商業雑誌投稿、新聞等）

橋本公雄: ポジティブ感情とネガティブ感情, 体育の科学, 60: 15-19, 2010, 1.

杉山佳生: スポーツメンタルスキルを身につけよう-イメージリハーサル-. CAMPUS HEALTH, 32: 2, 2009.

齋藤篤司, 丸山 徹: とっても健康ランド「運動」KBC テレビ, 2009. 9. 26.

9. 表彰

林 直亨: (社) 全国大学体育連合 大学体育奨励賞 2010. 3.18.

10. 日本学術振興会特別研究員等審査会専門委員

橋本公雄: 平成 22 年度学術振興会特別研究員等審査会専門委員

●健康科学第二部門

1. 著書・翻訳

(1) First author

丸山 徹, 平松伸一: 心不全. 糖尿病治療ハンドブック (永淵正法編集), 182-185, 医学出版, 東京, 2009

(2) Co-author

福盛英明: 第 5 章: メンタルヘルス—充実した学生生活の基盤であるところとからだの健康支援を行う 山田 耕路編著, 「21 世紀の教育を拓く・九州大学教育改革の試み」, 西日本新聞, 2009.08. (分担執筆)

福盛英明: 3 保護者に向けた活動の実際 第 12 章 保護者に向けた活動 (高石恭子・福盛英明), 日本学生相談学会 50 周年記念誌編集委員会編, 学生相談ハンドブック, 学苑社, 2010.02. (分担執筆)

2. 原著

A. 学会機関誌等論文

(1) First author

(2) Co-author

Ohta Y, Matsumura K, Tsuchihashi T, Ohtsubo T, Arima H, Miwa Y, Goto K, Ohya Y, Fujii K, Uezono K, Abe I, Iida M: Improvement of Blood Pressure Control in a Hypertension Clinic in Japan: a 15-Year Follow-Up Study. Clin Exp and Hypertens, 31:553-559, 2009.

Kuruma T, Maruyama T, Hiramatsu S, Yasuda Y, Yasuda S, Odashiro K, Harada M: Relationship between amiodarone-induced subclinical lung toxicity and Th1/Th2 balance. Int J Cardiol 134: 224-230, 2009.

Yasuda S, Maruyama T, Hiramatsu S, Odashiro K, Akashi K: Heat transfer mediated by coronary circulation in

- Langendorff-perfused isolated whole hearts. *J Biorheol* 23: 56-63, 2009.
- Nakamura H, Fujihara M, Nakaji G, Yasuda S, Karashima E, Hiramatsu S, Odashiro K, Maruyama T, Akashi K: A case of atrial tachycardia originating from giant coronary sinus connected to persistent left superior vena cava: Successful catheter ablation guided by noncontact mapping. *Fukuoka Acta Med* 100: 258-264, 2009.
- 藤原昌彦, 仲村尚崇, 中司 元, 辛島詠士, 樋詰貴登士, 平松伸一, 小田代敬太, 丸山 徹, 赤司浩一: 無症候性 Brugada 症候群のイベントレコーダーによる間歇的な右胸部誘導モニタリングの検討. *心電図* 29: 148-154, 2009.
- Boonyaritichaij S, Kuwabara K, Nagano J, Kobayashi K, Koga Y: Long-term administration of probiotics to asymptomatic pre-school children for either the eradication or prevention of *Helicobacter pylori* infection. *Helicobacter* 14:202-207, 2009.
- Morita E, Nagano J, Yamamoto H, Murakawa I, Aikawa M, Shirakawa T: Two thirds of forest walkers with Japanese cedar pollinosis visit forests even during the pollen season. *Allergol Int* 58:383-388, 2009.
- 森田えみ, 永野 純, 福田早苗, 中島 皇, 岩井吉彌, 山本博一, 浜島信之: 森林に行く頻度と主観的健康状態に関する横断的研究. *日生氣誌* 46: 99-107, 2009.

B. 紀要等論文

(1) First author

入江正洋, 福盛英明: 大学生のプレゼンテーションストレスと唾液中アミラーゼ反応. *健康科学* 32: 71-75, 2010.

(2) Co-author

岸本裕代, 大島秀武, 野藤 悠, 上園慶子, 佐々木 悠, 清原 裕, 熊谷秋三: 日本人地域一般住民における身体活動量の実態:久山町研究 *健康科学* 32:97-102, 2010.

3. 総説

(1) First Author

上園慶子: 性差・閉経・高血圧(上)ー日本における最新の研究動向ー基礎編, 危険因子に関する最新知見 *日本臨床* 67 巻, 増刊号 6, 2009.10 月, pp.636-639.

丸山 徹, 平松伸一: 左房機能と肺静脈血流および心房細動. *呼吸と循環* 57: 929-934, 2009.

丸山 徹: 生体膜とコレステロールおよびスタチン. *膜* 34: 246-248, 2009.

丸山 徹, 中司 元: ワルファリンと GERD. *CLINICIAN* 57: 100-104, 2009.

4. 資料・報告書

(1) First Author

Sasaki H, Kaku Y, Fukudome M, Tomita K, Iino K, Uezono K, Kumagai S.:The Occurrence of Emotional/Mental Stress-Induced Atypical "Ketosis-prone Type 2 Diabetes" in Newly Diagnosed Japanese Subjects- Preliminary observations. *Health Sciences (健康科学)* 32:103-107, 2010.3.

丸山 徹, 永野 純, 眞崎義憲, 入江正洋, 上園慶子: 学生定期健康診断の心電図でみられた呼吸性右脚ブロック. *健康科学* 31: 99-103, 2009.

丸山 徹, 眞崎義憲, 入江正洋, 永野 純, 戸田美紀子, 松園美貴, 中山博子, 田中朋子, 田頭文恵, 工藤淳子, 谷川麻梨子, 岡崎 愛, 福盛英明, 一宮 厚, 上園慶子: 全学教育における AED 教育の取り組み. *キャンパスヘルス* 46: 135-137, 2009.

丸山 徹, 辛島詠士, 樋詰貴登士, 藤原昌彦, 中司 元, 仲村尚崇, 平松伸一, 小田代敬太, 赤司浩一: アミオダロンの肺毒性は Th1/Th2 バランスと関連する. *Prog Med* 29 (suppl. 1): 679-682, 2009.

入江正洋: 大学生との交流を通じて得られるもの, 平成20年度第38回九州地区保健管理研究協議会報告書, p41-42, 2009.

5. 学会・研究会発表

(1) First Author

丸山 徹, 坂口英継: Luo-Rudy モデルにおける交流刺激によるスパイラルカオスの除去. 第24回日本不整脈学会・第26回心電学会合同学術集会, 京都, 2009. 7. 1-3.

丸山 徹, 中司 元, 深田光敬, 藤原昌彦, 安田潮人, 小田代敬太, 赤司浩一: デバイス治療の稀な合併症により心身医学的アプローチを要した3例. 第66回日本循環器心身医学会, 東京, 2009. 12. 5-6.

入江正洋: 心理的ストレス負荷時の唾液中アミラーゼ反応に関する基礎的検討, 第17回日本産業ストレス学会, 福岡, 2009. 11.27.

(2) Co-author

一宮 厚, 松園美貴, 戸田美紀子, 田中朋子, 福盛英明, 眞崎義憲, 永野 純, 入江正洋, 丸山 徹, 上園慶子: 留年(卒業遅延)への健康状態, 生活習慣の影響:健診時アンケートによる検討. 第47回全国大学保健管理研究集会, 札幌, 2009.9.17.

眞崎義憲, 一宮 厚, 丸山 徹, 永野 純, 入江正洋, 福盛英明, 松園美貴, 戸田美紀子, 中山博子, 田中朋子, 谷川麻梨子, 福盛文恵, 工藤淳子, 山口祥子, 上園慶子: 九州大学における新型インフルエンザ啓発活動と対策の問題点について. 第47回全国大学保健管理研究集会, 札幌, 2009.9.17.

工藤淳子, 眞崎義憲, 松園美貴, 戸田美紀子, 一宮 厚, 丸山 徹, 永野 純, 入江正洋, 福盛英明, 中山博子, 田中朋子, 谷川麻梨子, 福盛文恵, 山口祥子, 上園慶子: 生活習慣改善プログラムにおける行動目標とその減量効果. 第47回全国大学保健管理研究集会, 札幌, 2009.9.17.

村谷博美, 笹栗俊之, 土橋卓也, 上園慶子: 夜勤業務と血圧上昇, メタボリック症候群の関係. 第32回日本高血圧学会総会, 大津, 2009.10.2.

鬼木秀幸, 松村 潔, 大坪俊夫, 後藤健一, 福原正代, 三輪宣一. 上園慶子, 飯田三雄: 高血圧外来患者における上腹部症状の現状. 第32回日本高血圧学会総会, 大津, 2009.10. 3.

Ysuda S, Nakamura H, Nakaji G, Fujihara M, Fukata M, Hiramatsu S, Odashiro K, Maruyama T, Akashi K, Tsuji K, Horie M: Holter monitoring of LQT2 caused by Q738X HERG mutation. The 13th Congress of the International Society for Holter and Noninvasive Electrocardiology 横浜市, 2009. 6. 4-6.

仲村尚崇, 藤原昌彦, 中司 元, 深田光敬, 平松伸一, 小田代敬太, 丸山 徹: 高周波カテーテルアブレーションで消失せずβ遮断剤が奏功したアデノシン感受性心房頻拍の一例. 第106回日本循環器学会九州地方会, 北九州市, 2009. 6. 27.

Morikawa Y, Fukumori H: Development of the Focusing Manner Scale (FMS) in Japan(体験過程尊重尺度(the Focusing Manner Scale; FMS)の開発とその特徴について), The 21st International Focusing Conference in Japan, Hyogo, 2009. 5.13.

6. 講演・ワークショップ・シンポジスト・コメンテーター等

上園慶子(座長): 教育講演; ネット汚染とサイバーハラスメント, 宮田正和. 第39回九州地区大学保健管理研究協議会, 熊本市, 2009. 8. 20.

上園慶子(座長): 「健康診断」(一般発表, B-3-1~B-3-3). 第47回全国大学保健管理研究集会, 札幌市, 2009. 9.17.

丸山 徹(パネリスト): 遺伝性QT延長症候群の母子例. 第318福岡循環器懇話会「QT延長症候群の学童における診断と治療」福岡市 2009. 5. 15.

丸山 徹(オーガナイザー): 脂質低下療法時代の生体膜研究. 日本膜学会第31年会 生体膜関連シンポジウム. 東京都 2009. 5. 22.

Maruyama T (Keynote Lecture): Event ECG recording: usefulness in arrhythmia detection and feasibility of intermittent monitoring.

The 13th Congress of the International Society for Holter and Noninvasive Electrocardiology 横浜市 2009. 6. 5.

丸山 徹 (座長): 第 66 回日本循環器心身医学会 一般演題口述発表, 東京, 2009. 12. 5-6.

入江正洋 (座長): 第 17 回日本産業ストレス学会 一般演題口述発表, 福岡, 2009. 11.27.

入江正洋 (シンポジスト): なぜ大学生の薬物乱用が増えているのか? -九州大学学生の薬物乱用に関する意識調査を含めて-, 第 12 回フィジカルヘルス・フォーラム, 福岡, 2010. 3.18.

福盛英明 (助言者): 九州地区メンタルヘルス研究協議, 分科会, 長崎, 2009.10.20-21.

一宮 厚 (司会): 九州地区メンタルヘルス研究協議, 分科会, 長崎, 2009.10.20-21.

福盛英明 (座長): 日本学生相談学会第 27 回大会, 一般演題口述発表, 盛岡, 2009.05.23-25.

7. 論文査読

氏名	雑誌名など	編数
上園 慶子	Hypertension Research	1
	Clinical & Experimental Hypertension	1
	CAMPUS HEALTH	1
丸山 徹	J Physiol Sci	1
	Circulation J	1
	PACE	1
	Pflügers Archiv	1
	日本臨床生理学会雑誌	1
	膜	4
	工業医学期刊	1
入江 正洋	Industrial Health	1
	産業衛生学雑誌	1
	健康支援	1
永野 純	Biopsychosocial Medicine	1
	健康支援	2
	心身医学	2
福盛 英明	学生相談研究	1
眞崎 義憲	健康支援	2

8. その他 (民間商業雑誌, 新聞等)

丸山 徹: とっても健康ランド「不整脈」KBC テレビ, 2009. 3. 7.

丸山 徹: 脂質低下療法時代の生体膜研究 (巻頭言). 膜 34: 245, 2009.

岩切龍一, 丸山 徹, 小林邦久, 山野貴史, 藤本一真: 座談会: 「各診療科で遭遇する胃食道逆流症診療のポイント」 臨床と研究 86: 522-529, 2009.

3. 研究助成金

●政府官公庁研究助成金

研究テーマ：行動科学に基づく大学生の心身の健康問題 に対処しうる独自の体育プログラム開発

研究代表者：橋本公雄

共同研究者：根上 優，飯干 明，長岡良治，山本教人，
杉山佳生，西田順一，磯貝浩久，正野知基，
柿山哲治，内田若希

補助金名：文部科学省研究補助金基盤研究（B）

課題番号：21300222

研究費：624 万円（直接経費 480 万円，間接経費 144
万円）（3 年継続，1 年目）

内 容：

本研究は九州の多領域にまたがる研究者で大学体育授業改善を意図した研究プロジェクトを立ち上げ，第二期の大型科研費（B）の採択に基づくものである。初年度は第一期の研究成果をもとに，さらに各自が新しい授業研究に取り組み，中間報告書を作成した。これは第一期の研究成果を著書として刊行する礎とするものである。行動変容技法を取り込んだ研究が大勢を占めた。

研究テーマ：野外教育の体験活動によるコミュニケーションスキル獲得と日常生活への汎化の検討

研究代表者：柳 敏晴

共同研究者：橋本公雄，西田順一，中島俊介，堤 俊彦，
藤永 博，渡壁史子，平野貴也，松本裕史

補助金名：文部科学省研究補助金基盤研究（B）

課題番号：19300212

研究費：533 万円（直接経費 410 万円，間接経費
123 万円）（3 年継続，3 年目）

分担金：15 万円

内 容：

本研究は，コミュニケーションスキルの獲得と日常生活への汎化という視点から，野外教育における教育プログラム，研究方法，研究成果を再検討し，野外教育の体験学習によるコミュニケーション獲得に関する研究を推進するもので，全国の多領域にまたがる研究者で大型プロ

ジェクト研究を立ち上げ，科研費が採択されたものである。研究の主要な目的は，①野外教育における体験学習プログラムにおける理論的構築の検討，②野外教育におけるコミュニケーション促進プログラムのレビュー，③野外教育における心理的・社会的効果に関する研究成果のレビューである。本年度検討した研究内容は，心理・社会的要因を媒介変数とする運動に伴うメンタルヘルス効果モデルの検証であり，子どもの組織キャンプを通して，コミュニケーションスキルを高めるため，ソーシャルサポートを用いた介入モデルの検討を行った。

研究テーマ：脳由来神経栄養因子の運動生理学的意義に関する研究

研究代表者：熊谷秋三（九州大学健康科学センター）

共同研究者：長野真弓（九州大学ユーザーサイエンス機構），諏訪雅貴（東北工業大学），中野裕史
（中村学園大学），西地令子（聖マリア学院大学）

補助金名：文部科学省科学研究補助金，萌芽研究
（平成 20-21 年度）

課題番号：20650105

研究費：150 万円（2 年継続の最終年度）

内 容：

本研究の目的は，まず身体活動や運動に伴う血清 BDNF の変動の意味を明らかにすることである。次に，脳由来神経栄養因子（BDNF）の慢性投与が骨格筋のミトコンドリア生合成および糖取り込み改善などの代謝特性に影響を与えるのかを調べる。さらに，一過性の BDNF 投与により骨格筋の代謝特性を制御するシグナル伝達因子である AMP-activated protein kinase（AMPK）を活性化するのかについても検討する。このように，動物およびヒトを対象に検討を加えることで，本研究ではヒトを対象とした血清 BDNF の運動生理学的意義を検討することにある。検討課題は以下の 3 つである。〈ヒューマンスタディー〉

研究 1. 身体活動量および体力と血清 BDNF との関連性

に関する研究

研究2. 一過性の運動による血小板からのBDNF放出能の変化

<動物実験>

研究3. BDNFの慢性投与に伴う代謝特性の変化と一過性投与に伴う代謝制御に関わるシグナル伝達経路の解明

研究テーマ: 大学の学生相談充実における「発展段階モデル」の臨床心理学的研究

研究代表者: 福盛英明

共同研究者: 吉武清實, 池田忠義(東北大学), 高野 明(東京大学), 山中淑江(立教大学), 内野 悌司(広島大学), 大島啓利(広島修道大学), 峰松 修(九州産業大学)

補助金名: 文部科学省研究補助金基盤研究(C)

課題番号: 21530692(平成21-23年度)

研究費: 143万円(3年継続の初年度)

内容:

我が国では、平成18年に(独)日本学生支援機構による報告書「大学における学生相談体制の充実方策について—『総合的な学生支援』と『専門的な学生相談』の『連携・協働』—(苫米地レポート)が発表され(申請者は委員として関与)、最も基本的な「最低限の学生相談の質を確保」するための基盤を整備する指針が出された。

しかし我が国では、現在のところ実際に各大学で学生相談を充実させる場合の指標がまだない状況であるため、今後学生相談の充実を行うためのシステム整備や環境、スタッフ数などの発展領域を具体化し、指標化して学生相談の「質の高さを保証」することを考える必要がある。

国外(アメリカ)では、カウンセリング・センターの質の保証に関して、IACS(国際カウンセリングサービス協会)が「大学カウンセリング・センターの認定基準」というガイドラインを作成し認証が行われている。2006年3月現在、全米157の大学とその他の国の5大学が認定を受けており、そのリストを見るとアメリカの主要な大学はこれらの認定基準を満たしており、学生相談の質の高さの保証を行っている段階になっている。

本研究では、これまでの相談機関の充実の様相と過程について、臨床心理実践を踏まえてコミュニティ心理学

の視点から明らかにし、学生相談機関の発展をモデル化し、広く学生相談機関を整備するにあたっての指標や段階を提示することを目的とする。本研究は、学生相談体制の「学生相談システムの質の保証のための基盤整備」に資する研究と位置づけられる。

本研究では、これまでの相談機関の充実の様相と過程について、臨床心理実践を踏まえてコミュニティ心理学の視点から明らかにし、学生相談機関の発展をモデル化し、広く学生相談機関を整備するにあたっての指標や段階を提示することを目的とする。

平成21年度は、学生相談の充実における過去の事例を収集、分析し、学生相談機関が発展する要因や環境などを検討する。また新規に学生相談機関を立ち上げた大学を調査し、事例研究的手法で、学生相談が発展する要因などを分析する。

研究テーマ: アルツハイマー病の危険因子の解明と予防に関する大規模ゲノム疫学研究

研究代表者: 清原 裕(九州大学医学研究院)

共同研究者: 神庭重信(九州大学医学研究院), 岩城 徹(九州大学医学研究院), 中別府雄作(九州大学生体防御医学研究所), 久保充明(独立行政法人理化学研究所), 城田知子(中村学園大学短期大学部食物栄養学科), 熊谷秋三(九州大学健康科学センター)

補助金名: 厚生労働科学研究費補助金(長寿科学総合研究事業)(平成20-24年度)

課題番号: H20-認知症-一般-004

研究費: 5,000万円(5年継続の2年目)

内容:

わが国では、高齢人口が急速に増加し、高齢者の精神疾患として最も頻度の高い認知症が大きな医療・社会問題となっている。認知症の予防対策を講じるには、地域住民中の認知症の実態を把握し、その危険因子を明らかにする必要がある。しかし、現在にところ、ADの危険因子はほとんど明らかにされていない。福岡県久山町では、1985年から65歳以上の高齢住民を対象に、世界で最も精度の高い認知症の疫学調査が進行中である。また、同町では2002年より生活習慣病のゲノム疫学研究が開始され、その基盤が整備されている。本研究では、老年期認知症の疫学調

査において、ADをはじめ認知症の有病率・発症率の時代的变化を明らかにし、危険因子・防御因子を包括的な健診成績の中より明らかにする。そしてゲノムワイド研究およびマイクロアレイ解析によってADの遺伝的危険因子を特定する。さらに、以上の結果を踏まえ、食事・運動の面からの介入試験を行い、その予防手段の確立を図る。本研究によって、地域住民におけるADをはじめとする認知症の有病率・発症率の時代的推移と現状、および高齢者全体における日常生活動作(ADL)および生活の質(QOL)に及ぼす認知症の影響が明らかとなる。また運動、食事性因子、高血圧・糖尿病などの症候因子を含む包括的な健診を基盤とした追跡調査とわが国のトップレベルのゲノム解析によって、認知症の危険因子が解明されると考えられる。その成果は、認知症の予防手段の確立を通して、国民の保健・医療・福祉の向上をもたらし、とくに高齢者医療費の削減につながると期待される。

研究テーマ: 精神的健康度とメタボリックシンドロームとの関連—血清 BDNF と身体活動の役割

研究代表者: 西地令子 (聖マリア学院大学)
 共同研究者: 熊谷秋三 (九州大学健康科学センター)
 補助金名: 文部科学省科学研究補助金, 基盤研究(C)
 (平成 20-22 年度)

課題番号: 20500638

研究費: 70 万円 (3 年継続の 2 年目)

内容:

本研究では、精神的健康度とメタボリックシンドロームの関連性における、血清 BDNF と身体活動の役割を明確にすることによって、BDNF のメカニズムを解明する基盤とするだけでなく、メタボリックシンドロームの進行が精神的健康度によっても影響を明らかにするものである。これらの本研究の知見は、メタボリックシンドロームにおける身体活動の意義を一層明確にするだけでなく、精神的健康への早期アプローチがメタボリックシンドロームの改善に有効であることを実証することによって、その早期改善策をさらに確立する意義をもつと考える。

研究テーマ: 精神機能と生活習慣行動特性およびメタボリックシンドロームとの関連性の検討

研究代表者: 長野真弓 (九州大学ユーザーサイエンス機構)

共同研究者: 熊谷秋三 (九州大学健康科学センター)

補助金名: 文部科学省科学研究補助金, 基盤研究 (C)
 (平成 20-22 年度)

課題番号: 20500598

研究費: 190 万円 (3 年継続の 2 年目)

内容:

本研究では、精神機能や感性(刺激に対する心の働き)が、どのような生活習慣行動特性に関与しているか、また、それがメタボリックシンドローム(MS)の出現と関連しているか否かを明らかにすることを主たる目的とする。具体的には、(1)新規に診断された未治療・未介入の糖尿病患者群と年齢をマッチさせた一般健常者群の間で、精神健康度やストレス対処能力など、精神機能及び個人の感性に関わる指標と生活習慣行動との関連性を比較検討すること、(2)個々の対象者群内における精神機能・感性指標と生活習慣行動との関連性を検討すること(3)MSの出現率が著しく高い糖尿病患者群において、精神健康度や感性、生活習慣行動およびMS出現の関連性を検討することを目的とする。最終的には、(1)~(3)の結果を発展させて、各個人の精神状態や感性に配慮した快適性・効果の高いMSの予防・改善プログラムを構築することを視野に入れている。

研究テーマ: 大規模コホートをを用いた生活習慣病の一次予防のための運動量策定に関する運動疫学研究

研究代表者: 熊谷秋三
 共同研究者: 上園慶子, 眞崎義憲, 長野真弓, 山津幸司,
 内藤義彦, 清原 裕
 補助金名: 平成 21 年度厚生労働科学研究費補助金
 (循環器疾患等生活習慣病対策総合研究事業) (平成 21-23 年度)

課題番号: H21-循環器等(生習) - 一般-008

研究費: 1,600 万円 (3 年継続の初年度)

内容:

1989年に厚生省によって「健康づくりのための運動所要量」が策定された当時、所要量の策定には危険因子と運動の関係を調査した横断的調査による研究成績が用いられた。その後2006年に作成された「新しい健康づくりの

ための運動基準・指針」では、「健康づくりのための身体活動・運動量の基準値」や「健康づくりのための最大酸素摂取量の基準値」作成に、多くの研究が参考にされたが、その多くは欧米人を対象とした疫学研究であり、日本人に関する論文は数本で参考程度に留まっている。かかる背景を踏まえ、九州大学健康科学センターを中心とする運動疫学研究グループは九州大学医学部が主催する「久山町研究」グループとの共同事業として久山コホート、および他の職域コホートを用いた大規模運動疫学研究を計画するに至った。本研究では、久山町の一般地域住民を対象に、身体活動・運動および体力指標としての握力と総死亡率、疾患別死亡率および罹患率との関連性に関する大規模疫学前向き研究を行うと共に、新たに加速度計によって評価された身体活動・運動量と糖尿病やメタボリックシンドローム(MS)の発現に関する2年間の前向き調査に加え、さらに運動による介入研究を施行し、生活習慣病の一次予防に向けた実践研究を展開する。最新の久山町研究の成績で、糖尿病はアルツハイマー病、がん、心疾患の有意な危険因子であることが判明し、糖尿病対策が最も急務であることが実証されている。さらに、職域においては、信頼性の高い身体活動量評価法であるJALSPAQ(質問紙法)に加え加速度計を用い、生活習慣病やその危険因子との関連性に関する2年間の前向き研究の継続と、IT環境などを駆使した運動を中核とした非対面式生活習慣プログラムによる介入効果を併せて検討する。これらの成績より、生活習慣病の一次予防に関する身体活動・運動量の基準値策定を目指すものである。

研究テーマ: 唾液中アミラーゼを指標としたストレス評価とストレスマネジメントへの応用

研究代表者: 入江正洋

共同研究者: 林直亨

補助金名: 文部科学省科学研究費補助金, 基盤研究(C)(平成20-22年度)

課題番号: 20500599

研究費: 169万円(3年継続の2年目)

内容:

事務系企業の275名の社員を対象として、唾液中アミラーゼ濃度と職業性ストレス関連要因に関する横断的調査を実施した。具体的には、午前の健診時にアミラーゼ濃度

の測定を行い、属性や検査日当日の喫煙や朝食の有無、通勤方法、Framingham studyのType A評価尺度、緊張・不安、抑うつ、怒り・敵意、活力、疲労、混乱などの情動を表すProfile of Mood States (POMS)、過去1週間の抑うつ度を示すCenter for Epidemiologic Studies Depression Scale (CES-D)、全般的な精神的健康度を表すGeneral Health Questionnaire (GHQ)の28項目版、NIOSH版職業性ストレス調査票の中のストレス対処行動と社会的支援、厚生労働省の疲労蓄積度チェックリストなどの主な項目からなる自記式質問紙調査結果との関係について検討した。275名のうち、質問紙で有効回答がなされた227名(男性173名、女性54名)を解析対象者とした。

その結果、アミラーゼ濃度とType A行動様式には正の相関が認められたものの、他の質問項目の間には有意な関連はなかった。

研究テーマ: 印刷教材と携帯電話フィードバックシステムをも用いた食生活の改善及び運動指導プログラムの開発に関する研究

研究代表者: 山津幸司

共同研究者: 熊谷秋三, 佐藤武, 小西史子

補助金名: 厚生労働科学研究費補助金(糖尿病戦略研究事業)(平成21-23年度)

研究費: 500万円(3年継続の1年目)

内容:

近年、2型糖尿病やメタボリックシンドロームなどの生活習慣病保有者の増加が国家的な問題となっている。その対策のひとつを提案することを目指し、本研究の目的は、後述する先行研究で確立した非体面行動療法による生活習慣介入の方法論を応用し、2型糖尿病やメタボリックシンドロームの予防に適用させることである。本研究は、平成21年度からの3ヵ年で遂行される。初年度(平成21年度)は、糖尿病やメタボリックシンドロームの予防に有効とされる生活習慣(特に食と身体活動)のエビデンスをレビューし、その結果を受けて紙媒体(小冊子)の教材を作成する。2年目の平成22年度には、初年度作成の教材を用いた生活習慣への介入を実施するとともに、紙媒体のコンテンツと同時に活用する携帯電話による個別フィードバックシステムを構築する。最終年の平成23年度には、個別フィードバックシステムの生活習慣改善

プログラムを用い職域や地域の対象者への介入を試み、より完成度の高いプログラムを構築する。初年度（21年度）には食と身体活動を中心とした生活習慣介入のための印刷教材（小冊子）を作成し、次年度（22年度）に本教材を用いた生活習慣改善プログラムを開発しその有効性を検討する。同時に、本印刷教材の後に用いる携帯電話による個別フィードバックシステムを開発し、最終年度（23年度）に地域または職域にて印刷教材と個別フィードバックシステムを用いた生活習慣改善プログラムの有効性を明らかにする。研究代表者の山津は、これまで情報技術（IT）を活用した非対面生活習慣変容プログラムを開発し、肥満、高血圧および高脂血症での有効性を報告してきた（肥満研究, 2005; 糖尿病, 2005; 行動医学研究, 2006; Behaviour Research and Therapy, 2007）。その独自の点は、問診の解析とそれに基づく個別アドバイスの提供をコンピュータ化による通信指導であった。通信指導とすることで、これまでの対面型指導で対照とするのが難しかった層（有職者など）を拡大でき、またアドバイスの自動化により費用対効果に優れた集団戦略となりうる方法論のひとつを確立した。共同研究者の熊谷らは、九州大学が誇る世界の久山町コホート研究にも参画しており、今後、地域住民の生活習慣改善に向けた取り組みも行うこととなっている。

研究テーマ：計画的行動理論を用いた運動の継続化における運動強度自己選択の有効性

研究代表者：斉藤篤司

共同研究者：橋本公雄

補助金名：科学研究費補助金挑戦的萌芽研究（平成21-23年度）

課題番号：21650162

研究費：330万円（3年継続の1年目）

内容：

健康・体力づくりのための運動には継続が不可欠である。従来の運動処方では効果や効率を重視したため、運動強度や時間、頻度といった量的側面での処方がなされ、継続につながりづらいというデメリットがあった。これに対し、我々は運動者が自ら選択したペースでの運動により、「快」や「満足感」などのポジティブな感情を増加させることを示し、このような運動者の欲求や態度を含

めた運動処方の必要性を呈示してきた。しかし、ポジティブな感情がどのように行動に結びつくかというモデルあるいは理論に欠けていた。そこで、計画的行動理論に基づき、自己選択ペースによる走行が「態度」や「コントロール感」にどう影響するかについて検討する。

また、実験室内で自己選択ペースをどのようにコントロールするからこれまで課題であったが、スピードシンクロトレッドミルという新たな装置の導入により、より実走に近い形で研究を行うことが可能となった。

運動による心理的「快」をもたらす自己選択強度での運動は、「快」を高めることにより、運動に対する好意的な「態度」を形成・強化し、「快」が高まる運動強度を自己選択強度とすることにより、「行動の統制感」が高め、結果として、行動および行動意図を生起する可能性を高める。特に、「行動の統制感」は行動意図を介さず行動を起こすとされており、運動継続に働く可能性が大きい。

研究テーマ：体育授業におけるノンバーバルスキル獲得・向上・発達プロセスの解明

研究代表者：杉山佳生

補助金名：日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（C）（平成21-23年度）

課題番号：21500564

研究費：156万円（直接経費120万円、間接経費36万円）（3年継続の1年目）

内容：

本研究の目的は、学校体育の授業を通じて、非言語的なコミュニケーションスキル（ノンバーバルスキル）がどのように獲得され、向上するのかを、発達的な視点を取り入れて検討することである。初年度は、先行関連情報を整理するとともに、ノンバーバルスキルを測定する尺度の作成に向けた予備調査を行った。

調査では、バドミントンを主課題とする体育授業に参加していた大学生に対し、授業中に実際に利用していたコミュニケーションスキル（伝達スキル、解読スキル）を、具体的に挙げてもらった。それらの記述内容を分析した結果、体育・スポーツ場面では、その状況特有のノンバーバルスキルが用いられ、また、必要とされていることが示された。

研究テーマ: 運動選手が風邪を引きやすい理由の解明

研究代表者: 林 直亨

共同研究者: 永富良一 (東北大学大学院医学研究科)

補助金名: 科学研究費補助金挑戦的萌芽研究 (平成
21-22年度)

課題番号: 21650180

研究費: 280万円 (2年継続の1年目)

内容:

運動選手は風邪を引きやすいと言われるように、いわゆる行動体力の高い運動選手や活動的な学生の上気道感染率はむしろ高い (J カーブ説)。行動体力の高い者が防衛体力に劣るという一見矛盾した状況を免疫で説明することは難しい。むしろ、長期的にはトレーニング実施による防衛体力の向上があったとしても、低温環境下での身体運動という環境への暴露の増加が感染リスクを高めていると予想される。

風邪の罹患が運動選手に多いことが、免疫機能の低下よりもむしろトレーニング時の上気道の血流量低下と関連するとの仮説を検証するために、運動時および運動後に上気道部の血流が低下するかどうかについて検討した。

まず、レーザースペックルフローグラフィを用いて運動中に上気道部および舌部の血流を計測する方法を確立した。その後、健常成人男女11名に、心拍数が100, 120, 140拍/分相当の強度での自転車エルゴメータ運動を20分間行わせ、その際の上気道部および舌部の血流を計測した。その結果、上気道部の血流は100拍/分強度の運動時に増加することはあったが、運動終了10分後までも含めて減少することはなかった。ところが、舌部では120, 140拍/分強度の運動時には血流の低下が観察された。舌部では血流が減少したものの、上気道部については血流が減少しなかったことから、本研究では血流減少と上気道感染との関連は明示されなかった。来年度は高強度運動に伴う変化について記録することとする。

研究テーマ: 関節リウマチの予後に対するストレス・パーソナリティの影響についての縦断研究

研究代表者: 永野 純

補助金名: 科学研究補助金 基盤研究(C)

課題番号: 21590765

研究費: 78万円 (3年継続の1年目)

内容:

精神的ストレス (以下ストレス) が関節リウマチ (以下リウマチ) の病状に影響する可能性が指摘されている。ストレスは、主にストレッサー、パーソナリティ、および社会支援によって規定される。とりわけストレッサーや社会支援に対する応答様式としてのパーソナリティの役割が注目されるが、リウマチ機能予後との関連を検討した研究報告は殆どない。一方、「陰性感情を合理化し、感情的になることを抑圧する」ことを特徴とする”タイプ5”パーソナリティがリウマチ発症の危険因子であるとの報告がある。本研究は、既存のリウマチ患者コホートにおいて必要なデータを追加収集し、タイプ5パーソナリティが病状進行に関連するかどうか、その際ストレッサーや社会支援と交互作用があるかどうかについて縦断的に検討することを主目的とする。

本年度は、約900人のリウマチ患者を対象として2000年に実施されたベースライン調査のデータについて、確認作業を行った。これは、患者が記入した「自記式調査票」と担当医が記入した「臨床データ票」から構成されている。前者には日常生活活動、生活の質、生活習慣 (喫煙、飲酒、運動、睡眠、食物摂取状況など)、および心理社会面 (ライフイベント、パーソナリティ、社会支援など) に関する質問が含まれ、後者には臨床的重症度や機能の指標 (血清CRP値、病期、機能障害、罹患関節、関節外合併症など) や治療薬歴に関する情報が含まれている。また、生物学的製剤 (インフリキシマブ) がリウマチに対して認可される以前、すなわち2002年度末の時点における追跡情報を、上記と同様の「臨床データ票」を用いて収集した。

本研究の主要課題に関するストレス・パーソナリティについての情報は、ベースライン調査における「自記式調査票」(患者が記入) に含まれる「ストレス調査票」に基づいている。ストレス調査票はタイプ5パーソナリティを始めたとした疾病親和性パーソナリティ (ストレス対処様式) を評価するためのものであるが、これらのパーソナリティは主としてGrossarth-Maticsek博士による理論に基づいている。同博士をドイツに訪ね、本研究の主旨ならびに次年度に実施する予定の統計解析に関する意見交換を行った。また、これに先だって、意見交換の際に必要なドイツ語資料の翻訳作業を行った。

●研究助成金

研究テーマ: 大学における効果的なヘルスプロモーションの展開とその評価

研究代表者: 上園慶子

共同研究者: 大柿哲朗, 熊谷秋三, 斎藤篤司, 眞崎義憲,
永野 純, 丸山 徹, 福盛英明

補助金名: 九州大学教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクト研究

課題番号: 20167

研究費: 287万円 (2年継続の2年目)

内容:

メタボリック症候群や生活習慣病の予防や改善を目的に、本学の教職員を対象に毎週1回3カ月間の対面式運動教室を開講し、その前後と教室終了後3カ月目の身体諸変数を測定し、運動教室の効果を検討した。

39名の参加者は脂質代謝や糖代謝に僅かながら有意の改善効果を示した。

●学会財団等からの研究助成金

研究テーマ: 複合型リラクゼーション・ダイエット・システムの商品開発

研究代表者: 熊谷秋三 (九州大学健康科学センター)

共同研究者: セルコム株式会社

補助金名: 共同研究

研究費: 10万円

内容:

本共同研究では、以下の4つの生理作用を同時に実施できる複合型リラクゼーション・ダイエット・システム「ピュアスリム」の商品開発を行うものである。その具体的な商品構成は以下の通りである。①ウォーターベッド型マッサージ器による水圧マッサージ (血行促進) とリラクゼーション作用 (自律神経のバランス調整) ②トッブラー波での低周波通電によるEMS (表層および深部の筋収縮運動) ③遠赤外線照射による温熱作用 (血行促進, 深部温熱作用, 発汗作用) ④カラーセラピーによるリラクゼーション作用 (鎮静作用)。具体的には、個々の商品および本製品の一過性の効能を心理・生理・生化学的な観点から評価するとともに、人を対象とした介入研究を行い、本製品の長期使用に伴う効能評価を行いながら、商品開発を行うものである。

研究テーマ: 加速度計を用いた身体活動量の評価法および臨床応用に関する共同研究

研究代表者: 熊谷秋三

共同研究者: 大島秀武

補助金名: 共同研究 (オムロンヘルスケア株式会社)

研究費: 250万円

内容:

加速度計は、身体活動量の評価法として有効な情報をもたらすことが期待されている運動疫学研究における極めて重要な評価ツールである。しかしながら、本機器が、研究用として開発・市販されているために、その機器で得られた測定結果の個人への情報の有効な返却方法・内容に関する検討は全くされていない。また、加速度計によって得られた多くの身体活動量に関する評価指標の検討の遅れに加え、得られた指標が、いかなるヘルスアウトカム (例えば、肥満度、代謝性疾患、うつ・閉じこもり・認知機能低下などのメンタルヘルスなど) と関連するののかに関しても、学術的にも不明のままである。そこで、今回我々は、加速度計を用いた身体活動量の評価法の検討に加え、さらに臨床応用に関する共同研究を実施することで、計測結果の有効なフィードバック方法を検討する。

研究テーマ: いきいきシニア支援プログラムの構築及び評価に関する研究

研究代表者: 熊谷秋三

共同研究者: なし

補助金名: 受託研究 (株式会社ユニカ)

研究費: 130万円

内容:

社会コミュニティの中で、社会から隔離された生活を送るのではなく、高齢者自身が自発的に自立した生活を目指すことによって、介護予防や認知症予防に寄与し、健康寿命 (自立期間) の延命を目的としたコミュニティの形成に関する調査研究を行う。具体的には、研究題目に即した新規コミュニティの形成及びそのコミュニティで生活している高齢者等のモニター調査研究を行う。

研究テーマ：地域高齢者における認知機能低下・うつ・閉じこもりの予測因子の検討

研究代表者：長野真弓

共同研究者：井出幸二郎，熊谷秋三

補助金名：明治安田こころの健康財団研究助成

研究費：50万円

内容：

わが国の高齢化率は19%を超え、5人に1人が高齢者という超高齢社会となり、要介護高齢者の増加や介護期間の長期化など介護ニーズが増大している。さらに、近い将来には、第1次ベビーブーム世代が高齢者となるため、そのニーズはさらに増えることは確実であるが、増大する社会保障費に歯止めがかかっておらず、介護保険制度そのものの存続が危ぶまれている。厚生労働省は、要介護認定軽度者の大幅な増加や、軽度者のサービス利用が状態改善につながっていないことを問題視し、予防重視型システムへの転換のため、2006年に介護保険制度を全面的に見直した。特に介護予防において強化すべき分野を5つ列挙し対策を講じたが、その中で十分なエビデンスが蓄積されていない認知症、うつ、閉じこもり対策に関しては、市町村が行う地域支援事業に位置づけられた。これまでの介護予防教室や健康教室は、要介護状態を個人の生活習慣の結果としてとらえ、個人の健康行動に焦点を当てる傾向にあったが、認知機能低下、うつ状態、閉じこもりは、個人の要因だけでなく、社会的・環境的な因子も強く関連することが示されつつある。すなわち、社会や環境が、個人の健康行動や心理状態に関与し、その結果個人の健康も多大な影響を受けるわけである。しかし、その詳細な実態やメカニズムには不明な点が多い。我々は、介護予防事業の効果的な運営方法とその評価システムに関する基盤の確立を図るため、自立した地域在住高齢者を対象として認知機能低下、うつ状態、閉じこもりに影響する社会・経済・心理・健康行動（主に体力・身体活動・睡眠）等の因子の実態とそれらの相互関連性を検討することを目的とした前向き研究を実施するものである。なお、本研究課題では、追跡する集団のベースラインのデータを横断的に解析し、上記課題を検討、報告する。

研究テーマ：運動・社会疫学研究の成果に基づく認知症予防プログラムの実践と評価（大宰府研究）

研究代表者：長野真弓

共同研究者：熊谷秋三，一宮 厚，井出幸二郎，淵上恵子

補助金名：日本生命財団 高齢社会 実践的研究助成

研究費：120万円（2年継続の初年度）

内容：

わが国の高齢化率は19%を超え、5人に1人が高齢者という超高齢社会となり、要介護高齢者の増加や介護期間の長期化など介護ニーズが増大している。さらに、近い将来には、第1次ベビーブーム世代が高齢者となるため、そのニーズはさらに増えることは確実であるが、増大する社会保障費に歯止めがかかっておらず、介護保険制度そのものの存続が危ぶまれている。厚生労働省は、要介護認定軽度者の大幅な増加や、軽度者のサービス利用が状態改善につながっていないことを問題視し、予防重視型システムへの転換のため、2006年に介護保険制度を全面的に見直した。特に介護予防において強化すべき5つの分野のうち、十分なエビデンスが蓄積されていない認知症・うつ・閉じこもり対策は、市町村が行う地域支援事業に位置づけられている。これまでの介護予防教室は、主に個人の健康行動の改善を目的として実施されてきた。特に運動は、認知機能の維持改善・うつ症状の軽減・日常生活に必要な身体機能の維持改善・人とのコミュニケーションの活性化など、身体・心理・社会的に好ましい機能を獲得する上で極めて重要な健康行動として期待されているが、実際には、個人になじみのない運動行動を定着させることには困難が多い。さらに、近年の社会疫学研究により、認知症・閉じこもり・うつには生活習慣行動など個人の要因だけでなく、社会経済的因子も強く関連することが示されつつあり、個人の努力のみに頼った健康行動の是正には限界がある。すなわち、社会や環境が、個人の心理状態や健康行動に関与し、その結果個人の健康も多大な影響を受けるわけである。しかしながら、実際には、認知機能・うつ・閉じこもりと、心理社会的因子および運動行動との関連性について検討した研究は皆無である。我々は、前述した状況を踏まえ、福岡県太宰府市在住高齢者における認知症・閉じこもり・うつの実態と、加速度計にて実測した身体活動量および体力、運動器傷害の状

況、心理的特性、社会経済的因子との関連性を明らかにするための2年間の前向き研究を平成21年度より実施し、約2,000名の高齢者のデータを収集する準備を進めている。そこで本申請課題では、上記調査で得られた横断的データから、①認知症の出現および認知機能の低下と強く関連する因子を運動・社会疫学の視点から探索することにより、認知機能テストなど、現場での実施が困難な方法ではなく、それに代替する指標によりスクリーニングするシステムや、心理社会的因子の改善も視野に入れた運動を中心とする認知症予防のための介入プログラムを開発すること、②構築した介入プログラムを、認知症のハイリスク者に6ヶ月間実施し、無作為化比較試験によるプログラムの効果評価を行うこと、の2つを目的とする。最終的には、これらの研究成果に基づき、地域における介護予防事業の効果的な運営方法とその評価システムに関する基盤を構築し、地域社会への貢献を目指すものである。本申請課題における最も独創的な点は、運動・社会疫学の知見から、運動行動が心理的特性や社会的因子に影響を受ける可能性が高いことに着目し、高齢者の心理社会的環境の改善も視野に入れて運動行動の定着を促す適応性の高いプログラムを構築・実施・評価することである。具体的には、運動・社会疫学的な研究手法を用いた実態調査のエビデンスに基づき、現有の人的境資源を生かしたコミュニティを形成し、その中で運動を中心とした身体機能の向上を図る介入プログラムを実施する。運動行動の定着により、認知機能の維持改善・うつ症状の軽減・日常生活に必要な身体機能の維持改善・人とのコミュニケーションの活性化など、身体・心理・社会的に好ましい機能を獲得でき、高齢者の心身の健康に極めて多様な恩恵をもたらすことが期待される。以上のことから、本研究は、独創性・先駆性・開拓性が極めて高いだけでなく現場への適応性も高い実践研究として、地域における効果的な認知症予防のモデルとなりうる。

研究テーマ：運動中の眼底血流量変化を記録する試みー

運動時の視覚調節機構解明への手がかりー

研究代表者：林 直亨

補助金名：財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団

YMFS スポーツチャレンジ助成金

研究費：88万円

内容：

安全確保および競技力向上の観点から、運動時には視力が維持あるいは向上されることが望ましい。糖尿病性網膜症、網膜色素変性や網膜動脈閉塞症などでは血流速度が低下すると同時に、視力が低下する。そして、治療には血流の改善が必要であることから、視力維持のためには網膜および脈絡膜の血流が維持される必要がある。

これまでの視覚研究では、運動と視力の直接的な関係のみがという図式のみ扱われてきた。運動時に変化が予想される瞳孔径（自律神経支配）や眼底血流についての研究が必要である。しかし、これらに関する研究はほぼ皆無である。

本研究では、近年開発されたレーザースペックル血流計を用いて、①眼底血流の増減は、視力の変化と関連するのか、②動的運動時には眼底血流は変化するのか、の2点について検討した。

その結果以下の2点が明らかとなった。①換気の変化に伴って起きた眼底血流の増加は視力の向上を、眼底血流の減少は視力の低下をもたらしたことから、眼底血流は視力と関連する、②動的運動時には運動強度の増加に伴って網膜・脈絡膜の血流は増加する一方、上・下外側動脈の血流は変化しない。これらのことから、動的な運動時には、視力の向上に結びつくような血流の調節がなされている、少なくとも視力を低下させるような血流調節はされていないこと、が明らかとなった。

なお、本助成金では四半期ごとに報告書を求められるが、そのたびに、選考委員長からの返信を頂くことができ、研究を進める上での道標となった。

●受託研究

研究テーマ：筑紫野市なかなかよか健康チャレンジの推進

研究代表者：橋本公雄

補助金名：筑紫野市受託研究費（5年継続の4年目）

研究費：96.4万円

内容：

本受託研究は、平成18年度からスタートしたもので、生活習慣病の一次予防のための事業として、市民の自主的な健康増進および疾病予防を図り、ひいては市民のQOLの向上を通じた将来的な医療費の伸びの抑制を図る

ことを目的とし、「なかなかよか健康チャレンジちくしのウォーキング」の推進を筑紫野市から委託されたものである。「なかなかよか健康チャレンジちくしのウォーキング事業」は、事業参加希望者 153 名を対象に、5 ヶ月間にわたる健康づくり事業である。主な内容は、健康科学センター教員による 6 回の健康講座、ミニ運動チャレンジ、第 4 回万葉の里ウォーキング・イベントであった。これらの事業に関し、市民の活力を導入するため、ボランティア養成を行いつつ事業を遂行した。筑紫野市市議会は平成 21 年 3 月「ウォーキング都市」を宣言し、全市民のウォーキングをとおした健康づくりに着手した。昨年度に比し、事業参加者数、ボランティア数、イベント参加者数の拡大が図られ、成功裡に終了することができた。これらの成果はプログラム評価、プロセス評価、アウトカム評価の視点から評価され、筑紫野市平成 21 年度「なかなかよか健康チャレンジウォーキングの継続化と健康づくり」の報告書にまとめられた。

研究テーマ：食育プログラム（食と運動による健康増進） （平成 18 年～22 年）

研究代表者：大柿哲朗

共同研究者：上園慶子、丸山 徹、眞崎義憲

補助金名：うきは市食育プロジェクト事業

研究費：100 万円（5 年継続の 4 年目、直接経費 769,231 円、間接経費 230,769 円）

内容：

本研究はうきは市の食育プロジェクトの一環としての受託研究で、平成 21 年度は 5 年計画の 4 年目であった。うきは市の代表的な農林業を生計とする山村部と市部の中心部の 2 カ所をモデル地区として、このモデル地区住民に新たに追加募集した住民に対し、平成 21 年 5 月と 11 月に健診（心電図、血液生化学分析、血圧測定など）、形態・体力測定、骨密度や脈波速度などの測定が行われた。これら健診や測定結果をもとに住民説明会や報告書の作成を行い、さらに提言を行った。

研究テーマ：地域における効果的な介護予防対策に関する調査研究（太宰府研究）

研究代表者：熊谷秋三

共同研究者：なし

補助金名：受託研究（太宰府市）（平成 21-23 年度）

研究費：200 万円（3 年継続の初年度）

内容：

わが国の高齢化率は 19% を超え、5 人に 1 人が高齢者という超高齢社会となり、要介護高齢者の増加や介護期間の長期化など介護ニーズが増大している。さらに、近い将来には、第 1 次ベビーブーム世代が高齢者となるため、そのニーズはさらに増えることは確実であるが、増大する社会保障費に歯止めがかかっておらず、介護保険制度そのものの存続が危ぶまれている。厚生労働省は、要介護認定軽度者の大幅な増加や、軽度者のサービス利用が状態改善につながっていないことを問題視し、予防重視型システムへの転換のため、2006 年に介護保険制度を全面的に見直した。特に介護予防において強化すべき分野を 5 つ列挙し対策を講じたが、その中で十分なエビデンスが蓄積されていない認知症、うつ、閉じこもり対策に関しては、市町村が行う地域支援事業に位置づけられた。これまでの介護予防教室や健康教室は、要介護状態を個人の生活習慣の結果としてとらえ、個人の健康行動に焦点を当てる傾向にあったが、認知機能低下、うつ状態、閉じこもりは、個人の要因だけでなく、社会的・環境的な因子も強く関連することが示されつつある。すなわち、社会や環境が、個人の健康行動や心理状態に関与し、その結果個人の健康も多大な影響を受けるわけである。しかし、その詳細な実態やメカニズムには不明な点が多い。本研究の目的は、太宰府市における介護予防事業の効果的な運営方法とその評価システムに関する基盤の確立を図るため、認知機能低下、うつ状態、閉じこもりとそれらに影響する諸因子を前向き研究により検討することである。

4. 国際学術交流活動

氏名	目的地	目的	期間	種別
林 直亨	アメリカ合衆国	American College of Sports Medicine 年次大会への出席	平 21. 5.26～ 5.31	出張
杉山 佳生	モロッコ王国	第 12 回国際スポーツ心理学会 (The 12 th ISSP World Congress of Sport Psychology) への参加	平 21. 6.16～ 6.23	出張
永野 純	ドイツ連邦共和国	「関節リウマチの予後に対するストレス・パーソナリティの影響についての縦断研究」についての打ち合わせのため	平 21. 7.20～ 7. 28	出張
林 直亨	大韓民国	セミナー及び高齢者の運動処方に対するデータ検討のため	平 21. 8.22～ 8.24	出張
斉藤 篤司	ネパール	「ネパール小児の身体活動量および栄養素等摂取量が身体組成の変化に及ぼす影響」の調査	平 21. 9.14～ 9.29	出張
大柿 哲朗	ネパール	「ネパール小児の身体活動量および栄養素等摂取量が身体組成の変化に及ぼす影響」の調査	平 21. 9.18～ 9.27	出張
熊谷 秋三	ブルガリア共和国 ハンガリー共和国	第 2 回脂肪生物学, 脂肪薬理学に関する国際シンポジウムへの出席及び共同研究の打ち合わせ	平 21.10.21～10.29	出張
斉藤 篤司	大韓民国	スキー指導者研修会参加のため	平 21.12.11～12.13	出張
熊谷 秋三	中華人民共和国	The 1 st International Congress on Abominal Obesity に出席	平 22. 1.28～ 1. 31	出張
橋本 公雄	アメリカ合衆国	「行動科学に基づく大学生の心身の健康問題に対処しうる独創的体育プログラム開発」に関する資料収集及び研究打ち合わせのため	平 22. 3.26～ 3.31	出張
永野 純	ドイツ連邦共和国	部局間共同研究協定に基づく研究計画の打ち合わせ	平 22. 3. 9～ 3.15	出張

5. 学会・研究会での役職

氏名	学会名・役職名	氏名	学会名・役職名
健康科学第一部門		健康科学第二部門	
橋本 公雄	日本体育学会 代議員 日本体育学会体育心理学専門 分科会 理事 日本スポーツ心理学会 副会長 九州体育・スポーツ学会 副会長 九州スポーツ心理学会 副会長 九州地区大学体育連合 会長 九州大学大学院人間環境学府 同窓会 副会長	上園 慶子	全国大学保健管理協会 評議員 第45回全国大学保健管理集会 運営委員 日本時間生物学会 評議員 日本健康支援学会 理事 時間循環血圧研究会 世話人 九州地区大学保健管理協議会 幹事
大柿 哲朗	日本運動生理学会 評議員 日本生理人類学会 評議員 日本健康支援学会 常任理事 東アジア運動・スポーツ科学会 理事長 九州体育・スポーツ学会 理事長 日本体育学会九州支部 支部長 日本体育学会 論文賞選考委員	一宮 厚	日本老年精神医学会 評議員 九州精神神経学会 評議員 日本健康支援学会 理事 全国大学メンタルヘルス研 究会 評議員
西村 秀樹	九州体育・スポーツ学会 理事	丸山 徹	日本心電学会 評議員 日本不整脈学会 評議員 日本バイオレオロジー学会 理事 日本生理学会 評議員 日本臨床生理学会 評議員 日本病態生理学会 評議員
熊谷 秋三	日本健康支援学会 理事長 運動疫学研究会 副会長・編集委員長 日本体力医学会 評議員/ プログラム検討 委員会委員 日本肥満学会 評議員 日本運動生理学会 評議員 九州・山口スポーツ医・科学研究会 運営委員 九州体育スポーツ学会 理事	入江 正洋	日本ホルター研究会 常任幹事 米国 NIOSH (The National Institute for Occupational Safety and Health) /APA(American Psychological Association), 日本産業ストレス学会 評議員 日本心身医学会 代議員 九州心理相談員会 会長 第17回日本産業ストレス 学会 運営委員
斉藤 篤司	東アジア運動・スポーツ科学会 理事 日本登山医学会 評議員 九州体育・スポーツ学会 理事	福盛 英明	西日本芸術療法学会 理事 日本学生相談学会 理事 西日本心理劇学会 理事
山本 教人	九州体育・スポーツ学会 理事		
杉山 佳生	九州スポーツ心理学会 理事長 International Journal of Sport and Health Science 編集委員 日本健康支援学会 評議員 スポーツ社会心理学研究会 事務局		
林 直亨	日本生理学会 評議員		
高柳 茂美	日本健康支援学会 理事		

6. その他

1) 健康支援学会

第 11 回日本健康支援学会年次学術集会は、運動疫学研究会との合同学術集会として早稲田大学国際会議場において開催された。大会テーマは「ヘルスプロモーションにおけるエビデンスと支援」であった。学術集会参加者は、150 名程度であった。学術集会では、特別講演 1 題、シンポジウム 2 題、および一般発表演題(口頭・ポスター) 37 演題が発表され、積極的かつ活発な意見交換が行なわれた。さらに、第 17 回ヘルスサイエンスセミナー(市民公開講演会)では、「元気な高齢社会を目指して」をテーマに興味深い内容の講演会が開催された。50 名程度の市民皆様の参加があった。年次学術集会の大会プログラムは以下の通りであった。

なお、平成 22 年度は九州大学の熊谷 秋三教授を会長として、平成 22 年 2 月 18 日-20 日に、第 12 回日本健康支援学会年次学術集会および第 18 回ヘルスサイエンスセミナーが九州大学筑紫キャンパスおよび九州大学医学部(福岡市)で開催される予定である。

大会テーマ: ヘルスプロモーションにおけるエビデンスと支援

大会期日: 平成 22 年 3 月 7 日(日)・8 日(月)

会場: 早稲田大学国際会議場

大会長: 荒尾 孝(早稲田大学)

1. 特別講演

テーマ: 健康日本 21 の評価と今後の健康増進政策

座長: 荒尾 孝(早稲田大学スポーツ科学学術院)

演者: 柳川 洋(自治医科大学名誉教授

地域医療振興協会ヘルスプロモーション研究センター)

2. 教育講演 I

テーマ: ヘルスプロモーションにおけるエビデンスとは—エビデンスたる研究手法としての疫学—

座長: 内藤 義彦(武庫川女子大学生生活環境学部)

演者: 中村 好一(自治医科大学公衆衛生学)

3. シンポジウム I

テーマ: 働き盛り世代における運動習慣の獲得と workplace Health Promotion の可能性

座長: 福田 洋(順天堂大学医学部)

演者: 福田 洋(順天堂大学医学部)

「産業保健を取り巻く現状と本シンポジウムの趣旨」

楠本 真理(三井化学)

「企業の内部スタッフとしての取り組みや苦労話」

前田 直樹(株式会社アスポ)

「企業の外部スタッフとしての取り組みや苦労話」

4. シンポジウム II

テーマ: 「日本人の運動習慣を改善するための新たな集团的戦略を考える」

座長: 種田 行男(中京大学情報理工学部)

演者: 西根 英一(マッキンゼーヘルスケアワールドジャパン)

「運動行動変容のためのメディアキャンペーン」

藤原 直幸(笹川スポーツ財団)

「地域集団戦略としてのチャレンジデーの意義と成果」

森川 高行(名古屋大学環境学研究科)

「都市・交通計画分野からの試み〜健康と環境の改善を目指すモビリティ・マネジメント〜」

5. 教育講演 II

テーマ: ヘルスプロモーションにおける支援とは—成果をあげる手法としての健康支援—

座長: 田中 喜代次(筑波大学院人間総合科学研究科)

演者: 馬場園 明(九州大学大学院医学研究院)

6. ヘルスサイエンスセミナー

テーマ: 元気な高齢社会を目指して

座長: 熊谷 秋三(九州大学健康科学センター)

演者: 神崎 恒一(杏林大学医学部)

「高齢者の活力度からみた社会貢献の可能性」

新開 省二(東京都健康長寿医療センター研究所)

「科学的証拠に基づく元気高齢者の構築」

*共催: 日本健康倶楽部福岡統括支部

(文責: 熊谷 秋三)

2) 健康科学センターで行われている研究会

運動・スポーツ心理学研究会

本研究会は、センター教員、大学院生、修了生および学外の研究者で構成され、研究会には、毎回十数名が参加している。平成 21 年度は、前期と後期の毎週木曜日夜に開催され、原書講読、論文紹介、個人の研究データの紹介を行った。原書は「Cultural Sport Psychology (R. J. Schinke & S. J. Hanrahan, Eds., 2009)」を用い、メンバーで分訳し、内容を紹介した。論文紹介は個々人の研究に関連する論文を紹介し、個人研究データ発表に関しては活発な議論を行った。

(文責: 杉山 佳生)

行動科学研究会

本研究会は開始して 5 年目を迎え、昨年同様の研究活動を行った。健康運動心理学をベースにおき、身体活動・運動の促進や健康づくりのための介入に関する研究を中心に研鑽していくため、基本的に毎週 1 回のペースで火曜日の午後で開催した。参加者は、人間環境学府の大学院生であり、筑紫野市の「なかななかよか健康チャレンジウォーキング事業」の運営・サポートに関する内容を題材に研究会を行った。

(文責: 橋本 公雄)

木曜研究会

本研究会は健康科学センターおよび他大学の教員、学生による運動・スポーツ生理学、生化学、栄養学関連の研究会である。月 1 回、第 2 木曜日に健康科学センターで開催され、各月 2 名の担当者が発表を行う他、会員による著書の執筆、英文作成補助資料の作成、体力測定結果データベースソフトの作成等も行っている。

著書: ヘルス&フィットネス (ナカニシヤ出版)、現代人のエクササイズとからだ (ナカニシヤ出版)

(文責: 斉藤 篤司)

九州心理相談員会

近年、勤労者のメンタルヘルス問題が重要視されているが、厚生労働省は初めてのメンタルヘルスに対する行政措置として、昭和 63 年に「心とからだの健康づくり (Total Health Promotion Plan, THP)」を提唱した。THP では、保健指導、栄養指導、運動指導と並んで、心理相談

が勤労者の健康増進のための重要な柱として位置づけられ、今日まで心理相談員制度の普及が図られてきた。

心理相談員の制度化に伴い、心理相談員の資格の継続および技能向上を目的として心理相談員会が設立され、北海道・東北、関東、中部、関西、中・四国、九州の 6 地域に支部が設置された。心理相談員会九州支部は、平成 4 年の設立以来、本センターに多大な貢献をされた峰松修先生 (九州大学名誉教授) が支部長を務められてきたが、前任地で中部支部副支部長をしていた関係から、平成 15 年 5 月に入江が支部長を引き継いだ (平成 16 年 4 月からは九州心理相談員会に名称を変更し会長職となった)。それに伴い、九州心理相談員会の事務局も、九州大学健康科学センター内に設置した。活動の詳細は九州心理相談員会のホームページ (<http://www18.ocn.ne.jp/~k-shinri/>) に掲載している。

平成 21 年度は、以下のような研修を実施し、心理相談員の技能の向上を図った。

平成 21 年度第 1 回研修会 (平成 21 年 5 月 30 日)

午前: 事例検討会 スーパーバイザー 有村達之氏

(九州大学大学院医学研究院心身医学助教)

午後: 研修会「改正 THP 指針について」

鈴木規子氏 (中央労働災害防止協会九州安全衛生サービスセンターヘルスケアトレーナー)

「パワハラ対策の極意」

倉富史枝氏 (NPO 福岡ジェンダー研究所理事)

平成 21 年度第 2 回研修会 (平成 21 年 7 月 11 日)

午前: 事例検討会 スーパーバイザー 有村達之氏

(九州大学大学院医学研究院心身医学助教)

午後: 研修会「ワーク・ライフ・バランス施策の基礎知識と実践」

犬塚典子氏 (九州大学高等研究機構女性研究者支援室副室長/特任准教授)

平成 21 年度第 3 回研修会 (平成 21 年 10 月 3 日)

午前: 事例検討会 スーパーバイザー 有村達之氏

(九州大学大学院医学研究院心身医学助教)

午後: 研修会「認知行動療法の基本」

有村達之氏 (九州大学大学院医学研究院心身医学助教)

平成 21 年度第 4 回研修会 (平成 21 年 12 月 5 日)

午前: 事例検討会 スーパーバイザー 有村達之氏
(九州大学大学院医学研究院心身医学助教)

午後: 研修会「うつ病に関する最近の話題」

門司 晃氏 (九州大学大学院医学研究院精神病態医学講師)

かどうかを発表された論文を基に検証している。また、授業中に学生自身が自分の摂取エネルギー量を計算できる簡便な栄養計算表を作成している (現在 ver.1.2)。

発表内容は <http://www.geocities.jp/essens7854/>に。

(文責: 齊藤 篤司)

平成 21 年度第 5 回研修会 (平成 22 年 3 月 6-7 日)

集中研修会「傾聴の仕方と工夫—相談面接を豊かにするために—基礎編, 実践編—」

吉良安之氏 (九州大学高等教育開発推進センター教授)

(文責: 入江 正洋)

健康科学第一部門研究 F D

平成 19 年度より部門内の研究交流の一環として、教員個々の研究発表会を部門会議に合わせて実施しており、平成 21 年度は 3 名の教員が発表を行った。最新の個人研究の内容を知ることができ、大変有意義な企画であった。担当者、開催日、テーマは以下に示すとおりである。

林 直亨 (平成 20 年 10 月 14 日)

「運動中の眼底血流量—運動時の視覚調節機構解明への手がかり—」

高柳茂美 (平成 21 年 1 月 13 日)

「ボディートークのからだほぐしが感情に及ぼす影響—大学体育授業における試み—」

熊谷秋三 (平成 21 年 3 月 10 日)

「運動疫学研究の紹介: 久山町研究」

(文責: 杉山 佳生)

ESSENS (Expert Society of Sport and Exercise Nutrition Science)

本研究会は運動・スポーツ栄養学に興味のある研究者と学生による研究会である。月 1 回、第 4 土曜日、15 時-18 時に健康科学センターで開催されている。主な内容は各自の研究発表や論文の紹介である。特に *ergogenic* をキーワードに、様々な栄養素やサプリメントが *ergogenic* なの

社会的活動

教員の学外活動	85
公開講座	89
個人の社会的活動	90
その他	91

社会的活動

1. 教員の学外およびセンター外活動

応嘱非常勤講師等

氏名	応嘱先	応嘱内容
健康科学第一部門		
橋本公雄	熊本大学教育学部 大分大学	体育心理学, スポーツ心理学Ⅱ スポーツ心理学
西村秀樹	長崎大学教育学部 九州工業大学情報工学部 福岡教育大学教育学研究科	体育社会学 運動科学Ⅰ, 健康・スポーツ科学論演習 スポーツ社会学特論, 体育社会学
斉藤篤司	久留米大学	スポーツ実技 健康・スポーツ科学実習 健康科学概論
山本教人	久留米大学 中村学園大学	スポーツ社会学, 地域スポーツ行政論 スポーツ実技, スポーツ科学実習 生涯スポーツ実習 A
杉山佳生	中村学園大学短期大学部	健康とスポーツ
健康科学第二部門		
上園慶子	九州大学留学生センター 九州大学病院	留学生の健康管理 腎・高血圧・脳内科
一宮厚	九州大学医学部	老年精神医学
丸山徹	九州大学医学部保健学科 九州大学医学部医学科 熊本保健科学大学	病態生理学 心臓病学, 循環生理学 循環病態学
福盛英明	九州大学人間環境学府 学校法人 産業医科大学 九州大学歯学部	健康支援学特論 健康管理センター学生相談室 相談員 臨床心理学

応 嘱 委 員

氏 名	委 員 会	委 嘱 機 関 名
健康科学第一部門		
橋 本 公 雄	スポーツ医事・健康体力相談事業に係わるスポーツアドバイザー 筑紫野市健康づくり推進協議会委員 健康運動指導士養成講習会講師 スポーツ医・科学委員会委員 九州大学学生後援会理事・運営委員会委員長 平成20年度日本体育協会スポーツ医・科学専門委員会研究班員 平成20年度日本体育協会スポーツ医・科学専門委員会調査研究協力者会議委員	(財)福岡県スポーツ振興公社 筑紫野市 (財)健康・体力づくり事業財団 (財)福岡県体育協会 九州大学学生後援会 日本体育協会 日本体育協会
大 柿 哲 朗	福岡市健康づくり財団 理事 健康運動指導士養成講習会 講師 日本体育協会スポーツ指導者養成 講師 九州大学学生後援会 顧問	(財)福岡市健康・体力づくり事業財団 (財)健康・体力づくり事業財団 (財)日本体育協会 九州大学学生後援会
西 村 秀 樹	福岡市スポーツ振興審議会委員	福岡市教育委員会
熊 谷 秋 三	健康づくり事業における学術的アドバイザー 高齢者体力づくり支援士(ドクターコース)養成講習会講師 健康運動実践指導士講習会講師 科学研究費委員会専門委員 VIPクラブ西日本幹事 Member of the Scientific Committee in 1 st Asia-Pacific Conference of Health Promotion and Health Education, 2009.	(財)宗像市総合公園管理公社 (財)体力づくり指導協会 (財)日本エアロビックフィットネス協会 文部科学省 International VIP Club the Scientific Committee in 1 st Asia-Pacific Conference of Health Promotion and Health Education, 2009.
斉 藤 篤 司	スポーツ医事・健康体力相談事業に係わるスポーツアドバイザー スポーツ医・科学委員会委員 太宰府市健康づくり推進委員	(財)福岡県スポーツ振興公社 (財)福岡県体育協会 太宰府市
山 本 教 人	普及開発委員会委員 ビジョン推進委員会委員	(財)福岡県体育協会 (財)福岡県体育協会
林 直 亨	春日市健康づくり推進協議会委員 スポーツ医科学委員会委員	春日市 (財)福岡県体育協会
高 柳 茂 美	春日市スポーツ振興審議会委員	春日市教育委員会
健康科学第二部門		
上 園 慶 子	福岡県生涯学習委員会委員 臨床試験審査委員会委員 久山生活習慣病研究所 社員	福岡県 医療法人相生会臨床薬理センター 有限責任中間法人 久山生活習慣病研究所
一 宮 厚	平成20年度メンタルヘルス研究協議会本部運営委員会委員ならびに九州地区実行委員会委員	独立行政法人日本学生支援機構
丸 山 徹	福岡市医師会学校心臓検診部会会員 福岡市東区保健福祉センターヘルスアップスクール講師 NPO日本ICDの会顧問	福岡市 福岡市東区 NPO日本ICD・CRT-Dの会
永 野 純	健康づくり推進協議会委員	大野城市
入 江 正 洋	独立法人労働者健康福祉機構福岡産業保健推進センター基幹相談員 独立法人労働者健康福祉機構メンタルヘルス支援センター相談員 中央労働災害防止協会「事業場の心の健康づくりアドバイス事業」アドバイザー 厚生労働省「心とからだの健康づくり(THP)」九州心理相談員会会長	独立法人労働者健康福祉機構福岡産業保健推進センター 独立法人労働者健康福祉機構メンタルヘルス支援センター 中央労働災害防止協会 中央労働災害防止協会
眞 崎 義 憲	前原市高齢者保健・福祉事業協議会委員(会長)	前原市

講演・指導等の発令

氏名	テーマ	場所	期間
一宮 厚	「産業保健について」平成 21 年度九州大学病院新採用者合同オリエンテーション	福岡市	平 21. 4. 1
一宮 厚	「心の健康管理」平成 21 年度九州大学新採用職員研修	福岡市	平 21. 4. 7
入江 正洋	「医師のためのメンタルヘルス」第 19 回福岡こころのケア研究会（福岡こころのケア研究会主催）	福岡市	平 21. 4. 19
山本 教人	平成 21 年度(財)福岡県体育協会第 1 回普及開発委員会	福岡市	平 21. 5. 11
橋本 公雄	「運動行動変容の理論と実際」財団法人 健康・体力づくり事業財団平成 21 年度健康運動指導士養成講習	福岡市	平 21. 5. 11
丸山 徹	「第 318 回 福岡循環器懇話会」	福岡市	平 21. 5. 15
熊谷 秋三	「楽しい生活は健康から～自分で管理する健康づくり～」西日本新聞健康セミナー	福岡市	平 21. 5. 23
丸山 徹	「心電図」熊本保健科学大学リハビリテーション学科 1 年次カリキュラム「生理学実習」	熊本市	平 21. 5. 25
入江 正洋	「職場のパワー・ハラスメントと対策」平成 21 年度前期労務・人事担当者のための労働衛生管理研修会（福岡産業保健推進センター主催）	福岡市	平 21. 6. 12
丸山 徹	「運動負荷試験マスターダブルツーステップ」平成 21 年度健康運動指導士養成講習会	福岡市	平 21. 6. 14
福盛 英明	「カウンセリングの基礎技能（傾聴）」福岡県教育センター専門研修講座「学校教育相談スペシャリスト養成講座」	福岡県糟屋郡	平 21. 6. 18
入江 正洋	「職場のセクシャル・ハラスメントと対策」平成 21 年度前期労務・人事担当者のための労働衛生管理研修会（福岡産業保健推進センター主催）	福岡市	平 21. 6. 26
入江 正洋	「メンタルヘルスを巡る状況と職場の健康管理について」福岡高等裁判所平成 21 年度医務室技官（看護師）研修（福岡高等裁判所主催）	福岡市	平 21. 6. 26
入江 正洋	「管理者が学ぶメンタルヘルス」平成 21 年度九州大学新任係長・専門職員研修（九州大学主催）	福岡市	平 21. 7. 10
斉藤 篤司	「健康づくり運動の実際」平成 21 年度健康運動指導士養成講習会	福岡市	平 21. 7. 15
大柿 哲朗	「運動行動変容の理論と実際」財団法人 健康・体力づくり事業財団平成 21 年度健康運動指導士養成講習	福岡市	平 21. 7. 16
熊谷 秋三	「運動の心身への恩恵とその機構：生活習慣病・介護予防の観点から」第 33 回岡山スポーツ医科学研究会	岡山市	平 21. 7. 25
林 直亨	国際スポーツ医科学ネットワークフォーラム長野 2009	長野県北佐久郡	平 21. 8. 1-3
大柿 哲朗	平成 21 年度（財）日本体育協会公認コーチ養成講習会共通科目集合講習会	福岡市	平 21. 8. 2
斉藤 篤司	「栄養士のための栄養」平成 21 年度（社）福岡県栄養士集団健康管理栄養士協議会研修会	福岡市	平 21. 8. 4
眞崎 義憲	学校活性化人材育成事業スーパーセミナー合宿	大分県玖珠郡	平 21. 8. 5-7
橋本 公雄	「運動行動変容の理論と実際」平成 21 年度健康運動指導士養成講習会	福岡市	平 21. 8. 9
熊谷 秋三	「健康づくり施策概論」平成 21 年度健康運動指導士養成講習会	福岡市	平 21. 8. 11
入江 正洋	「対人援助職のメンタルヘルス」平成 21 年度文部科学省受託事業「社会人の学び直しニーズ対応教育推進事業：対人援助職を対象とした専門性を高めるためのスキルアッププログラム」（九州大学人間環境学研究院主催）	福岡市	平 21. 8. 22
入江 正洋	「心の健康問題」平成 21 年度職場管理研修（国土交通省九州地方整備局主催）	久留米市	平 21. 8. 25
山本 教人	「平成 21 年度（財）福岡県体育協会第 2 回ビジョン推進委員会」財団法人福岡県体育協会	福岡市	平 21. 8. 28

熊谷 秋三	『リラクゼーション・ダイエット』とは?』ダイエット&ビューティフェア 2009 (セルコム株式会社主催)	東京都江東区	平 21.9.1
山本 教人	平成 21 年度 (財) 福岡県体育協会第 2 回普及開発委員会	福岡市	平 21.9.2
入江 正洋	「リラクセスセミナー～簡単にできるセルフケア～」平成 21 年度福岡県職員研修 (地方職員共済組合主催)	福岡市	平 21.9.3
入江 正洋	「心の病により休業した労働者の職場復帰に向けて」平成 21 年度全国労働衛生週間説明会 (八幡労働基準協会主催)	北九州市	平 21.9.4
丸山 徹	「退職後の健康管理について」西日本プラント工業株式会社ライフプランセミナー	福岡市	平 21.9.18
入江 正洋	「積極的傾聴法」平成 21 年度メンタルヘルスセミナー—職場の風通しをよくするために— (中央労働災害防止協会九州安全衛生サービスセンター主催)	福岡市	平 21.9.29
杉山 佳生	「教職員に求められる人間関係づくり」福岡県教育センター平成 21 年度県立学校等 10 年経験者研修会	福岡県糟屋郡	平 21.9.30
熊谷 秋三	慶應義塾大学病院 眼科学教室 公開セミナー	東京都新宿区	平 21.10.1
一宮 厚	「管理者のためのメンタルヘルス」平成 21 年度九州大学ステップアップ研修	福岡市	平 21.10.7
入江 正洋	「メンタルヘルスケア技法 (交流分析・リラクゼーション技法)」平成 21 年度第 8 回「心とからだの健康づくり (THP)」指導者養成専門研修 (中央労働災害防止協会主催)	広島市	平 21.10.15
大柿 哲朗	平成 21 年度 (財) 日本体育協会公認コーチ養成講習会共通科目集合講習会	福岡市	平 21.10.20
西村 秀樹	「地域社会におけるスポーツの役割」平成 21 年福岡市生涯スポーツ講座	福岡市	平 21.10.24
斉藤 篤司	「熱中症について」平成 21 年度財団法人福岡県体育協会スポーツ医・科学サポート実践事業	大野城市	平 21.10.25
林 直亨	「なぜ運動が必要なのか～運動の効果について～」高齢者元気サポーター養成講座	福岡市	平 21.10.25
入江 正洋	「簡単にできるリラクセス法」平成 21 年度九州大学公開講座 (九州大学健康科学センター主催)	福岡市	平 21.10.31
西村 秀樹	「社会の中のスポーツ」平成 21 年度日本体育協会公認上級指導員養成講習会	福岡市	平 21.11.7
入江 正洋	「傾聴ボランティア講座～よい聴き手になるために～」平成 21 年度西区ボランティア入門講座 (福岡市西区社会福祉協議会主催)	福岡市	平 21.11.7
丸山 徹	「心疾患の診断と治療 (虚血性心疾患他)」福岡県医薬品卸業協会・日本医薬品卸勤務薬剤師会福岡県支部主催平成 21 年度教育研修管理者 (管理薬剤師) 継続研修会	福岡市	平 21.11.11
入江 正洋	「傾聴ボランティア講座～よい聴き手になるために～」平成 21 年度西区ボランティア入門講座 (福岡市西区社会福祉協議会主催)	福岡市	平 21.11.14
熊谷 秋三	「運動による介護予防の可能性」太宰府市情報交換会	太宰府市	平 21.11.17
入江 正洋	「職場で進めるメンタルヘルス対策」労働時間設定会議 (福岡県労働基準協会連合会主催)	糟屋郡	平 21.11.19
入江 正洋	「職場のハラスメントと対策」平成 21 年度後期労務・人事担当者のための労働衛生管理研修会 (福岡産業保健推進センター主催)	福岡市	平 21.11.20
福盛 英明	「初心カウンセラーのためのすぐに役立つ (初期) 面接講座」第 47 回全国学生相談研修会	東京都千代田区	平 21.11.24-26
斉藤 篤司	「スポーツと栄養について」平成 21 年度福岡県スポーツ指導者研修会	福岡市	平 21.11.28
杉山 佳生	「平成 21 年度公認 A 級コーチ養成講習会」財団法人 日本サッカー協会	静岡県御殿場市	平 21.12.1
入江 正洋	「リラクセス健康法」平成 21 年度いきいきライフ教室 (粕屋郡新宮町主催)	糟屋郡	平 21.12.9

入江 正洋	「メンタルヘルスケア技法(交流分析・リラクゼーション技法)」平成 21 年度第 11 回「心とからだの健康づくり (THP)」指導者養成専門研修(中央労働災害防止協会主催)	福岡市	平 21.12.10
一宮 厚	「学生のメンタルヘルス」福岡歯科大学 FD 講演会	福岡市	平 21.12.11
杉山 佳生	「平成 21 年度公認 B 級コーチ養成講習会」財団法人 日本サッカー協会	静岡県御殿場市	平 21.12.14-15
眞崎 義憲	「今から備える、新型インフルエンザ」	福岡市	平 21.12.16
入江 正洋	古くからのうつ病と新しいうつ病～多様なうつ病の理解と職場での対応～平成 21 年度 NHK 福岡放送局精神講話会(NHK 福岡放送局主催)	福岡市	平 21.12.17
熊谷 秋三	「運動生理学」健康運動実践指導者養成講習会(財団法人 健康・体力づくり事業財団主催)	福岡市	平 21.12.18
熊谷 秋三	「元気な高齢期を目指して」福岡市保健衛生大会	福岡市	平 21.12.18
杉山 佳生	「公認 GK-A 級コーチ養成講習会心理学 講義」	静岡県	平 22. 1.13
熊谷 秋三	「健康づくり施策概論」平成 21 年度健康運動指導士養成講習会	広島市	平 22. 1.16
入江 正洋	「ハラスメント防止研修」(独立行政法人国立文化財機構 九州国立博物館主催)	太宰府市	平 22. 1.18
橋本 公雄	「運動行動変容の理論と実践」平成 21 年度健康運動指導士養成講習会	広島市	平 22. 1.20
入江 正洋	「職場のメンタルヘルス対策と人事スタッフの役割」(福岡トヨペット株式会社主催)	福岡市	平 22.1.30
熊谷 秋三	「運動生理学」第 74 回健康運動実践指導者養成講習会(財団法人 健康・体力づくり事業財団主催)	福岡市	平 21. 3.14
眞崎 義憲	「情報の読み方」福岡県立伝習館高等学校「総合的な学習の時間」	柳川市	平 22. 2. 5
丸山 徹	「健康に関する諸問題～免疫力を高めるには」大川市民大学講座	大川市	平 22. 2.13
丸山 徹	「第 63 回福岡不整脈同好会」田辺三菱製薬株式会社主催	福岡市	平 22. 2.20
入江 正洋	「職場におけるメンタルヘルス」平成 21 年度九州大学教室系技術職員研修(九州大学主催)	福岡市	平 22. 3. 4
入江 正洋	「厚生労働省の手引きに基づく休業後の職場復帰支援について」医系学部等メンタルヘルス研修会(九州大学医学部等事務部主催)	福岡市	平 22. 3. 5
山本 教人	「平成 21 年度(財)福岡県体育協会第 3 回ビジョン推進委員会」財団法人福岡県体育協会	福岡市	平 22. 3.12
山本 教人	「平成 21 年度九州地区大学体育連合『体育・スポーツ・健康に関する教育研究会議』	筑紫野市	平 22. 3.14
山本 教人	「平成 21 年度九州地区大学体育協議会総務委員会」	福岡市	平 22. 3.15

2. 公開講座

平成 21 年度の健康科学センター主催の公開講座は、例年通り博多南地域交流センター「さざんびあ博多」(A 班)と前原市健康福祉センター「あごら」(B 班)の二会場を用いて、下記のプログラムで開催された。健康科学センターのほとんどの教員が二グループに分かれて、講義形式や実技形式、あるいはその組み合わせで講座を担当した。参加者は「さざんびあ博多」が 6 名、「あごら」が 13 名で、受講料は A 班 3,000 円、B 班 2,000 円であった。

A 班「健康の科学 2009 健やかに愉しく過ごす方法」
(前原市健康福祉センター・あごら)

10 月 17 日(土)

日本の GNP(元気で長生きポックリと)(大柿)
遊びごころは健康ごころ(杉山)

10 月 31 日(土)

健康な精神、不健康な考え方(一宮)
運動で健やかになれる?(斉藤)

11 月 7 日(土)

運動がからだに良い理由を探る(熊谷)
からだと楽しくおしゃべりしてますか?(高柳)

11 月 14 日(土)

ストレスをパワーに繋げよう(橋本)
心の健康づくりとコミュニケーション(福盛)

11月21日(土)
 笑いの力(西村)
 感染症は防げます!~知識と注射二つのワクチン(眞崎)

B班「今日から始める健康づくり」
 (博多南地域交流センター・さざんびあ博多)

10月17日(土)
 生体リズムと健康(上園)
 ストレスと生活習慣病(永野)

10月24日(土)
 身近な心臓の健康づくり(丸山)
 自宅でできる 簡単健康体操・運動実習(山本教)

10月31日(土)
 メンタルスキルを身につけよう(杉山)
 簡単にできるリラックス法(入江)

参加者が減少傾向にあり、「同じ講師が同じ内容の講演を毎年行っている」との手厳しい指摘もあったため、来年度の公開講座はテーマや日時、場所などを見直して、さらに魅力ある公開講座を開催したいと考えている。

(文責: 入江 正洋)

3. 個人の社会的活動

入江正洋

九州大学では、教育、研究、国際貢献と並んで、社会貢献も教員が果たすべき4つの大きな柱の1つとして位置付けられている。そうした方針に準じて、全ての事業場で取り組むべき2大テーマである過重労働対策とメンタルヘルス対策の両方にこれまで深く関わってきた経験を活かして、種々の重要な社会貢献活動に従事している。

過重労働に関しては、平成13年に示された脳・心臓疾患(いわゆる過労死を含む)の労災認定基準の作成を前任地で分担した。この労災認定基準で明示した時間外労働の多寡等によって過重性が評価され、労災認定の判断がなされているのは周知の通りである。

健康科学センターに赴任した平成15年からは、厚生労働省が昭和63年に「心とからだの健康づくり(Total Health Promotion Plan, THP)」で取り入れた心理相談担当者の技能向上の役割を担う九州心理相談員会の会長(九州大学赴任前は中部心理相談員会の副会長)と、独立行政法人労働者健康福祉機構福岡産業保健推進センターの基幹相談

員(メンタルヘルスとカウンセリング担当)の役割を担っている。

さらに、平成21年度からは、新たに創設された独立行政法人労働者健康福祉機構メンタルヘルス対策支援センターの相談員や中央労働災害防止協会の「事業場の心の健康づくりアドバイス事業」アドバイザーにも就任した。

その他、米国のNIOSH(The National Institute for Occupational Safety and Health) / APA(American Psychological Association)のScientific Committeeや、Journal of Psychosomatic Research, Medical Science Monitor, The European Journal of Psychiatryのreviewerも担当している。詳細な活動については、九州大学健康科学センターのホームページ(<http://www.ihs.kyushu-u.ac.jp/>)の研究者情報欄を参照されたい。

そのような活動が認知・評価されて、学外からの講演(研修)依頼が相次いでいる。九州大学赴任後に講演(研修)を実施した主な機関や組織は、人事院九州事務局、総務省九州管区行政評価局、国土交通省九州地方整備局、中央労働災害防止協会、福岡高等裁判所、福岡労働局、労働基準監督署、労働基準協会、福岡産業保健推進センター、医師会、病院、自治体、教育委員会、一般企業など多岐にわたる。

こうした学外講演(研修)は、平成18年度が23回、平成19年度が22回、平成20年度が26回であったが、平成21年度も22回実施した。その概要は以下の通りである。

4月19日:「医師のためのメンタルヘルス」第19回福岡こころのケア研究会(福岡こころのケア研究会主催)

6月12日:「職場のパワー・ハラスメントと対策」平成21年度前期労務・人事担当者のための労働衛生管理研修会(福岡産業保健推進センター主催)

6月26日:「職場のセクシャル・ハラスメントと対策」平成21年度前期労務・人事担当者のための労働衛生管理研修会(福岡産業保健推進センター主催)

6月26日:「メンタルヘルスを巡る状況と職場の健康管理について」福岡高等裁判所平成21年度医務室技官(看護師)研修(福岡高等裁判所主催)

8月22日:「対人援助職のメンタルヘルス」平成21年度文部科学省受託事業「社会人の学び直しニーズ対応教育推進事業:対人援助職を対象とした専門性を高めるためのスキルアッププログラム」(九州大学人間環境学研究院主催)

8月25日：「心の健康問題」平成21年度職場管理研修（国土交通省九州地方整備局主催）

9月3日：「リラックスセミナー～簡単にできるセルフケア～」平成21年度福岡県職員研修（地方職員共済組合主催）

9月4日：「心の病により休業した労働者の職場復帰に向けて」平成21年度全国労働衛生週間説明会（八幡労働基準協会主催）

9月29日：「積極的傾聴法」平成21年度メンタルヘルスセミナー―職場の風通しをよくするために―（中央労働災害防止協会九州安全衛生サービスセンター主催）

10月15日：「メンタルヘルスケア技法（交流分析・リラクゼーション技法）」平成21年度第8回「心とからだの健康づくり（THP）」指導者養成専門研修（中央労働災害防止協会主催）

10月31日：「簡単にできるリラックス法」平成21年度九州大学公開講座（九州大学健康科学センター主催）

11月7日：「傾聴ボランティア講座～よい聴き手になるために～」平成21年度西区ボランティア入門講座（福岡市西区社会福祉協議会主催）

11月14日：「傾聴ボランティア講座～よい聴き手になるために～」平成21年度西区ボランティア入門講座（福岡市西区社会福祉協議会主催）

11月19日：「職場で進めるメンタルヘルス対策」労働時間設定会議（福岡県労働基準協会連合会主催）

11月20日：「職場のハラスメントと対策」平成21年度後期労務・人事担当者のための労働衛生管理研修会（福岡産業保健推進センター主催）

12月9日：「リラックス健康法」平成21年度いきいきライフ教室（粕屋郡新宮町主催）

12月10日：「メンタルヘルスケア技法（交流分析・リラクゼーション技法）」平成21年度第11回「心とからだの健康づくり（THP）」指導者養成専門研修（中央労働災害防止協会主催）

12月17日：古くからのうつ病と新しいうつ病～多様なうつ病の理解と職場での対応～平成21年度NHK福岡放送局精神講話会（NHK福岡放送局主催）

1月18日：「ハラスメント防止研修」（独立行政法人国立文化財機構九州国立博物館主催）

1月30日：「職場のメンタルヘルス対策と人事スタッフの役割」（福岡トヨペット株式会社主催）

（文責：入江 正洋）

その他

他の健康科学センター教員においても社会貢献のための講演を数多く行っている。国県市町村，教育，医学等の各領域，一般市民向けの講演，研修会に多く従事しているが，これまで以上にこのような役割への期待が増してきている。

（文責：福盛 英明）

4. その他

筑紫地区学内開放

平成21年5月16日（土）午前10時～午後5時に，筑紫地区の学内開放（オープンキャンパス）が行われた。この学内開放は，社会交流や地域交流を目的とした，小中高校生を含む一般の方々に日ごろの研究内容を分かりやすく体験してもらうための企画であると同時に，近隣大学の学部生に対する大学院進学相談の意味合いも有している。健康科学センターでは，「からだの健康」，「たばこ健康」，「マラソン世界記録に挑戦：トレッドミル体験」，「こころの健康を知る」，「『見ること』の不思議」の5つのコーナーを設け，人間環境学府行動システム専攻健康行動学コースの大学院生の方々の協力のもと，実演や体験を重視した企画を行った。最終的には，139名の来訪者があり，アンケート調査では，いずれの企画も大変好評であった。

（文責：斉藤 篤司）

健セの共催・後援等

1. 筑紫野市なかなかよか健康チャレンジ事業

「第5回万葉の里ちくしのウォーキング」

日時：平成22年11月14日（日）8:00～

場所：筑紫野市文化会館 他

主催：筑紫野市健康づくり推進協議会

共催：九州大学健康科学センター

（文責：橋本 公雄）

委員会活動

マスタープラン	93
研究交流	93
人事	93
総務	94
倫理	94
健康教育社会交流	96

委員会活動

マスタープラン（MP）委員会

平成 21 年度のマスタープラン委員会は、センター長大柿教授を委員長として、副センター長一宮教授、第一部門長橋本教授、第二部門長上園教授、総務委員会委員長山本准教授、自己点検評価委員会委員長熊谷教授、研究交流委員会委員長丸山准教授で組織した。

委員会は、8月・9月・2月を除いて年8回開催し、このうち2回は、教員全員が参加する拡大委員会であった。検討内容は、平成20年度から開始された「5年目評価、10年以内組織見直し制度」への対応がほとんどであった。具体的には、4月のMP委員会で、1) 一部門案の検討、2) 平成25年度までの人事シミュレーション、3) 伊都地区の拠点化構想、4) 学生・教職員のメンタルヘルス・ケア業務の検討、5) 精神・心理相談ニーズの急増に対処するための学内外連携体制の検討、6) 健康・スポーツ科学の授業内容とカリキュラム・担当コマ数等の検討、7) メンタルヘルス対策を含めた課外活動の展開、8) 大学院構想の再検討、9) 研究所化の検討、10) 学生の体力等のデータ分析、などとして、それぞれの担当責任者を決めて対応することにした。

「5年目評価、10年以内組織見直し制度」の最終的なヒアリングは平成22年3月31日まで続いたが、何とか対応できた。しかしまだ十分対応できていない点もあり、これは平成22年度の課題ともなった。

(文責: 大柿 哲朗)

研究交流委員会

平成21年度の研究交流会議は3回開催された。研究交流会議では教員間の研究面での情報交換や協力体制の強化を図る会議と、科研費採択率の向上を目指すなどのFD的な会議を行っている。以下に今年度の研究交流会議の内容を示す（発表順）。開催場所はいずれも本センター2階ラウンジで、研究発表はいずれも発表時間20分、質疑応答10分であった。いずれもほとんどの教員が毎回出席しており、オープン参加で人間環境学府の大学院生も広く参加した。

第1回研究交流会議（平成21年9月30日）

永野 純 准教授

「子供の気管支喘息の重症度に影響する母親の養育態

度とストレス」

丸山 徹 准教授（大柿教授がネパール出張の関係で交代）

「イベントレコーダーの最近の進歩:ブルガダ症候群への応用」

西村 秀樹 教授

「高校野球—なぜパフォーマンスにうるさいか—」

第2回研究交流会議（平成21年10月7日）

大柿 哲朗 センター長

「科学研究費補助金の採択率向上に向けた取り組み」

第3回研究交流会議（平成22年3月10日）

染矢 菜美 学術研究員（山本和彦教授の担当の交代）

「消化器系の血流調節における神経性入力役割」

一宮 厚 教授

「学生のメンタルヘルスの現状と今後の対策」

大柿 哲朗 教授

「ネパールにおける20年後の調査」

(文責: 丸山 徹)

人事委員会

平成21年度の人事委員は一宮、橋本、林、永野と大柿センター長であった。

・教員の人事は今年度も発生しなかった。新規の退職者がなかったことと、以前から懸案の健康科学第一部門の教授人事ならびに第二部門のカウンセラーの補充人事はともに、今年度も棚上げのままであったため、人事委員会は開催さえすることのない悲しむべき状況であった。

・第二部門の看護職の人事として、21年4月に、山口祥子保健師が6時間パートとして新規に雇用された。年度末には8時間非常勤の谷川麻梨子保健師と6時間パートの工藤淳子保健師が退職した。また、安全衛生推進室には3年雇用の専任衛生管理者である産業保健師として、20年4月に豊田千寿子保健師と井町好子保健師が新規に雇用された。しかし、井町好子保健師は6月に退職され、後任として10月に荒尾真由美保健師が雇用された。

看護職の退職者は有期雇用の方々であり、2名とも任期満了以前の退職であった。退職の理由としては、個人的理

由や結婚であった。しかし、近年、任期を迎えることなく退職する有期雇用看護職が多いので採用人事が毎年発生するという問題を抱えている。九大のネームバリューのためか有意で人格も優れた方々が応募してくれるので有難いが、雇用条件を変えない限り、よりよい条件の職場へのステップアップのために、向上心が強く能力も高い人々が短期で辞めていくという残念な状況は今後とも続くであろう。

(文責: 一宮 厚)

総務委員会・情報公開委員会

平成 21 年度の委員は、山本 (委員長)、杉山、福盛 (出版)、上園、林 (経理)、眞崎、山本 (情報) がつとめた。

1. 経理・施設関係

(1) 経理関係

平成 21 年度の健康科学センターへの配分額は、59,497,529 円であった。これは前年度費 0.94% の減額であった。

予算の内訳は、筑紫地区共通経費 5,530,608 円 (前年度決算 5,712,090 円)、図書館筑紫分館経費 825,000 円 (同 387,000 円)、光熱水料費 4,012,000 円 (同 3,610,339 円)、電話料 428,000 円 (同 427,129 円)、センター共通経費 7,178,000 円 (同 8,170,774 円)、非常勤職員経費 22,560,017 円 (同 25,230,900 円)、ジャーナル刊行費 720,000 円 (同 719,250 円)、および特別事業費 952,000 円 (同 79,160 円) と見積もった。

以上の残額 11,920,904 円を教員研究費の予算額とした。教員研究費は部門内科研費制度や前年度実績を考慮することで、傾斜配分を行っている。

(文責: 林 直亨)

(2) 施設関係

共通事務経費により、応接室の空調機を交換し、ウェブサイト作成および英文のサイト作成など、情報発信の基盤を整備した。

目的積立金を用いて、肺運動負荷モニタリングシステム、自動身長計付体組成計、長時間心電図記録器、超低温フリーザ修理といった共通性の高い研究・業務に利用するための実験・計測機器を導入・改善した。また、老朽化・故障した空調機の入れ替え、プロジェクタ、冷蔵庫、デジタルテレビなどを、ランニングコストの削減を念頭に購入した。

(文責: 林 直亨)

2. 出版関係

「年報」第 31 巻と、研究紀要「健康科学」第 32 巻を出版した。年報は、前年度の年内刊行を再現できず、年度内ぎりぎりの刊行となってしまった。内容については、例年どおり、教育活動、業務活動、研究活動、社会的活動、委員会活動、資料と、各教員の活動が掲載された。

紀要の「健康科学」第 32 巻には、総説 5 編、原著論文 6 編、研究資料 3 編の合計 14 編が掲載され、前年度の 11 編を上回った。総ページ数も、120 ページを超えた。

年報の刊行早期化対策の検討、および紀要論文の質の更なる向上が、今後の課題である。

(文責: 杉山 佳生)

3. 情報関係

昨年度末に、健康科学センターホームページのデザイン変更を行ったが、利用者からみて使いやすいものへの改善が必要であると認識していた。1 月に入ってから、ホームページの英文化とデザイン更新の予算が措置されることになり、抜本的なホームページ見直しを行うこととして、作成を業者に依頼することとした。約一ヶ月半をかけホームページ内の情報の整理・統合を行い、学生、教職員、一般の方それぞれが得たい情報にすぐにアクセスできるようなホームページになるようにデザインを変更した。それに伴い、それまで明確ではなかったホームページ管理の方法 (内容更新の時期、依頼手順など) について確認を行い、22 年度より実施することとなった。

(文責: 眞崎 義憲)

倫理委員会

平成 21 年度は倫理委員会が 9 回開催された。審査の申請件数は計 23 件であった。倫理委員会のメンバーは、大柿教授、一宮教授、齊藤准教授、林准教授、高柳講師、委員長は丸山、外部委員は医学研究院医療経営・管理学講座教授の馬場園が担当した。下記に倫理委員会開催日、申請者、課題番号、課題名および判定を示す。

第 1 回倫理委員会 (平成 21 年 4 月 2 日)

1) 申請者: 西崎 佳子 (人間環境学府修士過程)

課題番号: IHS-2009-01

課題名: 地域における効果的な介護予防対策に関する調査研究 (太宰府研究)

判定: 条件付き承認 (5 月 8 日取り下げ)

- 2) 申請者：野藤 悠（人間環境学府博士過程）
 課題番号：IHS-2009-02
 課題名：持久的トレーニングによる血中脳由来神経栄養因子（Brain-derived neurotrophic factor; BDNF）水準の変化
 判定：条件付き承認（4月20日に承認）
- 3) 申請者：永野 純
 課題番号：IHS-2009-03
 課題名：肥満学生への健康支援のための調査と介入
 判定：条件付き承認
 第2回倫理委員会（平成21年6月3日）
- 1) 申請者：長野 真弓（学術協力研究員）
 課題番号：IHS-2009-04
 課題名：地域における効果的な介護予防対策に関する調査研究（太宰府研究）
 判定：条件付き承認（7月1日に承認）
- 2) 申請者：上園 慶子
 課題番号：IHS-2009-05
 課題名：特定保健指導基準に対応した肥満職員への健康支援のための調査と生活習慣病予防プログラムによる介入
 判定：条件付き承認
- 3) 申請者：上園 慶子
 課題番号：IHS-2009-06
 課題名：肥満職員への健康支援-リフレッシュホームベース型健康支援プログラムによる介入
 判定：条件付き承認
- 4) 申請者：林 直亨
 課題番号：IHS-2009-07
 課題名：動脈二酸化炭素濃度が末梢血流と視力に与える影響
 判定：条件付き承認（6月24日に承認）
- 5) 申請者：熊谷 秋三
 課題番号：IHS-2009-08
 課題名：職域における非対面身体活動促進プログラムの開発と評価に関する研究（九大職域研究）
- 判定：次回再審査
 第3回倫理委員会（平成21年7月1日）
- 1) 申請者：熊谷 秋三
 課題番号：IHS-2009-08
 課題名：職域における非対面身体活動促進プログラムの開発と評価に関する研究（九大職域研究）
 判定：条件付き承認（7月15日に承認）
- 2) 申請者：松尾 恵理（人間環境学府修士過程）
 課題番号：IHS-2009-09
 課題名：多世代コミュニティタウンにおける効果的な介護予防対策に関する調査研究
 判定：条件付き承認（8月12日に承認）
- 3) 申請者：崎田 正博（理学療法士）
 課題番号：IHS-2009-10
 課題名：立位時の足関節、下腿筋個別振動負荷がヒラメ筋伸張反射に及ぼす影響
 判定：条件付き承認（7月14日に承認）
- 4) 申請者：染矢 菜美（学術研究員）
 課題番号：IHS-2009-11
 課題名：運動が消化器系血流の維持改善に果たす役割
 判定：条件付き承認（7月8日に承認）
- 5) 申請者：齊藤 篤司
 課題番号：IHS-2009-12
 課題名：中高年登山者の身体的・精神的体力
 判定：条件付き承認（7月7日に承認）
- 第4回倫理委員会（平成21年9月1日）
- 1) 申請者：馬場園明（医学研究院医療経営管理学講座）
 課題番号：IHS-2009-13
 課題名：健診データとレセプトデータを用いた糖尿病の疾病管理に関する研究
 判定：条件付き承認（9月10日に承認）
- 2) 申請者：馬場園明（医学研究院医療経営管理学講座）
 課題番号：IHS-2009-14

- 課題名：福岡県における女性の健康意識と乳がんおよび子宮がん検診の受診行動に関する調査分析
判定：条件付き承認（9月10日に承認）
- 3)申請者：齊藤 篤司
課題番号：IHS-2009-15
課題名：登山前日および登山前の水分摂取が中高年登山者の認知機能に及ぼす影響
判定：条件付き承認（9月4日に承認）
- 第5回倫理委員会（平成21年10月7日）
- 1)申請者：藤原 大樹（人間環境学府博士課程）
課題番号：IHS-2009-16
課題名：昼休み時間の身体活動増強を意図した物理的環境及び社会的環境を用いた介入効果について
判定：条件付き承認（10月11日に承認）
- 2)申請者：荒木登茂子(医学研究院医療経営管理学講座)
課題番号：IHS-2009-17
課題名：サークルドロ잉とストレスに関する基礎的研究
判定：条件付き承認（10月21日に承認）
- 第6回倫理委員会（平成21年12月2日）
- 1)申請者：齊藤 篤司
課題番号：IHS-2009-18
課題名：女子ハンドボール選手の試合期の水分摂取状態
判定：条件付き承認
- 2)申請者：齊藤 篤司
課題番号：IHS-2009-19
課題名：自己選択強度でのランニングによる運動継続要因の検討
判定：条件付き承認（12月9日に承認）
- 第7回倫理委員会（平成22年1月6日）
- 申請者：高柳 茂美
課題番号：IHS-2009-20
課題名：ボディトークのからだほぐしがリラックスおよび免疫におよぼす影響-大学体育授業における試み-
判定：条件付き承認（1月13日に承認）
- 第8回倫理委員会（平成22年2月3日）
- 申請者：永野 純
課題番号：IHS-2009-21
課題名：肥満学生への健康支援のための調査と介入
判定：承認
- 第9回倫理委員会（平成22年3月3日）
- 1)申請者：眞崎 義憲
課題番号：IHS-2009-22
課題名：喫煙学生への禁煙支援のための調査と介入
判定：承認
- 2)申請者：熊谷 秋三
課題番号：IHS-2009-23
課題名：疫学的アプローチによる学生のメンタルヘルス支援に向けたシステム構築
判定：条件付き承認
- 近年、臨床研究や疫学研究が倫理委員会の承認を必要とし、学内倫理委員会を持つ組織が限られているために、他学部や学外からの申請が目立つようになってきた。また委員構成に外部委員や女性委員の参画を必要とする動向も見られる。複数の学内倫理委員会の質の維持・向上を図る研修会も病院キャンパスで定期的開催されている。センター内倫理委員会もこのような動向を意識して、研究倫理を複合的な観点で審議し、今後のセンター内外からの申請件数の増加などにも対応していく工夫が求められる。
- (文責：丸山 徹)

健康教育社会交流委員会

健康教育社会交流委員会は、主に健康科学センター単

独で行う秋の公開講座と、筑紫地区の他の研究教育施設と共同で行う春の学内開放（オープンキャンパス）を担当している。

公開講座については、事務の研究協力課を交えて数回協議を行い、企画内容、役割分担、日時と開催場所、具体的な広報活動などに関して検討し、例年通りに博多南地域交流センター「さざんびあ博多」と前原市健康福祉センター「あごら」の二会場で実施することにした。公開講座をより実り多いものにするために、参加者からのアンケート結果についても解析して、次年度の企画内容に

反映させる検討を行っている。以上のように、公開講座は、立案・計画から準備、広報、実施、反省や分析におよぶ健康科学センターの一つの大きな年間作業である。

一方、学内開放は、筑紫地区全体での実行委員会が作成する年間計画に基づいて開催されている。健康科学センターの取り組みに関する企画や設営、実施などは実務担当者間で検討され、庶務連絡会議などで報告されている。

（文責：入江 正洋）

資 料

健康科学第一部門	99
健康科学第二部門	100
年間行事	110

健康科学第一部門

「健康・スポーツ科学科目（演習・実習）」時の障害事故記録（平成21年度）

1) 月別事故発生件数

発生月	4	5	6	7	10	11	12	1	男子	女子	不明
人数	3	3	10	9	3	1	5	2	30	5	1

2) 授業時間別事故発生件数

発生時間	午前		午後	
	1限目	2限目	3限目	4限目
人数	5	17	11	3

3) 事故発生場所

発生場所	グラウンド	テニスコート	体育館	その他	不明
件数	6	3	26	1	0

4) 健康・スポーツ科学演習（必修）コース別事故発生件数

発生コース	踏み台昇降	ウォーキング ジョギング	体力測定	ストレッチ	スポーツ	SAQ トレーニング	筋力測定	筋持久力 トレーニング	不明
件数	1	0	4	0	9	4	3	0	0

5) 身体運動科学実習（選択）種目別事故発生件数

種目	テニス	バドミントン	ソフト	バレー	バスケット	卓球	サッカー	その他	不明
件数	1	6	2	3	1	0	1	1	0

6) 事故発生原因

原因	不注意	不可抗力	他人	習慣性	用具・施設	体調	天候	指導	技術	その他	不明
件数	19	10	1	2	0	0	0	0	3	2	0

7) 傷害種類別件数

種類	捻挫	打撲	摩擦・切傷	突き指	脱臼	骨折	肉離れ	その他	不明
件数	8	1	12	4	1	1	1	8	0

8) 損害部位別件数

部位	手	足	腕	脚	肩	腰部	顔面	その他	不明
件数	8	17	1	4	1	0	3	2	0

9) 傷害の程度

程度	応急手当程度	学外治療施設搬入	不明
件数	32	4	0

健康科学第二部門

1. 定期健康診断に関する基礎資料.

1) 平成21年度 学生定期健康診断 学部学年別 受診者数 受診率

学 部 等	項目	学部学生						修士課程			博士課程					合計
		1年	2年	3年	4年	5年	6年	1年	2年	3年	1年	2年	3年	4年	5年	
文学部 人文科学府	学生数	163	168	159	222			34	52		20	16	63			897
	受診数	163	59	147	168			32	35		14	13	21			652
	受診率	100.0	35.1	92.5	75.7			94.1	67.3		70.0	81.3	33.3			72.7
比較社会文化学府	学生数							50	60		33	29	81			253
	受診数							44	43		18	11	21			137
	受診率							88.0	71.7		54.5	37.9	25.9			54.2
教育学部 人間環境学府	学生数	51	49	54	62			142	151		43	46	87			685
	受診数	51	21	51	43			133	112		32	23	42			508
	受診率	100.0	42.9	94.4	69.4			93.7	74.2		74.4	50.0	48.3			74.2
法学部 法学府	学生数	207	208	202	271			62	50		12	13	26			1,051
	受診数	207	109	143	162			25	22		6	3	11			688
	受診率	100.0	52.4	70.8	59.8			40.3	44.0		50.0	23.1	42.3			65.5
法務学府	学生数							99	101	75						275
	受診数							95	71	47						213
	受診率							96.0	70.3	62.7						77.5
経済学部 経済学府	学生数	249	246	265	346			86	98		19	16	31			1,356
	受診数	248	89	228	222			37	36		8	4	6			878
	受診率	99.6	36.2	86.0	64.2			43.0	36.7		42.1	25.0	19.4			64.8
理学部 理学府	学生数	290	288	298	375			138	156		23	33	77			1,678
	受診数	287	164	214	260			134	131		17	23	55			1,285
	受診率	99.0	56.9	71.8	69.3			97.1	84.0		73.9	69.7	71.4			76.6
数理学府	学生数							60	58		17	12	21			168
	受診数							58	47		13	10	17			145
	受診率							96.7	81.0		76.5	83.3	81.0			86.3
システム生命科学府	学生数										70	76	30	17	24	217
	受診数										70	65	24	13	16	188
	受診率										100.0	85.5	80.0	76.5	66.7	86.6
医学部 医学系学府	学生数	267	257	264	265	104	107	66	69		136	120	122	136		1,913
	受診数	264	163	177	205	74	104	58	47		114	91	83	74		1,454
	受診率	98.9	63.4	67.0	77.4	71.2	97.2	87.9	68.1		83.8	75.8	68.0	54.4		76.0
歯学部 歯学府	学生数	60	60	60	62	59	57				36	48	54	30		526
	受診数	57	24	23	48	59	55				28	33	39	14		380
	受診率	95.0	40.0	38.3	77.4	100.0	96.5				77.8	68.8	72.2	46.7		72.2
薬学部 薬学府	学生数	86	86	87	89			66	72		20	28	30			564
	受診数	85	74	53	71			65	65		14	19	12			458
	受診率	98.8	86.0	60.9	79.8			98.5	90.3		70.0	67.9	40.0			81.2
工学部 工学府	学生数	843	836	852	1,040			419	426		116	107	164			4,803
	受診数	838	438	656	789			401	405		70	55	67			3,719
	受診率	99.4	52.4	77.0	75.9			95.7	95.1		60.3	51.4	40.9			77.4
芸術工学部 芸術工学府	学生数	207	200	212	264			147	165		30	33	64			1,322
	受診数	207	98	188	174			137	119		17	13	17			970
	受診率	100.0	49.0	88.7	65.9			93.2	72.1		56.7	39.4	26.6			73.4
システム情報科学府	学生数							188	143		31	36	60			458
	受診数							178	138		15	18	27			376
	受診率							94.7	96.5		48.4	50.0	45.0			82.1
総合理工学府	学生数							212	219		45	37	47			560
	受診数							203	206		34	29	29			501
	受診率							95.8	94.1		75.6	78.4	61.7			89.5
農学部, 農学研究科 生物資源環境科学府	学生数	243	246	235	272			232	239		57	62	86			1,672
	受診数	243	153	178	201			219	206		37	44	43			1,324
	受診率	100.0	62.2	75.7	73.9			94.4	86.2		64.9	71.0	50.0			79.2
21世紀プログラム	学生数	29	27	28	37											121
	受診数	28	19	23	21											91
	受診率	96.6	70.4	82.1	56.8											75.2
計	学生数	2,695	2,671	2,716	3,305	163	164	2,064	2,059	75	716	712	1,043	183	24	18,590
	受診数	2,678	1,411	2,081	2,364	133	159	1,877	1,683	47	510	454	514	101	16	14,028
	受診率	99.4	52.8	76.6	71.5	81.6	97.0	90.9	81.7	62.7	71.2	63.8	49.3	55.2	66.7	75.5

2) 平成 21 年度 学生定期健康診断精密検査実施状況

胸部 X 線

事 項	間接撮影 受検者	要精密者	未受検者	受検者	区 分				
					D30	D31	D32	R	C1
要観察者*		110	19	91	8	79	2	1	1
胸部 X 線間接撮影	14,098	113	1	112	80	12	3	2	15

*前年度の健康診断の結果, D31 または D32 と判定された者

検尿 (尿蛋白)

学生区分	受検者数	要精密者	未受験者	受検者	区 分				
					C1	C2	D32	D33	R
学部生	2,679	140	16	124	0	1	103	16	4
大学院生 (修士課程)	1,876	69	14	55	2	0	49	4	0
大学院生 (博士課程)等	99	4	0	4	0	0	3	0	1
その他	13	0	—	—	—	—	—	—	—
計	4,667	213	30	183	2	1	155	20	5

検尿 (尿糖)

学生区分	受検者数	要精密者	未受験者	受検者	区 分		
					C1	D32	R
学部生	2,679	14	3	11	0	10	1
大学院生 (修士課程)	1,876	8	1	7	1	6	0
大学院生 (博士課程)等	99	0	—	—	—	—	—
その他	13	0	—	—	—	—	—
計	4,667	22	4	18	1	16	1

血圧

学生区分	受検者数	要精密者	未受験者	受験者	区 分					
					C1	C2	D21	D22	D23	D3
学部生	8,825	345	58	287	3	28	16	9	214	17
大学院生 (修士課程)	3,608	203	24	179	0	20	5	1	149	4
大学院生 (博士課程)等	1,598	91	18	73	0	2	2	1	63	5
その他	74	4	0	4	0	0	0	0	4	0
計	14,105	643	100	543	3	50	23	11	430	26

内科検診

学生区分	内科問診	診察受検	証明書記載要	後日面談者	区 分		
					C1	C2	D3
学部生	8,826	2,864	30	2	0	1	1
大学院生 (修士課程)	3,608	1,931	23	7	1	3	3
大学院生 (博士課程)等	1,597	166	8	2	0	1	1
その他	74	18	0	0	0	0	0
計	14,105	4,979	61	11	1	5	5

心電図

学生区分	受検者数	要面談者	証明書発行 時要面談者	後日要面 談者	区 分		
					C2	D3	R
学部生	2,717	48	1	43	1	28	14
大学院生 (修士課程)	698	9	0	6	2	4	0
大学院生 (博士課程)等	61	2	0	2	0	1	1
その他	12	0	—	—	—	—	—
計	3,488	59	1	51	3	33	15

別表検査判定基準（学校保健法施行規則第7条第2項の別表第1）

区 分	内 容	
生活規正の面	A（要休業）	授業を休む必要があるもの
	B（要軽業）	授業に制限を加える必要があるもの
	C（要注意）	授業をほぼ正常に行ってよいもの
	D（健 康）	全く平常の生活でよいもの
医 療 の 面	1（要医療）	医師による直接の医療行為を必要とするもの
	2（要観察）	医師による直接の医療行為を必要としないが、定期的に医師の観察指導を必要とするもの
	3（健 康）	医師による直接、間接の医療行為を全く必要としないもの
要観察の頻度	1	年1回観察を要する
	2	年2回観察を要する
	3	年3回以上の観察を要する

3) 胸部疾患学生健康診断実施状況（平成21年度）

胸部 X 線間接撮影異常者

	受検者	異常者	判定内訳		
			E判定	A判定	B判定
学部生	8,786	63	3	57	3
大学院生（修士課程）	3,575	35	0	34	1
大学院生（博士課程）	1,567	12	0	12	0
その他	170	3	0	2	1
計	14,098	113	3	105	5

要観察対象者

	要観察者
学部学生	53
大学院生（修士課程）	28
大学院生（博士課程）	25
その他	4
計	110

直接撮影実施数

	受検者	直接撮影実施時期	
		5月	10月
要観察者・その他	89	83	6
間接撮影異常者*	97	97	0
秋季留学生健康診断	284	0	284
計	470	180	290

*間接撮影A判定の全員、およびB判定のうち医師が必要と認めた者

胸部 X 線間接撮影判定基準		
区 分	内 容	
要精査	E	緊急を要するもの
	A	肺野の異常（直接撮影を必要とするもの）
心精査	B	心血管陰影の異常
精査不要	C	上記以外の異常（側弯など）

2. 日常業務に関する基礎資料

1) 保健施設利用者数（平成 21 年度）

月別	地区別	受付総数	診察	与薬	病院紹介	健康相談	休養室利用
4 月	センター	71	10	11	0	0	0
	箱崎地区分室	406	46	15	15	0	3
	病院地区分室	157	46	5	4	0	3
	大橋地区分室	39	6	3	4	0	2
	伊都地区west	309	32	36	7	2	3
	伊都地区センター	772	66	37	22	20	8
	計	1,754	206	107	52	22	19
5 月	センター	143	17	12	3	2	2
	箱崎地区分室	614	98	49	22	1	6
	病院地区分室	280	73	14	26	3	3
	大橋地区分室	79	18	15	9	1	4
	伊都地区west	840	61	99	29	23	14
	伊都地区センター	537	131	67	27	38	29
	計	2,493	398	256	116	68	58
6 月	センター	101	24	15	4	2	1
	箱崎地区分室	605	125	68	35	7	13
	病院地区分室	618	91	17	24	1	10
	大橋地区分室	58	27	21	8	4	7
	伊都地区west	564	69	91	27	17	11
	伊都地区センター	603	112	124	45	10	31
	計	2,549	448	336	143	41	73
7 月	センター	123	14	18	2	2	7
	箱崎地区分室	759	106	47	72	18	17
	病院地区分室	254	72	7	13	4	2
	大橋地区分室	53	29	21	4	0	3
	伊都地区west	554	55	84	23	9	14
	伊都地区センター	445	91	98	27	16	38
	計	2,188	367	275	141	49	81
8 月	センター	63	8	8	4	1	3
	箱崎地区分室	407	45	20	29	31	10
	病院地区分室	156	54	0	8	4	5
	大橋地区分室	26	12	2	0	0	0
	伊都地区west	355	40	45	15	28	22
	伊都地区センター	121	29	23	4	25	1
	計	1,128	188	98	60	89	41
9 月	センター	78	13	12	2	8	1
	箱崎地区分室	381	64	32	37	2	5
	病院地区分室	138	57	7	14	2	2
	大橋地区分室	21	4	1	0	5	0
	伊都地区west	389	57	76	21	22	14
	伊都地区センター	126	26	17	9	11	1
	計	1,133	221	145	83	50	23
10 月	センター	65	15	15	1	5	1
	箱崎地区分室	543	91	57	75	19	9
	病院地区分室	152	55	8	17	9	6
	大橋地区分室	52	28	28	2	6	1
	伊都地区west	571	91	106	38	57	23
	伊都地区センター	335	93	72	33	17	18
	計	1,718	373	286	166	113	58

11月	センター	63	13	10	4	8	1
	箱崎地区分室	495	118	73	47	5	7
	病院地区分室	131	65	7	12	7	3
	大橋地区分室	34	14	15	0	4	0
	伊都地区West	523	135	110	27	38	16
	伊都地区センター	342	59	68	41	28	13
	計	1,588	404	283	131	90	40
12月	センター	57	11	10	0	7	0
	箱崎地区分室	403	99	55	47	15	7
	病院地区分室	206	33	5	9	4	2
	大橋地区分室	28	9	10	1	3	2
	伊都地区West	414	83	101	22	33	15
	伊都地区センター	258	54	52	21	16	11
	計	1,366	289	233	100	78	37
1月	センター	57	13	18	4	2	0
	箱崎地区分室	428	120	70	45	12	12
	病院地区分室	133	60	4	12	1	4
	大橋地区分室	33	14	13	4	4	0
	伊都地区West	366	71	98	15	22	20
	伊都地区センター	219	46	40	19	9	15
	計	1,236	324	243	99	50	51
2月	センター	67	15	19	6	6	1
	箱崎地区分室	347	93	44	27	4	11
	病院地区分室	160	69	12	11	0	2
	大橋地区分室	41	16	7	0	4	1
	伊都地区West	338	56	55	18	25	17
	伊都地区センター	102	24	15	9	4	5
	計	1,055	273	152	71	43	37
3月	センター	33	7	5	0	3	1
	箱崎地区分室	263	60	20	20	2	2
	病院地区分室	98	47	1	7	0	1
	大橋地区分室	30	8	1	1	4	0
	伊都地区West	321	40	39	22	14	10
	伊都地区センター	95	19	9	1	0	3
	計	840	181	75	51	23	17
計	センター	921	160	153	30	46	18
	箱崎地区分室	5,651	1,065	550	471	116	102
	病院地区分室	2,483	722	87	157	35	43
	大橋地区分室	494	185	137	33	35	20
	伊都地区West	5,544	790	940	264	290	179
	伊都地区センター	3,955	750	622	258	194	173
	計	19,048	3,672	2,489	1,213	716	535

2) 地区別保健施設利用者数（対学生数の率）

地区	総来室数*	学生来室数	学生一人あたり 年間来室回数†
伊都センター	3,955	3,373	0.73
箱崎	5,651	4,031	0.61
病院	2,483	1,016	0.42
筑紫	921	645	1.09
大橋	494	406	0.38
伊都ウエスト	5,544	4,156	1.06
計	19,048	13,627	0.71

*総来室数には職員等を含む

†前期と後期の学生数の違いを考慮して算出

3) 学部別保健施設利用者数

課程	学部・学府	学生来室数	学生数*	学生一人あたり 年間来室回数
学部	文学部	376	754	0.50
	教育学部	113	236	0.48
	法学部	427	919	0.46
	経済学部	410	1,136	0.36
	理学部	789	1,254	0.63
	医学部	472	1,328	0.36
	歯学部	215	358	0.60
	薬学部	160	349	0.46
	工学部	2383	3,589	0.66
	農学部	617	1,005	0.61
	芸術工学部	431	901	0.48
	21世紀プログラム	184	121	1.52
大学院	人文科学府	137	190	0.72
	比較社会文化学府	144	303	0.48
	人間環境学府	258	516	0.50
	法学府	125	170	0.74
	経済学府	88	256	0.34
	理学府	463	430	1.08
	数理学府	178	171	1.04
	医学系学府	245	661	0.37
	薬学府	90	225	0.40
	工学府	2456	1,260	1.95
	システム情報科学府	583	487	1.20
	総合理工学府	648	564	1.15
	生物資源環境科学府	629	686	0.92
	芸術工学府	174	506	0.34
	法務学府	157	275	0.57
	統合新領域学府	90	71	1.27
	歯学府	94	176	0.53
システム生命科学府	365	223	1.64	
	留学生センター他	126	113	1.12
計		13,627	19,233	0.71

*学生数は平成21年5月1日現在（研究生等を含む）

4) 健康診断証明書申込者及び発行者（平成21年度）

① 総括表

月別	文学	教育	法学	経済	理学	医学	歯学	薬学	工学	農学	21世	人環	シ情	生環	比文	数理	総理工	シ生	芸工	法務	統合新	留セ	計	
4月	発行数	1	1	3	2	9	6	1	2	17	5	3	1	1	2	0	0	10	0	2	0	0	0	66
5月	発行数	137	31	102	124	181	360	35	73	982	66	8	234	200	98	23	39	350	60	166	13	3	3	3,283
6月	発行数	113	16	73	62	125	166	121	24	187	43	16	67	51	67	8	13	83	19	70	1	0	3	1,329
7月	発行数	32	10	29	48	103	225	25	21	140	18	10	23	25	24	9	12	42	24	46	3	3	6	878
8月	発行数	14	12	13	51	88	96	8	25	58	8	3	8	14	29	4	2	12	11	21	3	7	1	488
9月	発行数	13	2	13	47	50	111	4	9	43	6	3	11	24	24	7	12	25	8	35	2	3	0	452
10月	発行数	19	5	10	18	41	124	10	18	43	17	3	17	23	12	9	5	7	8	43	1	4	2	439
11月	発行数	9	0	5	5	2	57	4	16	28	3	3	9	17	8	8	0	6	24	9	1	4	0	218
12月	発行数	5	3	6	15	16	62	2	34	49	1	0	20	5	22	1	2	6	46	8	2	1	1	307
1月	発行数	6	4	8	23	34	33	0	45	87	6	0	43	6	102	11	10	23	4	35	0	1	1	482
2月	発行数	37	10	35	102	102	37	45	6	150	2	1	70	4	109	3	7	52	21	86	1	11	1	892
3月	発行数	78	18	46	277	192	73	58	22	365	21	7	35	59	136	8	13	219	37	161	2	19	0	1,846
計	発行数	464	112	343	774	943	1,350	313	295	2,149	196	57	533	429	633	91	115	836	262	682	29	56	18	10,680

② 証明書自動発行機による健康診断証明書発行数

月別	文学	教育	法学	経済	理学	医学	歯学	薬学	工学	農学	21世	人環	シ情	生環	比文	数理	総理工	医短	芸工	法務	新統合	留セ	計	
4月	発行数	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
5月	発行数	125	31	94	112	143	292	35	66	597	52	3	182	143	85	15	32	246	27	114	6	3	0	2,403
6月	発行数	106	16	72	57	119	153	111	22	172	43	16	64	44	60	5	13	77	19	67	1	0	0	1,237
7月	発行数	31	10	29	44	97	200	22	18	130	14	10	17	20	24	4	12	38	24	46	3	3	0	796
8月	発行数	14	11	13	46	86	83	6	25	55	7	2	8	14	28	4	2	11	11	21	3	6	0	456
9月	発行数	13	2	13	45	47	105	3	9	41	6	3	8	22	23	7	11	23	8	32	2	3	0	426
10月	発行数	19	2	10	18	35	115	10	16	38	16	3	13	21	11	8	5	7	8	43	1	3	0	402
11月	発行数	9	0	5	3	2	55	3	15	24	3	1	6	16	8	8	0	6	19	7	1	4	0	195
12月	発行数	5	0	5	8	16	61	2	34	45	1	0	17	5	22	0	2	6	42	8	2	1	0	282
1月	発行数	6	3	8	22	31	32	0	45	80	6	0	42	5	97	10	10	15	4	33	0	1	0	450
2月	発行数	36	10	34	92	81	37	45	6	147	2	1	69	4	105	3	7	51	16	86	1	8	0	841
3月	発行数	72	18	46	277	183	72	52	22	308	19	7	35	53	136	8	12	191	37	160	2	19	0	1,729
計	発行数	436	103	329	724	840	1,205	289	278	1,637	169	46	461	347	599	72	106	671	215	617	22	51	0	9,217

③ 各分室毎の申込数及び発行数

月別		文学	教育	法学	経済	理学	医学	歯学	薬学	工学	農学	21世	人環	シ情	生環	比文	数理	総理工	シ生	芸工	法務	新統合	留セ	計
センター	申込計	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	97	0	0	0	0	0	98
	発行計	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	154	0	0	0	0	0	155
箱崎	申込計	17	4	7	27	51	0	0	0	3	23	6	62	0	16	6	8	10	7	1	3	2	11	264
	発行計	27	8	10	41	101	0	0	0	5	27	7	72	0	33	8	8	11	17	1	7	2	18	403
病院	申込計	0	0	0	0	0	98	21	14	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	133
	発行計	0	0	0	0	0	139	24	15	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	178
大橋	申込計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	35	0	0	0	35
	発行計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	63	0	0	0	63
伊都W	申込計	0	0	0	1	1	0	0	0	393	0	0	0	71	1	0	0	0	22	1	0	1	0	491
	発行計	0	0	0	5	1	0	0	0	488	0	0	0	81	1	0	0	0	30	1	0	3	0	610
伊都C	申込計	1	1	4	3	1	6	0	2	18	0	3	0	1	0	8	1	0	0	1	0	0	0	50
	発行計	1	1	4	4	1	6	0	2	18	0	4	0	1	0	11	1	0	0	0	0	0	0	54
計	申込計	18	5	11	31	53	104	21	16	415	23	9	62	72	17	14	9	107	29	38	3	3	11	1,071
	発行計	28	9	14	50	103	145	24	17	512	27	11	72	82	34	19	9	165	47	65	7	5	18	1,463

3. 学生相談・精神保健相談関係統計

1) 健康支援パッケージによる面接の結果（平成 21 年度）

精神・心理系

健康支援パッケージの結果					面接結果							
入学者数	回収数	回収率 (%)	面接該当者数	面接該当率 (%)	受面接数	受面接率 (%)	異常なし	性格問題群	神経症問題群	精神病群	身体問題・他	
2,695	2,662	98.8%	88	3.3%	80	90.9%	55	3	15	2	6	

身体系

健康支援パッケージの結果					面接結果							
入学者数	回収数	回収率 (%)	面接該当者数	面接該当率 (%)	受面接数	受面接率 (%)	異常なし	障害問題群	身体疾患群	精神疾患群	家族の問題・他	
2,695	2,662	98.8%	19	0.7%	4	21.1%	2	0	1	1	0	

2) 学生相談・精神保健相談（平成 21 年度）

		経済	教育	文	法	工	理	農	芸工	21C	経院	人環	人文	法院	工院	理院	生資	総理	比文	シ情	数理	シ生	法科	統領	医	歯	薬	留七他	卒業生	職員	その他	計
学生相談・精神保健相談	利用回数	38	13	74	54	188	131	75	95	77	0	63	28	43	147	134	106	93	13	104	49	34	53	0	85	63	30	2	27	870	92	2781
	利用者数	6	5	11	9	30	19	13	28	2	0	7	4	4	17	17	16	10	1	8	3	8	8	0	14	6	10	2	8	190	39	495
サイコロトリー・ロビー	利用回数	50	0	1	7	0	14	76	0	0	0	0	1	0	0	88	8	13	0	37	27	0	0	0	0	0	0	0	188	0	89	599
	利用者数	2	0	1	2	0	2	3	0	0	0	0	1	0	0	1	1	1	0	2	2	0	0	0	0	0	0	0	13	0	2	33

3) 学生相談・精神保健相談ケースの診断分類と治療進度（平成 21 年度）

* 教職員自身および教職員に関する相談は除く（学生に関する相談は含む）

精神保健相談 164 名

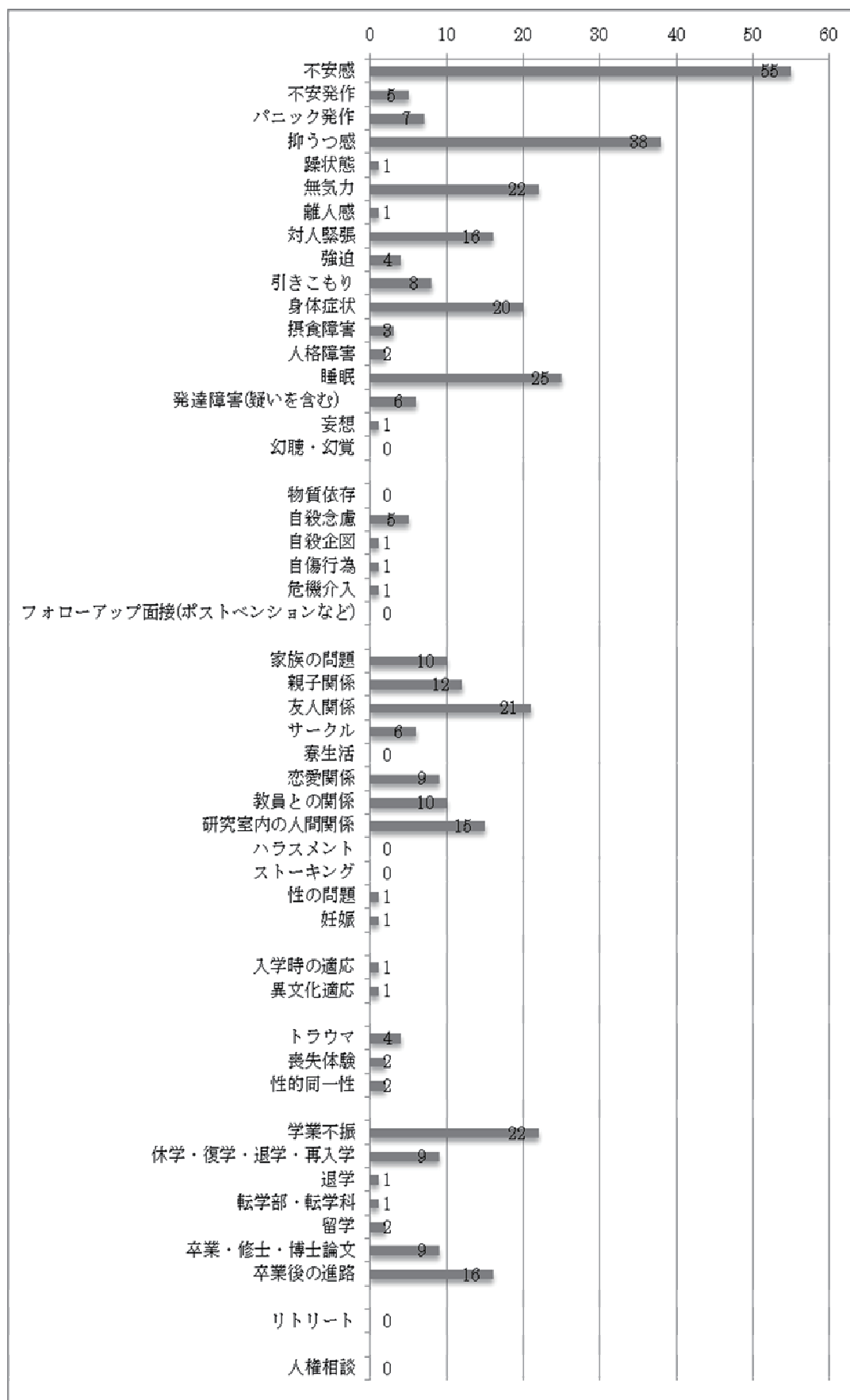
	終了	委託	継続	中断	計 (%)
1. ガイダンス	3	0	1	0	4 (2.4)
2. 情緒不安	21	3	18	16	58 (35.4)
3. ノイローゼ	6	6	10	12	34 (20.7)
4. サイコパス群	2	0	1	0	3 (1.8)
5. 精神病群	1	1	7	1	10 (6.1)
6. その他	16	5	5	3	29 (17.7)
7. 関係者の相談	12	0	12	2	26 (15.9)
計 (%)	61 (37.2)	15 (9.2)	54 (32.9)	34 (20.7)	164 (100.0)

心理健康相談 191 名

	終了	委託	継続	中断	計 (%)
1. ガイダンス	9	0	5	1	15 (7.8)
2. 情緒不安	31	2	30	17	80 (41.9)
3. ノイローゼ	14	2	10	6	32 (16.8)
4. サイコパス群	1	0	0	0	1 (0.5)
5. 精神病群	4	2	3	1	10 (5.2)
6. その他	4	0	6	2	12 (6.3)
7. 関係者の相談	25	0	15	1	41 (21.5)
計 (%)	88 (46.1)	6 (3.1)	69 (36.1)	28 (14.7)	191 (100.0)

4) 平成 21 年度 新規来談心理相談内容副次分類 (ICU の分類に準じる)

(カウンセラーによるもの) (複数チェック有) (来談から現在に至るまでの相談内容分析)



年間行事（平成 21 年度）

月	行 事	内 容	備 考
4 月	学生定期健康診断の実施 新入学生向け健康教育の開講 新入留学生向け健康教育の開講 健康診断後の精密検査の実施 肥満学生に対する栄養生活指導の実施 広報誌 CAMPUS HEALTH の発行 No.31 入学式	身体計測・検尿・胸部X線 内科・血圧・心電図 医師派遣	受診者：8,826 名 （院込み 14,028 名） 受診率：新入生 99.4% 4 年生 71.5% 全学年 75.4% （院込み 75.5%）
5 月	健康診断後の精密検査の実施 胸部X線精密検診の実施 健康支援パッケージに基づく新入生面接の実施	定期健康診断で精密を要すると判定された学生、胸部疾患の既往歴を有する学生対象健康（心理・精神・身体）支援のためのスクリーニング面接	各地区分室で実施 受診者：185 名 来室者：84 名
6 月	健康診断後の精密検査の実施 大学評価・学位授与機構試験	保健師派遣	
7 月	保健管理専門委員会開催 歯学系 C B T 試験への協力 来談学生の親のためのメンタルヘルス講習会		
8 月	九州大学説明会への協力 工学府・システム情報科学府入学試験 総合理工学府入学試験 芸術工学府入学試験 九州地区大学保健管理研究協議会	医師・保健師派遣 医師派遣 医師派遣	熊本市
9 月	保健管理専門委員会(書面会議) 全国大学保健管理研究集会 国立大学法人等保健管理施設協議会総会		保健管理専門委員会(書面会議) 全国大学保健管理研究集会 国立大学法人等保健管理施設協議会総会
10 月	秋季新入外国人留学生健康診断 新入留学生向け健康教育 九州地区メンタルヘルス研究協議会 広報誌 CAMPUS HEALTH の発行 No.32		秋季新入外国人留学生健康診断 新入留学生向け健康教育 九州地区メンタルヘルス研究協議会 広報誌 CAMPUS HEALTH の発行 No.32
11 月	工学府駅伝大会参加者の健康診断 留学生健康診断後の精密検査 九州大学ホームカミングディ AO 選抜（21 世紀プログラム）	保健師派遣 医師・保健師派遣	受診者：39 名
12 月	AO 選抜（教育学部・薬学部）第 2 次選抜 組み換え DNA 実験従事者等に係る健康診断	医師・保健師派遣	内科 7 名, 問診 1,288 名
1 月	大学入試センター試験 大学入試センター試験追試験	医師・保健師派遣 医師・保健師派遣	
2 月	保健管理専門委員会（書面会議） 来談学生の親のためのメンタルヘルス講習会 個別学力検査（前期）への協力		
3 月	個別学力検査（後期）への協力 フィジカルヘルスフォーラム メンタルヘルス講演会（大学生のメンタルヘルス危機対応と自殺予防）		九州大学

5. 定期健康診断表

平成 21 年度												
九州大学定期健康診断票(A)												
										学生番号 ID		
フリガナ		性別 Sex		学部生 Undergraduate		修士 Master		博士 Doctor		その他 Others		
氏名 Name		年齢 (4月1日現在) Age(As of 4/1)		学部 (学府) School		学科 (専攻) Dept		学年 School year				
生年月日 Birthday		西暦 YY MM DD		オ Y								
受検月日 Date		該当する項目□に○をつけてください。										
M M D D 11 12 13 14		(1)今までに病気などで入院や手術を受けたことがありますか？										
		□ イイネ		病名		いつ頃						
		□ ハイ		□ 結核								
				□ 気胸								
				□ その他 ()								
		(2)現在、どれに該当しますか？										
		□① 糖尿病 (とくに医療機関の受診はしていない)										
		□② 医療機関に通院 (または入院) している										
		□③ 慢性の病気などで学校や日常生活への支障がある										
		□④ 心身の不調で相談を希望している										
		②~④に答えた方は、病名等を記載して下さい。										
連絡先 Means of contact:												
現住所 (〒 -) Address												
携帯電話 Cell phone - -												
電話 Phone - -												
E-mail												
研究室名 Name of lab.										内線 Ext. No. ()		
〒 - - 国 Country												
保護者名 Name of parent										電話 Phone - -		
内科	問診-診	診断所見 ※ 診断所見及び判定(カラム18)をご記入下さい										
	不要 要 1 2 印	所見なし 所見あり	疾患名	医療の状況	療養-状況	判定 16	異常チェック					
			①	□経過観察中 □支障なし	□支障あり	特記事項なし (健康)	1	既読				
			②	□経過観察中 □支障なし	□支障あり	健診証明書 記載 不要	2	内科				
				□経過観察中 □支障あり		健診証明書 記載 要	3	印				
身体計測	身長	体重	体脂肪	BMI	腹囲	BMI						
	17 18 19 20 cm	21 22 23 24 kg	25 26 27 %		28 29 30 31 cm	23	25					
血圧	収縮期血圧	拡張期血圧	脈拍	収縮期血圧	拡張期血圧	脈拍	血圧					
	スクリーニング 一回目 二回目	一回目 二回目	一回目 二回目	一回目 二回目	一回目 二回目	一回目 二回目	1	2				
胸部X	間接撮影番号	間接番号が「00000」と記入されている人は、直接撮影が必要です。間接撮影は受けしないで下さい。(回収時に日時をお知らせします。) また過去に直接撮影をうける指示なので人は受付に相談してください。										
	59 60 61 62 63											
尿検査	蛋白	糖	M	再検月日-印	蛋白 糖							
	1 2 3 4 5 6	1 2 3 4 5 6	1		1	2						
心電図	所見	二次検査										
	68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 N SA AF SB ST SVPC VPC RAD LAD LVH RVH 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 LAD RAD IRBBB CRBBB LBBB V-II III WPW AST Other	二次検査 不要 要 1 3 4										
判定	項目	既読	内科	血圧	(キャンパス)		判定		証明書 自動発行			
	二次月日				六本松 藤田 病院 東京 伊都		健康 要二次 保留 1 2 3		不可 要二次 保留 1 2			
	項目	既読	内科	血圧								
	二次月日											
	項目	ECG	X線	BMI								
	二次月日											

	フリガナ 氏名	学部 (学前)	学部生 MC DC その他()	年	学生番号			
精 密 検 査 (B)	内科	月日 () 11 12 13 14	月日 () 15 不要 要 1 2	病院紹介 不要 要 1 2	医療機関名 () 診察名 ()	内科(20) 17 18 19 生活 医療 回数		
	血 圧	月日 () 20 21 22 23 収縮期血圧 拡張期血圧 脈拍 24 25 26 27 28 29 30 31 32	月日 () 33 34 35 36 収縮期血圧 拡張期血圧 脈拍 37 38 39 40 41 42 43 44 45	月日 () 46 47 48 49 収縮期血圧 拡張期血圧 脈拍 50 51 52 53 54 55	月日 () 56 57 58 59 収縮期血圧 拡張期血圧 脈拍 60 61 62 63 64 65	病院紹介 不要 要 1 2	診察名 () 医療機関名 ()	血圧(P) 66 67 68 生活 医療 回数
	胸 部 X 線	撮影判定 20 乳影 肺野 心陰影 その他 E A B C	月日 () 21 22 23 24 撮影番号 25 26 27 28	月日 () 29 30 31 32 撮影番号 33 34 35 36 37 38	直接判定 20 不要 精密 6ヶ月 1年後 1 2 3 4	医療機関名 () 診察名 ()	文庫(20) 100 101 102 生活 医療 回数	
	尿 二 次	月日 () 100 104 105 106 蛋白 107 - ± + 2+ 3+ 4+ 1 2 3 4 5 6	月日 () 108 112 113 114 糖 109 - ± + 2+ 3+ 4+ 1 2 3 4 5 6	月日 () 115 116 117 118 潜血 119 - ± + 2+ 3+ 1 2 3 4 5	PH			
尿 (蛋 白)	100 104 105 106 蛋白 107 - ± + 2+ 3+ 4+ 1 2 3 4 5 6	108 112 113 114 糖 109 - ± + 2+ 3+ 4+ 1 2 3 4 5 6	115 116 117 118 潜血 119 - ± + 2+ 3+ 1 2 3 4 5	PH		尿蛋白(k) 119 120 121 生活 医療 回数		
尿 (糖)	病院紹介 122 不要 要 1 2	診察名 () 医療機関名 ()				尿糖(g) 123 124 125 生活 医療 回数		
心 電 図	月日 () 126 127 128 129 再EOG 130 なし あり 1 2	再EOG結果 ()	病院紹介 131 不要 要 1 2	診察名 () 医療機関名 ()		心電図(2E) 132 133 134 生活 医療 回数		
備 考								
コ ー ド 表	*生活矯正 身体重 脈拍数 血圧値 糖質 尿酸値 尿酸値 尿酸値 A B C D P R		*尿糖 尿糖値 尿糖数 尿糖計 1 2 3		*回数 年1回 年2回 年3回以上 1 2 3		証明書自動発行 135 30 11	

人事等の一覧

教職員・兼任教員	113
非常勤講師	115
学医	116
保健管理専門委員会名簿	117

教 職 員 (平成 22 年 3 月 31 日現在)

センター長		大 柿 哲 朗		副センター長		一 宮 厚	
健康科学第一部門 (運動・スポーツ科学)				健康科学第二部門 (健康医学・心理学)			
部 門 長	教 授	橋 本 公 雄	(スポーツ心理学)	部 門 長	教 授	上 園 慶 子	(内科学・時間生物学)
	教 授	大 柿 哲 朗	(運 動 生 理 学)		教 授	山 本 和 彦	(内科学・時間生物学)
	教 授	西 村 秀 樹	(スポーツ社会学)		教 授	一 宮 厚	(神 經 精 神 医 学)
	教 授	熊 谷 秋 三	(健康・運動疫学)		准教授	丸 山 徹	(内科学・循環器病学)
	准教授	齊 藤 篤 司	(運 動 生 化 学)		准教授	入 江 正 洋	(心身医学・産業医学)
	准教授	山 本 教 人	(スポーツ社会学)		准教授	永 野 純	(内科学・心身医学)
	准教授	杉 山 佳 生	(スポーツ心理学)		准教授	福 盛 英 明	(健康心理学・臨床心理学)
	准教授	林 直 亨	(応 用 生 理 学)		准教授	眞 崎 義 憲	(呼吸器内科学・健康科学)
	講 師	高 柳 茂 美	(スポーツ心理学)				

事務系職員

事務補佐員	高 原 由 紀 子
事務補佐員	成 水 貴 代
事務補佐員	福 嵩 澄 恵
事務補佐員	下 川 峰 子
事務補佐員	吉 村 よ し 子
事務補佐員	藤 尾 幸 子
事務補佐員	田 川 久 美 子
事務補佐員	高 尾 寿 美 子

技術系職員

技術職員	中 山 博 子	看 護 師
技術職員	松 園 美 貴	保 健 師
技術職員	戸 田 美 紀 子	保 健 師
技術補佐員	田 中 朋 子	看 護 師
技術補佐員	谷 川 麻 梨 子	保 健 師
技術補佐員	福 盛 文 恵	保 健 師
技術補佐員	工 藤 淳 子	保 健 師
技術補佐員	山 口 祥 子	保 健 師

兼任教員 (平成 22 年 3 月 31 日現在)

氏 名	所 属・職 名
北 山 修	大学院人間環境学研究院・教授
久 保 千 春	大学院医学研究院・教授
吉 良 潤 一	大学院医学研究院・教授
鈴 木 孝 彦	情報基盤研究開発センター・准教授

健康科学センター内委員会委員名簿（平成 21 年度）

委員会名	委員名	任期	
副センター長	一宮	1	21. 4. 1～22. 3.31
マスター・プラン委員会	大柿, 一宮, 橋本, 上園, 山本(教), 熊谷, 丸山	1	21. 4. 1～22. 3.31
部門長	橋本（健康科学第一部門）	2	20. 4. 1～22. 3.31
	上園（健康科学第二部門）		20. 4. 1～22. 3.31
研究交流委員会	大柿, ○一宮, 林, 齋藤, 丸山	2	20. 4. 1～22. 3.31
教育・健康管理部担当者会議代表者	橋本, 上園	1	21. 4. 1～22. 3.31
健康教育社会交流委員会	杉山, 山本(教), 入江, 眞崎		21. 4. 1～22. 3.31
人事委員会	大柿, 橋本, 林, 一宮, 永野		21. 4. 1～22. 3.31
総務委員会	大柿, 杉山, 林, 山本(教), 上園, 福盛, 眞崎		21. 4. 1～22. 3.31
自己点検・評価委員会	大柿, ○熊谷, 林, 上園, 丸山		21. 4. 1～22. 3.31
倫理委員会	大柿, 一宮, 林, 齋藤, 丸山, 高柳, 馬場園*	2	21. 4. 1～22. 3.31

○印は委員長, △印は副委員長, *外部委員

非常勤講師（平成21年度）

氏名	所属・職名	任期
精神保健相談		
鬼塚 俊明	九州大学病院精神科神経科・助教	21.4.1～21.4.30
織部 直弥	九州大学大学院医学系学府・大学院生	21.5.1～22.3.31
横田 謙治郎	九州大学病院精神科神経科・助教	21.4.1～22.3.31
川島 範子	こころのクリニックやまがた・医師	21.10.1～22.3.31
学生相談		
平井 達也	九州産業大学・講師	21.4.1～22.3.31
吉永 亮治	フリー	21.4.1～22.3.31
太田 あや乃	フリー	21.4.1～22.3.31
斉藤 明子	フリー	21.4.1～22.3.31
高野 尚子	福岡カウンセリングセンター・代表	21.4.1～22.3.31
中園 照美	フリー	21.4.1～22.3.31
峰松 修	九州産業大学・教授	21.4.1～22.3.31
吉田 加代子	フリー	21.12.1～22.3.31
馬場 弓歌	フリー	22.1.1～22.3.31
健康相談		
鳥居 孝子	九州大学病院神経内科・助教	21.4.1～21.7.15, 22.1.16～22.3.31
古田 興之介	九州大学病院神経内科・助教	21.7.16～22.1.15
青木 孝友	九州大学大学院医学系学府・大学院生	21.4.1～22.3.31
浦田 真吾	九州大学大学院医学系学府・大学院生	21.4.1～22.3.31
小田原 淳	九州大学大学院医学系学府・大学院生	21.4.1～22.3.31
薦田 正人	九州大学大学院医学系学府・大学院生	21.4.1～22.3.31
野田 久美子	九州大学大学院医学系学府・大学院生	21.4.1～22.3.31
島 隆宏	九州大学大学院医学系学府・大学院生	21.4.1～22.3.31
上田 尚靖	九州大学大学院医学系学府・大学院生	21.4.1～22.3.31
隅田 幸佑	九州大学大学院医学系学府・大学院生	21.4.1～22.3.31
門脇 雅子	九州大学大学院医学系学府・大学院生	21.4.1～21.7.15
原田 由紀子	九州大学大学院医学系学府・大学院生	21.4.1～21.7.15
山内 拓司	九州大学大学院医学系学府・大学院生	21.4.1～21.7.15
栗山 拓郎	九州大学大学院医学系学府・大学院生	21.7.16～22.3.31
磯部 大地	九州大学大学院医学系学府・大学院生	21.7.16～22.3.31
門脇 賢典	九州大学大学院医学系学府・大学院生	21.7.16～22.3.31
白川 剛	九州大学大学院医学系学府・大学院生	21.7.16～22.3.31
奥 誠道	九州大学大学院医学系学府・大学院生	21.7.16～22.3.31
笹栗 俊之	九州大学医学研究院・教授	21.4.1～22.3.31
三輪 宜一	九州大学医学研究院・助教	21.4.1～22.3.31
馬場 園明	九州大学医学研究院・教授	21.4.1～22.3.31
桑原 一彰	九州大学医学研究院・准教授	21.4.1～22.3.31
森山 智彦	九州大学病院第二内科・助教	21.5.1～21.10.15
土井 康文	九州大学病院第二内科・助教	21.10.16～22.3.31
尾前 豪	今津赤十字病院・内科部長	21.4.1～22.3.31
佐々木 悠	フリー	21.4.1～22.3.31

平成21年度九州大学学医一覧

平成21年4月1日現在

健康科学センター

診療科目名	医師氏名	任期開始年月日	新患日	再来日	外来電話	備考
九州大学病院						
内科	堀内孝彦	17年10月1日	月～金	月～金	5302	救命救急センター 642-5871
	岩瀬正典	20年4月1日				
	伊藤鉄英	12年4月1日				
心療内科	岡孝和	20年6月1日	月・木	火・水・金	5335	
神経内科	栄信孝	21年4月1日	火・木・金	月・水	5349	
循環器内科	廣岡良隆	19年4月1日	月～木		5371	
産科婦人科	小林裕明	21年4月1日	月～金 (予約制)	月～金	5409	
第一外科	永井英司	20年4月1日	火・木	火・木	5453	
第二外科	矢野篤次郎	19年10月1日	月・水・金	月・水・金	5479	
整形外科	三浦裕正	10年7月1日		金	5504	
脳神経外科	溝口昌弘	21年10月1日	月・水・金	月・水・金	5533	
心臓外科	中島淳博	19年3月1日	月・水・木	水・木	5565	
皮膚科	師井洋一	18年4月1日	月・水・金	火・木	5597	
泌尿器科	関成人	19年4月1日	火・木	月・水・金	5615	
精神科神経科	川寄弘詔	19年10月1日	火・木	月～金	5640	
眼科	宮崎勝徳	19年4月1日	月・水・金	月～金	5660	
耳鼻咽喉科	松本希	21年4月1日	火・木	月・水・金	5681	
放射線科	田嶋強	21年4月1日	月・水・金	月～金	5705	
放射線部	畠中正光	17年10月1日				
総合診療科	林純	3年7月1日	月～金	月～金	5300	
九州大学病院（歯科医療センター）						
口腔機能修復科 （歯内治療科）	吉嶺嘉人	20年8月1日	月～金	月～金	6430	
口腔機能修復科 （咬合補綴科）	坂井貴子	18年4月1日			6435	
口腔機能修復科 （義歯補綴科）	築山能大	19年4月1日			6440	
口腔顎顔面外科 （顎口腔外科）	大部一成	17年10月1日			6445	

受付時間

新患	8:30～11:00（窓口受付）		
再来	8:30～11:00（窓口受付）	8:15～17:00（自動再来受付機）	

平成 21 年度保健管理専門委員会委員名簿

(平成 21. 4. 1 現在)

地 区 等	部 局 名	氏 名	任 期
委員長	健康科学センター長	大 柿 哲 朗	
箱崎文系地区	大学院法務学府	松 生 光 正	平成 22. 3. 31
箱崎理系地区	大学院システム生命科学府	巖 佐 康	平成 22. 3. 31
病院地区	医学部	橋 爪 誠	平成 22. 3. 31
筑紫地区	大学院総合理工学府	小 山 繁	平成 22. 3. 31
大橋地区	芸術工学部	田 村 良 一	平成 22. 3. 31
伊都地区	工学部	松 井 紀久男	平成 22. 3. 31
高等教育開発推進センター	高等教育開発推進センター	福 留 留 美	平成 23. 3. 31
九州大学病院	九州大学病院	本 田 浩	平成 23. 3. 31
健康科学センター	健康科学センター	上 園 慶 子	平成 22. 3. 31
	学 務 部 長	鈴 本 司	
	筑紫地区事務部長	戸 川 英 明	

編集後記

健康科学センター年報32巻（平成21年度版）をお届けします。健康科学センターは、1978年に設立されましたので、2008年に30周年を迎え、平成21年に30周年記念誌を発刊いたしました。健康科学センターの取り組みに関してはこの年報が活動記録として残されているのですが、教育・研究・業務・社会貢献のすべてを行うことが使命の健康科学センターには、大学法人化以降、大きな荒波が押し寄せて来ています。特に、財務が緊縮されていく一方で、業務が拡大しており、教育・研究・業務・社会貢献のすべての分野をバランスよく発展することが困難になってきています。健康科学センターらしいユニークな活動や教育・研究も活発に行われている一方で、例えば新型インフルエンザへの対策や九州大学のメンタルヘルス対策の問題など、求められている課題への対処も増大しております。バランスをとりながら、かつ創意工夫のある新しい活動を模索する必要があると思われます。また、健康科学センターはプロジェクト研究等華々しい部分だけではなく、大学で生活する学生・教職員の健康をしっかりと安定して下支えすることも重要な役割なのですが、この点について、大学の中ではまだまだ十分な認識がなされていないと思われます。この年報を一読していただけたら、我々がどのくらい目に見えにくい活動を行っているかを目の当たりにしていただけるのではないかと考えております。是非私たちの活動をご理解・ご支援いただけましたら幸いです。(H.F.)

総務委員会 大柿哲朗 一宮 厚 山本教人
福盛英明* 林 直亨 眞崎義憲 斉藤篤司*
(*編集担当)

健康科学センター年報 第32巻

平成23年3月25日 印刷

平成23年3月30日 発行

発行責任者 大柿哲朗

〒816 8580 福岡県春日市春日公園6丁目1番地
(TEL 092 583 7685, FAX 092 592 2866)

発行者 九州大学健康科学センター

印刷所 城島印刷株式会社
